

< 目 次 >

1	ごあいさつ	川俣町長	佐藤 金正	1
2	発刊に寄せて	川俣町議会議員 菅野 清一様		2
		山木屋公民館 館長 廣野 隆俊		3
3	震災の記憶・山木屋では			4
4	山木屋地区復興拠点『とんやの郷』	施設長 大内 浩史		106
5	資料			111

ごあいさつ



川俣町長 佐藤 金正

このたび山木屋地区の復興のシンボルである“とんやの郷”の来場者数二十万人を記念して、六十二名の方々に筆を取っていただき、山木屋公民館の協力のもと震災の記憶を一冊の本にまとめました。

ご協力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

平成二十三年四月二十二日、国は山木屋地区を計画的避難区域としました。

そのことにより、先祖代々受け継がれてきた家、田畑、里山、地域の日常など全てのものを置き去りにして避難しなければならぬという、誰も想像すらできない事が起こってしまいました。しかし、皆さんは強くたくましく山木屋地区民の矜持を胸に、仮設住宅や避難先などで笑顔をたやさず過ごしておられました。その姿は当時県議会議員として復旧への活動していた私の目に映っていたことを今も鮮明に記憶しております。

山木屋地区は三世代、四世代などと多世代で家族の絆を感

じながらひとつ屋根の下で暮らしていました。しかし、原発事故前の三百六十四世帯の家族は、現在五百四十世帯に引き裂かれてしまっています。そのことにより、家族の愛を常に肌で感じられることが少なくなっていると思いますが、当時と変わらぬ強い絆で繋がっていると確信いたします。

原発事故から九年が経過する今、当時の記憶は決して忘れてはならない記憶としてとどめなければなりません。一方で私たちは立ち止まってはいられません。新しいことにもチャレンジし、前を向いて歩んでいかなければなりません。この「震災の記憶誌」は『立ち止まる、ふり返る、前に進む』という過程の踏み台となるものと考えます。

気持ちの揺れ動きや決断など、現在を生きる皆さまが決して忘れてはいけぬと選んだ記憶がしたためられた「震災の記憶誌」、その記憶をこの一冊をとおして共有できることは大変意味深いものです。また、私たちは確実にこの記憶を風化させることなく、後世に伝えていかなければなりません。ぜひ多くの皆さまと震災の記憶の共有ができればと思っております。

結びに、自然豊かな大地、山木屋地区の復興に全力で取り組むことを誓い、発行にあたってのあいさつといたします。

震災記憶誌発刊に寄せて



川俣町議会議員 菅野 清一

あの忌まわしい原発事故からまもなく九年目になろうとしています。放射能汚染による強制避難となり、住みなれた故郷を追われ生業を奪われ家族バラバラとなった生活は、大人はもとより幼い子供や高齢者にとってはどれほどつらい毎日であつたかと思います。

国による除染という名の大規模公共事業も終わり、避難指示が解除されてから二年になろうとしているが、未だ帰還者は高齢者を中心に350人程であり、その大半は六十歳以上の人たちです。原発事故は急速な高齢化社会を生み出し、故郷から産業を剥ぎ取りました。そして山木屋の人たちにとって何よりも大切な地域コミュニティを破壊しました。

原発事故は私たちの故郷山木屋に何をもたらしたのか、何を失ったのか、いま改めて検証する必要があると考えます。

原発事故前の二〇一一年三月まで山木屋には住民1,251人が住んでいました。

子供たちも幼稚園児、小中学校生徒併せて99人がいました。しかし新しく生まれ変わった学校には中学生4人しかいません。学校とは子供の生活の場にあるのが原則なのですから仕方ありません。除染したとはいえ放射能汚染の不安は消えることはありません。放射線による健康被害は細胞分裂の激しい子供がその影響を受けやすいということから、小さな

子供を抱える親たちは帰還を選択できません。そして何よりも、帰還しても生業が成り立たないことであります。

いま、山木屋に住所がある住民は700人余りになりました。仕事や学校、医療機関などの事情により戻りたくても戻れない人、思いが叶って戻った人、それぞれの人生と事情を抱えながらの選択です。まだまだ帰還するかどうか迷っている人、まさに悲喜こもごもの人生模様です。どちらを選択しても故郷山木屋に対する思いは変わらないのです。それは、それぞれの人生感や人格を形成してきたのは、故郷山木屋そのもののからです。

これらの事情は、避難区域の市町村どこでも共通の問題です。いま、山木屋では復興という名の下に、総額150億円という膨大な大型公共事業が取り組まれています。それでもなお多くの住民が復興を実感できないのはなぜでしょうか。それは、その多くの事業が住民の要求に基づいたものではないからです。原発避難十二市町村の人口97,300人のうち帰還者が17,000人程度しかないという現実が、何よりも物語っています。

帰還政策が正しいとするなら、年間被ばく線量20ミリシーベルト論を取り下げ、元々国自らが定めた被ばく線量1ミリシーベルト論に徹して、帰還政策の原点を物語論ではなくサイエンス論(科学論)に切り替える必要があると思います。ただし、それは国や自治体が正しい認識に立てるかどうにかかっています。憲法二十五条にもっと学ぶべきでしょう。

発刊にあたって



山木屋公民館長 廣野 隆俊

我々の住んでいる山木屋地域は、緑豊かで自然に囲まれており、人情味あふれ、隣近所仲良く暮らしていました。こうした生活が昔から当たり前だと、誰もがそう思っただけで暮らしてきました。

しかし、忘れられない平成二十三年（二〇一一）三月十一日東日本大震災、そして、その直後、東京電力福島第一原子力発電所事故が発生しました。「原発は絶対安全」と宣伝されていましたが、その安全神話が脆くも崩れ去った瞬間でもありました。山木屋の人々がどんな境遇にさらされているかと思うと、いてもたってもいられない思いでした。

原発から約四十キロメートル離れている山木屋地区は、原発立地による何らの恩恵も受けていませんでしたが、原発事故から一ヶ月後の四月に、計画的避難指示区域（一部、居住制限区域）に指定され、五月二十二日から避難が開始されました。生まれ育ってから一度も山木屋から離れたことがない人も多くいましたが、全ての人が避難を余儀なくされ、無人の地域になってしまいました。

そして六年後の平成二十九年（二〇一七）三月三十一日に避難指示が解除されましたが、帰還者は少ない現状にあります。震災前の山木屋地区の人口は、千二百五十人余りでしたが、八年後の平成三十一年（二〇一九）八月末現在山木屋に戻って来た人は、三百五十人余りと、現実には厳しいものとなつてしまいました。

また、原発事故から八年余り過ぎ記憶が段々と薄らいできています。そこで、山木屋公民館より、震災前々震災当時々震災後の現況のなどについて、十代々八十代までの各年代層に皆様に原稿執筆をお願いしましたところ、映像では見ることが出来ない心の記憶、避難した者にしかわからない心境を綴り、多くの方々から原稿を寄せて頂きました。生活環境が変わり、まだ落ち着かない中で御協力頂きました皆様に、心から厚く御礼申し上げます。

皆様から寄せていただいた貴重な震災の記憶は、次世代に読み継がれる事と思います。震災前の山木屋の姿に戻る事は時間がかかると思いますが、震災前に近い暮らしが一日も早く戻る事を希求するとともに、二度と原発災害が起こらないことを願いつつ、原稿を寄せて頂いた皆様方に敬意を表して発刊の挨拶と致します。

震災の記憶・山木屋では

順不同・敬称略

目 次

菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	大内	大内	大内	遠藤	遠藤	遠藤	遠藤	氏家	安部	遠藤	大内	氏名
多美枝	富雄	マス	幸子	泰彦	栄作	サクイ	勝久	源勝	秀一	秀一	あゆみ	恵美	貴美子	庄一	元気	令子	和子	健一	周一郎	地区
木ノ根	石森	清水	大平	大洪	問屋	大沢山	秋葉森山	木ノ根	東ノ沢	大清水	問屋	川芎	馬場平	川芎	川芎	甲鋪	八木	甲鋪	問屋	
31	30	29	29	27	25	22	21	20	19	18	17	16	14	13	11	8	8	7	5	頁

鳴原	鳴原	鳴原	鳴原	鳴原	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤	紺野	紺野	紺野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野
明寿	春男	秀雄	正	勝由	盛雄	美佳子	正明	信雄	新一	茂	覺雄	希予司	正寿	早那	良弘	好広	文夫	りつ子	典保	福明
蔵平	坂林山	大松平山	蔵平	蔵平	坂下	坂下	石森	入久保山	菅下	坂下	川芎	問屋	問屋	問屋	平山	世戸四山	大沢山	向羽山	北向山	木ノ間山
65	62	61	58	57	56	55	51	48	47	46	45	44	42	41	38	37	36	35	33	32

菅野	渡邊	渡邊	渡邊	村上	山口	宮地	三浦	廣野	廣野	本田	廣野	廣野	廣野	廣野	廣野	廣野	廣野	広野	高橋	鳴原
清一	直一	義明	とくい	仁	功	勝志	彩	隆俊	吉雄	勝信	義孝	勝久	新市	太	博子	俊之	晶彦	清美	正春	利彦
下田代	地切	広久保山	広久保山	馬場平	町内	町内	鼠喰前	川芎	川芎	赤坂	下戸草	家野	長橋	細畑	羽土山	川芎	家野	細畑入山	木ノ合木米山	新屋敷
101	100	99	97	95	94	93	86	83	82	81	79	78	76	74	73	71	69	68	67	67

大内 周一郎 (問屋 六十代)

震災の記憶・山木屋では

ごく普通の金曜日、平成二十三年三月十一日、午後二時四十六分に起きた、数百年に一度の大地震、とんでもない日々の始まりでした。それは未曾有の災害（地震大きな揺れ、大津波から電力供給停止による原子力発電所の炉心溶融、六年を超える避難生活）が引き起こす難題に、次々と決断を迫られる日々となりました。

それは危機が迫ってきたときに表れる人々の心、良くも悪くも人間性（本性）との遭遇の始まりでした。

私はその時、福島市内十三号線を挟んでみずほ銀行の向かいの二階に居りました。

『ギンギューン—ギンギューン—』携帯が鳴り、何かなと思うまもなく、下から突き上げられるようにドドンとゆれが始まった。少し様子見ようと思ったが今までのものとは違いを感じ、よるめきながら部屋を出て階段の壁によりかかって、やっとの思いで外に出た。

走っている車もあったが、ほとんど次々に路肩に止まった。一トシ車がポンポン跳ねた。レンガ張りの建物が大きく揺れ剥がれ落ち、今にも崩れ倒れそうに右に左に傾く…。一度止まりかけた揺れと足元に感じる『突き上げ』『うな

り音』が続き、ただならぬ事態が起こっていることを感じながら腰を落とし、長い長い揺れが収まるのを待った。

治まるのを待って、部屋の机引き出し、書庫扉大きく開いて散乱状態を仮整理して福島市内の会社本社事務所を後にしました。他の部署、社員、自宅、家族は無事か、不安はよぎるが、既に携帯は通じない。

まず地震の被害状況・安否を把握したかったが、電気が止まると情報取得手段を含め、生活が成り立たなくなってしまうことを思い知らされた。

足の踏み場もないほど、自宅の散乱状態に、どこから手を付けていいかわからないほどでした。電気が止まって炊事、トイレ使用にも苦労。

急いで帰る車の中、車搭載TVで大津波に町、車、人々が飲み込まれる映像が実況されていて、東北沿岸地域は深刻な悲劇の大被害に見舞われていることを知りました。

そして災いは続きます。夕刻には原子力発電所への送電が停止していること、自家発電も不能に陥っていることを知り、刻々と迫りくる炉心溶融の危機、炉心爆発・放射能汚染の恐怖が私たちの思考を混乱させ正常な行動に影響を与えました。

やがてガソリン、水、食料品、生活物資が店頭から…消えた。

ここから今までに経験したことがない事態への対応が始

まりました。

雇われマダム（社長）での震災経験はまた別の機会に話したいと思いますが、一つだけ・・・

危機に陥った時ほど、深層（人間性）（欲望）が浮き彫りになるものだなーということ。

危機対処判断には価値観、倫理観も必要です。お金中心ではない。

大津波で家族、家財を失い、身も心も限界を超えていたのに、あの整然とした行動、ガマンをみて、思わず涙が出てしまったこと、忘れることが出来ません。

今となっては

天災なのか人災なのか、そのどちらも当たっている。

起きてしまった災害にどのように対処し再建を図るのか、そしてやがて再び起きるであろう災害にどのような対策を用意するのか。

国、行政だけの課題ではない、自分自身、子々孫々にまで引き継がれるように備忘対処すべきだと思います。

多くの取引先から物心両面で支援、勇気づけられたこと、反面言っている事とやっている事が矛盾していることに自他ともに気づかされ、大いに勉強になりました。

九十年近く続いた家業の小売業も、避難解除後に閉めることになりました。震災が有る無しにかかわらずいずれ商圈に住まわれる方の減少でこうなることは予想していたところではありましたが、十年前倒しになってしまった。長きにわたりご愛顧頂いたことに感謝しています。次の家業は次の世代に育ててもらう。芽だけは私の手で育む決意。

山木屋、自然豊か、過疎高齢化進む・・・も、次代への手本となる生活リズムを見つけ出し、我々世代が実践、楽しく心豊かに暮らす姿を見せることができれば・・・、次世代の方々も後に続いてくれる（戻る）でしょう・・・そうなれば、「未曾有の災害も福となる」・・・のではないのでしょうか。

遠藤 健一 (甲鋪 七十代)

生活支援相談員を経験して

平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災と東京電力第一原子力発電所の事故は、山木屋の皆さん全員が避難を余儀なくされた瞬間でした。

四月二十二日におおむね一カ月をめぐり、他の場所に避難することを求める「計画的避難区域」の指定が発表され、町長の避難指示を受けて、千二百五十二人が山木屋の地を離れることになるのは、誰もが予想できませんでした。

あの時、長期の避難になると知ったときの皆さんの落胆は、計り知れないものがあり、地域や人の和(輪)が、原発事故によって壊れ一変してしまいました。

農村広場及び、町体育館仮設住宅に行政区単位に入居することになり、少しずつ落ち着き始められたとき、避難者支援を目的とした生活支援相談員が、町社会福祉協議会に配置されることになり、私は、同年七月から町社会福祉協議会の職員として勤務し、避難者の皆さんに寄り添う仕事を始めました。が、今まで経験したことのない大震災のため、活動マニュアルはなく、手探りのなかでの訪問活動となりました。仮設住宅、借り上げ住宅に入居された皆さんが、安心して

毎日の生活を送れるように話し相手になり、安心感を持っていただくため、国・県の情報提供・制度の利用方法を、膝を交えながら話し合いを行なってきました。

一人ひとりに向き合っているか、話しをよく聴けているかなど、自分自身に問いかけながらの訪問となりましたが、これらの活動から、長期化する避難生活で先が見えない、慣れない避難生活で体調を崩され入院する、介護保険でデイサービスを利用したい、家族間の交流が少なくなった等の相談があり、これらの課題を関係機関に繋いだり、サロンを立ち上げて交流の機会を増やしたりしました。

この間、皆さんにおかれましては、それぞれの立場で真剣に向き合っていたいただき、ありがとうございました。

避難するときも一緒、帰る時も一緒の気持ちで、日々業務に当たってまいりましたが、皆さんのご協力で三年間の勤務を終え、後任者に引き継ぐことができました。

皆さんからは、慣れない避難生活の大変さ、山木屋での生活の様子等を拝聴でき、また、私自身が励まされることもあり、貴重な体験をさせていただきました。

改めて感謝申し上げます。

元の山木屋に戻るには時間がかかりますが、これからも、人と人、地域と地域のつながりを大切にしていきたいと考えています。

安部 和子 (八木 六十代)

震災の記憶

二〇一一年三月十一日 午後二時四十六分。

突然の激しい地震！ まさか、それが原因で長期の避難生活になるとは。その時は、夢にも思いませんでした。

自宅があるのに、そこに住めない情けなさ。たった四人家族が三か所にバラバラに避難することになってしまった不安。子供達から里帰りという楽しみを奪ってしまった無念さ。できれば聞きたくない金銭的な妬み話も耳に入り、どこにぶつけていいかわからない怒りは、今もそのままです。

避難生活二年く三年ぐらいは、山木屋に戻りたい気持ちが強く、希望もありました。

しかし、余りにも長期間すぎて、希望から絶望、そして諦めへと気持ちの変化がありました。

家族と何度も相談した結果、現在の生活に至っています。新たな地域での交流にも少しずつ慣れながら、日々暮らしています。

山木屋の皆様とお話したいときは、遊びに行きます。その時は、宜しくお願いいたします。

氏家 令子 (甲鋪 六十代)

平成七年夏、私の主人は四十八歳という若さで病に倒れ他界しました。我家では、平成二年から七年にかけて、父・母・主人と、たて続けに亡くなりました。仏事が十数年に渡り執り行われました。お屋敷の皆様には、大変お世話様になりました。私は一男三女の四人の子供に恵まれ、主人が病に倒れた時、末娘は六年生でした。たばこを作っておりましたが、これを機に縫製工場に勤めることにしました。子供たちはそれぞれに成長し、結婚もし、私は一人暮らしの生活が始まり、かわるがわる孫達が泊まりに来るのが楽しみな日々を過ごしておりました。定年になったら、野菜を作り、花々を育て、残された人生を謳歌しようと、自分なりにラベンダーを植え、アヤメを植え、少しずつ始めていた矢先の事でした。

平成二十三年三月十一日、縫製工場で仕事中に大きな揺れ「あつ、地震だ。」

すぐ止むのかと思いきや、ますます大きく止むことを知らない。皆外に出る。雪がちらつき、寒さと恐ろしさにふるえた。工場の屋根がバツフン、バツフンと浮き上がった。見たことのない情景だった。地面は大きく波うち、立っているのがやっとだった。皆でかたまり、車につかまった。二階の窓

は落下しガラスが飛び散った。会社の指示のもとに帰宅した。我家に帰ると土壁が落ちていた。風呂のぐしの瓦も落ちていた。まっすぐ隣に行く。隣のどんな様子は裏山で仕事をしていた。急な土手を下りてくるのはやつとだった。

「いや、おっかながった。」
と、言っていた。

停電になり電気はつかなかった。水は山からの引き水だったので簡易コンロで夕食は作れた。寒かったが余震が続くので暖を取ることはできなかった。寒空に星は輝き、ヘリが轟音をたて飛び交った。頭から布団をかぶり、まるくなつて眠った。息子はしばらく空を見上げていたとの事。

次の日、会社に行き、おおざっぱにかたづけした。自宅待機となる。

その日の夕方、息子が山木屋に上って来る。

「おかあさん、原子炉爆発したんだから逃げなきゃだ。速く用意して」
と。

そんな言葉に懷中電灯をたよりに手探りで衣類をまとめ、隣に息子の所に行く事を告げに行く。隣の人達は、行くところないからどこにも行かないとのこと。帰りぎわに
「んじゃ、元気でない。」

と、別れた。この言葉は今でも悔いる。

「取り残されたようで、がっかりした。」

と、時が過ぎ再会した時に告げられ、反省した。申し訳なかったとあやまった。

福島の子のアパートに避難した。息子といっしょに通勤した。ガソリンが不足し、あつちのスタンドもこつちのスタンドも、長蛇の列ができた。食品も店の棚には何もない。みんな危機を感じ買いしめたのだろう。皆心理はいっしょだった。

水がなく、お風呂にも入れず、がまん出来なくなつて土湯温泉に入れるところがあり、ガソリンたいて家族で行く。皮肉にも次の日から水が出るようになった。

三カ月、福島から川俣に通った。

六月、仮設住宅（農村広場）に入居することが出来た。しかし、圧迫感と暑さと臭いに体調をくずす。

会社の人達の陰口、月十万の生活費は波紋を呼んだ。私の実家は避難区域ではなかった。分かち合える人がいなかった。私だけが避難民だった。同級生にも誰もいなかった。時が経つにつれ、妬みだけがむけられるようになった。身内でさえ妬むのだから、他人はあたりまえか、と思いつつ、情けなさや哀れさと寂しさに打ち砕かれた。ひとり大粒の涙が頬を伝った。

山木屋にいる時は、水もふんだんに使っていたが、メータ

ーがついている。慣れるまで節約した。野菜もなかなか買えなかった。

避難まもなく、山木屋には帰れないと思い福島に同居前提で家を新築した。そして、山木屋の家を残すのか、壊すのかを決断しなければならぬ日が迫る。子供達とも話し合い、壊すことに決めた。決めたものの気持ちは揺らいだ。眠れぬ日が続いた。安定剤を処方してもらい、飲む。

数カ月かけて家の中の物を処分した。なかなかはかどらなかった。物を捨てるってなかなかできないものですね。何回にも分けてやつとの事で処分した。心が痛んだ。どつと疲れた。

お祓いをしてもらうのに、家の中を掃除した。土間もあるので、すぐ青カビになってしまう。使っていなかった土間の空間は、獣の悪臭が鼻をついた。掃除を終え、黒板に「守れなくてごめんなさい」と書いた。近親者に声をかけ、ご足労頂きお祓いを執り行った。皆、思い出しにひたっていた。子供たちがいつの間にか黒板に「ありがとう」と書いていた。

避難解除の日が決まると、仮設から次から次と出ていった。自分の身の振り方を決めなければならない日が迫った。息子のところへ行きたくない。自分の気持ちは決まった。まだ、一人で生活できる自信があった。復興住宅があいている。そんな話が耳に入った。すぐ応募し、入居できるようになった。「勝手にして。」

息子からひどくおこられた。準備は何も手伝ってもらえなかった。

「自分で何でもやればいいよ。」

冷たい視線を感じた。そんなこと言っても引越すには二人で手伝ってくれた。

山木屋天王老人クラブに入り、温泉旅行に行き、温泉にたっぷり満喫し、宴会では大きな声で笑ってリフレッシュして帰ってきます。

吹矢も楽しみの一つです。景品のトイレットペーパーをいただくのが、最高に気分がいい。終わった後のお茶も楽しい。川俣から山木屋に通い、土手の草刈り、草花を植え、少し野菜を作り、裏山の山野草を見ながら散策し、落葉を踏みしめる。土の香りが漂う。春から、かたくりが咲き、二輪草が咲き、ひとり静が咲き、山シヤクヤクが咲き・・・秋までつぎからつぎと、かわいい花が咲きほこる。なんてすてきなんだろう。

今年は畑に電気柵を回したので、いのししの害から守ることができた。

この頃、母親に良く似てきた。ほおの筋肉のたるみまで。あはっ・・・
残された時を、楽しみながら暮らしたい。

遠藤 元気 (川芎 三十代)

震災の記憶・山木屋では

あの日から八年。どれだけ時が流れても、昨日のことにように覚えています。忘れられない、忘れてはいけない、人生を大きく変えた東日本大震災。

一九八八年十一月二日。私はこの自然豊かな山木屋で生まれました。幼稚園、小学校、中学校と山木屋で過ごした生粋の山木屋人です。両親共働きだった私は、祖父母と過ごす時間が多く、遊び相手は祖父母でした。そんな祖父母が大好きで、心からかわいがってもらいました。いわゆる、「おじいちゃんおばあちゃんっ子」です。私にとって山木屋の礎は祖父母と言っても過言ではありません。

また、幼い頃から兄弟の影響で習い事をさせてもらっていた私。その中で唯一、故郷でやっていた活動が二〇〇一年に故郷の自然をテーマに曲を創作し、地域に根ざす若者の育成と発展を目的として結成した「山木屋太鼓」です。

この立ち上げの一人として関わっていたのが私の母親。母の子供たちに対する想いは熱く、作曲や指導、私もその中の一人として様々なことを教えてもらいました。山木屋太鼓で活躍する私を祖父母も喜び、いろいろなところへ応援に駆け

つけてくれました。故郷Ⅱ和太鼓と、この頃からなっていたのかもしれない。

高校も大学も福島市、それでも私と故郷を繋いでくれていたのが和太鼓でした。大学を卒業し、地元にて就職するも特に夢もなく過ごしていました。

そんな中、二〇一一年三月十一日東日本大震災。あの時の揺れは今でも鮮明に覚えています。外へ避難すると地面がまるで生きているかのようにうねり、車がバウンドしていました。家に戻ると屋根の瓦が落ちていて家の中の棚にあるものがほぼ落ちて悲惨な状況。電気も使えず、余震が何度も襲ってきました。同居している母も私も怪我などはなく不幸中の幸いでした。

数日はそれぞれの車で寝泊まりし、ラジオが唯一の情報入手手段でした。日に日に行方不明、被害者の数が増えていく。凍てつくような寒さとともに心が引き裂けそうな思いだったのを覚えています。

数日後にようやく携帯電話が繋がり、県外にいる父や兄弟とも連絡が取れてほっとしたのも束の間。電気が使えるようになってテレビをつけた瞬間、目を疑いました。この世の出来事とは思えない大津波。ありとあらゆるすべてのものが流れ、火災がおき、悲鳴や悲痛な思いが溢れ、無力な自分がテレビの前で立ち尽くしていました。

やめてくれ、止まってくれ、これ以上のことが起きないでくれ。そう願うしかありませんでした。

普通の生活もままならない中で、もちろん山木屋太鼓の活動もできるわけがなく、これからどうなるか分からない不安の中で過ごすしかありませんでした。

そこに追い打ちをかけたのが福島第一原子力発電所の爆発です。日に日に放射能が及ぼす避難区域が広がる中、ついに山木屋地区も計画的避難区域に指定されました。信じたくない気持ちと、またすぐに戻ってこられるという期待を胸に川俣町内のアパートへ避難しました。

祖父母は震災前に他界していたため山木屋を離れるというづらい気持ちにさせずにすんで良かったと、今になって感じています。

この避難が、地域と人をバラバラにしました。

山木屋太鼓の活動も再開はするも、人が集まらず、放射能への恐怖から活動再開へも賛否両論があり、辞めていく子どもたちもいました。練習する場所も転々とする中で、このままなくなってしまうかもしれないとまで思った時もありました。

私にとって唯一の故郷を繋いでいてくれる山木屋太鼓の灯火を消したくない。体は避難しても心まで避難したくない。

心の宝だけは失いたくない。この一心で仕事を辞め、ソロ和太鼓奏者として生きることを決めました。また、この頃から山木屋太鼓の会長を任せられ、灯火を消すことなく次世代へ繋いでくことも決心します。

そんな山木屋太鼓と私を支えてくれたもの。それは、「ご縁」です。

震災後の私たちを心配し県内外、また海外からも支援、応援してくださる方々がいました。そのおかげさまで現在も活動ができていますし、様々な交流も続いています。

震災がなければ多くのものを失うことはなかったし、避難もしないですんだ。でも、震災があつたからこそ繋がった東北を愛するたくさんの人に出会えた。その人たちから学び、故郷を大切にしたいという気持ちが芽生えた。暗闇を嘆くよりもここからがスタートで、自分が光となることで暗闇を照らしていきたい。当たり前前に感謝し、繋がりを大切に、山木屋太鼓はこれからも歩んで行きたいと思っています。

避難が解除された二〇一七年三月三十一日。私は山木屋へ帰ることを家族との相談で決めました。理由は二つ。一つ目は、家族や親戚が集う場所は山木屋であってほしいこと。二つ目は、山木屋の自然が大好きだからです。生まれ育ったくさんの思い出がある山木屋で家族が集まることがこんな

に嬉しいこと、素晴らしいことだということを身に染みて感じています。もちろん、今現在も避難している地域の方々が多くいらつしやる中で、自分だけが良くなったからそれで終わり、ではなく、そういった現状があることを忘れず、山木屋地区が復興のモデルとなれるような取り組み、また支援ができる体制になっていければと思います。

祖父母が教えてくれた心の故郷。母が繋いでくれた山木屋太鼓。それが私の原点です。たくさんのご縁があつて今の自分があります。そのすべてに感謝し、力に変えて自身の活動へ生かしていきます。そしてその経験や繋がりを故郷へ、山木屋太鼓へ恩返ししていける人間になりたいと思います。

ピンチをチャンスに変えていける可能性が、この山木屋にはあると思っています。

遠藤 庄一 (川芎 六十代)

3・11から現在までを振り返って

3・11の当日は、私は障がい者施設を運営しておりましたので、施設の仕事で山木屋にありましたイチゴのハウスの中で営業をしておりました。突然ハウスが揺れだしイチゴを入れる箱が散乱し、中にいられる状態ではなかったので、全員で外に出ました。山は揺れるは、電線は揺れるはで、立ってられないほどの今まで経験したことのない揺れでした。揺れが収まるのを待って自宅に帰って家の周りを点検した所、屋根の瓦が数枚落ち、ガラスにヒビが入ったくらいでした。施設の方が心配でしたので、施設に行ったところ、物は散乱し、壁にはヒビが入り、天井が落下していて、運営できる状態ではなかったもので、役場に報告に行きました。その日のうちに役場の方が来て、この建物は危ないから使わないでくれとのこと、使用禁止となりました。

夕方にもなり家に帰ったら、電気はつかないは、共同の水道も出ないので、隣も出ないのかを聞きに行ったところ、浪江の方から来たというお客さんに会いました。そこで、すごい津波が来て家が流されたという事を知りました。

水道も二日から三日かかり修理し、通ったと思ったら、今度は東京電力の発電所が爆発をして、避難を余儀なくされま

した。

飯館村・山木屋地区の施設利用者の避難に、住宅の世話を五件しました。自分は団地の五階を借りて住むようになりました。二カ月くらい住んではみたものの、五階までの上がり下がりが大変なので、知り合いの工務店に行き、どこかアパートがないか聞いたところ、二三日で空くところがあると聞き、すぐそのアパートを借り、避難解除されるまで住むようになりました。

そのうちに避難解除の話が出されるようになりました。町としても避難解除後、山木屋地区を元に戻すにはどうしたら良いかいろいろな会議などを作って話し合いがもたれました。その中の一員として、私も施設を代表して選ばれました。何回かいろいろな会議に出席して発言しましたのは、これからの山木屋地区に若者は帰ってこないで、学校が再開しても何年かで休校になってしまうのではないかと思われませんでした、学校を休校にしないためにも町にも障がい者の支援学級が各学校にもあるので、それを一つにまとめて山木屋の学校に持ってきた方が良くはないか、と提案しました。また、高等部がないのが県北地方と会津地方の二か所だけとなっているので、県としても高等部を作るとしています。その高等部をいち早く手を挙げて山木屋地区、被災地の復興として作ったらどうかと思われまます。

現在は、老人ばかりで、だんだん山木屋地区も人がいなく

なるばかりです。高等部も山木屋地区となると、県北地方の障がいを持った子供たち、保護者、職員等が出入りするようになり、また、高等部の宿泊施設も出来、山木屋地区も活気づくのではないかと思われまます。

そのような考えから、私は、山木屋地区にグループホームを建設しようと考えて、現在、計画を進めているところでございます。

遠藤 貴美子 (馬場平 六十代)

東日本大震災から現在思うこと

地震！大きいと思ひ席を立つた。すぐに大きな声が聞こえた。「会長は、そこに座っていて！」あの東日本大震災から八年八カ月が過ぎた今でも、その声は私の頭から離れない。福島警察署川俣分庁舎にいて、交通課長代理と打ち合わせをしている時に起こったのでした。その時の課長代理の指示はすばやく適確に行われ、さすが警察官だと感心したものです。それから、状況を確認しながら職場に戻り、高齢者の歌のサークルと囲碁のサークルの皆さんを三階から避難誘導し、

翌日からは町の保健センターで、浪江町、双葉方面からの避難された方々への炊き出しに参加しました。

炊き出しをしている時に保健センター内に設置されたテレビから、水素爆発の音が聞こえてきた。「え！大丈夫なの？」誰もが不安になっていた。そんなときに保健センターの前に一台のワゴン車が止まった。降りてきた五、六人の人は防護服を着てマスクをし、手には計量器の様なものを持ち、周りをうろろし始めた。様子を見ていたら、当時の古川町長がその人たちを呼び止め、「何をしているんだ、どうゆうことなんだ、その服はなぜ着ているんだ、皆が不安になるから脱げ。」と言って抗議したが、そのまま帰ってしまった。この事は、私の心の中に大きなショックを残した。当時、何ひとつとして正しい情報が伝わっていないのではないか、私達はこの時すでに逃げなければいけなかったのではないか、と思うと、今でも憤りを感じずにはいられない。

それから、山木屋地区民に避難する様にと住民説明会があり、家族がバラバラになり、仮設での生活や借上げ住宅での生活が始まった。山木屋での自然豊かな広々とした生活から一変して、隣を気遣う生活や、土にさわれない生活となり、そんな暮らしにも少しは慣れることが出来たのだろうか。仮設住宅の中でのイベントや多くの方々からの支援等を受けながら、山木屋地区の除染も進み、戻ってもよいとされても、なかなか戻って生活を始める人は増えない。小中学校もリフ

ォームして戻った子ども達は、福島市内、川俣町内からスクールバスで送迎され登校している。年々子どもの数も減少し、学校の存続も心配される。私達や、山木屋への国や県、町からの適切な情報も自治会のみで済むとなり、地区民への説明の場がなくなり、聞くと「広報にのせてあるよ」との答えが返ってくる。記載されている数値や文章だけで理解できないことも沢山ある。

その中で、復興のための山木屋でのイベントが続いている。多くのイベントが企画され復興に向かっていっていると感じている人がどの位いるのだろうか。「イベントⅡ山木屋地区に戻る人が増えること」、にはなっていない。イベントに来ている人は他町からの人が多く、地元の人々の姿はとても少ない。高齢者のみが戻り若者がいないことで、今後の山木屋地区がどのようなようになっていくのだろうか。考えるととても淋しくなることがある。

今までの他県からの支援には感謝しているが、風評被害もまだある。また、近頃は自然の災害が日本各地で起こり、福島原発の最終処分場もどうなるのだろうか・・・最近になって原発の現場を見学してきたが、私は三十年、四十年が過ぎても廃炉になる姿は見る事が出来ないと感じてきた。

私は自分が出ることは何かを考えても浮かんでこない。が、山木屋の自然の中で、周りの人達と楽しい日々を過ごせるよう努力していきたい。

遠藤 恵美 (川芎 六十代)

震災の記憶・山木屋では

家を放置するとこれほどまでに傷むのか。

崩れた屋根を修理するにも、原発事故で住民が避難している場所に業者は来ない。そのまま借り上げ住宅に避難してしまった。

そこから雪や雨が回ったのだろう。床は腐りぬけ、天井は雨水が世界地図を描いたように染み込み、押し入れは異様なにおいが充満し、畳は青カビが生えじっとりしていた。

草は人の背丈以上に育ち、庭など山の中の茂みのようになってしまう。

避難から六年目、避難解除（川俣町内の借り上げ住宅に住んでいた）になり、次男と山木屋に帰る事に決め、古くなった元の家を取り壊し、七年目によりやく新しく住まいを建て、山木屋に戻ってきた。

復興拠点「とんやの郷」が建てられ、農協や郵便局、支所が再開し、懐かしい顔が山木屋に戻ってきた。山木屋地区の住宅は、どこの家も新しく、みんな快適な生活を送っているように見える。

しかし、子供がいない。子育て中の若い世代は、長い避難生活の中で生活の拠点を変えざるをえなかったのだろう。

大がかりな修復工事をし、素晴らしい設備が整い、震災から七年目に盛大に開校式を行い、山木屋小・中学校生一五名がスクールバスで市内、町内から通い始めた。（六年生が五名、中学三年生が七名、二年生が三名）

しかし開校から一年目にして、卒業式とともに山木屋小学校は休校、中学校は三年生が三名になってしまった。

次年の春には卒業。それぞれの目標に向かって高校へ進学となる。在校生はすべて卒業となり、素晴らしい校舎は無人化になる。

私なんぞがもやもや考えたって仕方がない事だと思いたが、からも頭から離れない。

そんな中、私が元気をもらっているのはグラウンドゴルフを練習する地区の皆さんの姿だ。週三回、学校の校庭で楽しそうな声が響く。みんな元気だ。今まで一緒に住んでいた子供や孫たちと別々に暮らし、みんなそれぞれに色んな思いを、悩みを抱えているけれど、前向きな姿勢に励まされている。元気で生き生きとしていれば、神様はきっといいことを運んでくれる。そう思えるような皆さんの笑顔に、励まされている。

大内 あゆみ (間屋 三十代)

震災前は、両親と三人で葉たばこ耕作と稲作栽培をしていました。

私は家で両親と農業を行うようになって八年目となり、仕事を任せてもらうようになっていました。

地震の時は家にいて、揺れがだんだんと大きくなっていくにつれ、怖いと思いました。

その後、停電になり、テレビは見られなかったので、ラジオで震災の状況を聞き、太平洋側では大変なことが起きたことを聞き、山木屋は停電くらいで良かった、と思いました。しかし、その後、福島原子力発電所が爆発。山木屋は大丈夫なのかな？と不安になりました。

避難指示が出るまで、葉たばこも稲作も、「とりあえず、作付けの準備をして下さい。」と言うことだったので、私の家では、自主避難せず、準備を進めることにしました。

放射性物質は、目に見えない物なので、体にどんな影響があるのかもわからないので、不安がありました。なので、外に出るときは、マスクをしたり、帽子をかぶったりなどしていました。

その後、避難指示になり、祖母と両親、姉と私、と分かれ

て住むことになりました。

私は姉と農村広場仮設住宅にお世話になることにしました。学生時代、学校の寮には住んだことはありませんでしたが、それ以外ずっと山木屋の自宅にいたので、仮設住宅で生活してみても、やっぱり山木屋の家が良いな、と思いました。湿気や結露等がひどくて・・・

仕事は、葉たばこや稲作の休作が決まり、この年の収入源がなくなってしまったので、探して、仕事が見つかり、その会社にお世話になることにしました。

避難解除の日、私は両親と祖母の四人で山木屋に戻ってきました。周りは、家の修理や建て替えが終わっておらず、うちかもどりませんでした。やっぱり自宅が一番良いな、と思いました。

今、うちの近所の家も修理や建て替えが終わり、戻って来ている家と比較的他の地域よりは多いように思います。

しかし、両親の高齢化により、葉たばこは廃作しました。また、水田の復旧工事が終わっておらず、稲作の再開も出ていません。

両親と話し合い、私は会社に勤めることにしました。

これからの見通しはたちませんが、私は、山木屋はいい所だと思うし、好きな場所なので、これからも山木屋に住んでいたいと思います。

大内 秀一 (大清水 七十代)

山木屋のこれからを想うとき

皆さん誰でもが、この八年間ほど、ふるさと山木屋の将来の事を憂えたことはないのではないですか。

私もだいたい考えました。私はあの原発事故の直後には、もう、福島は終わったと思いました。そして、新潟に農地付きの古民家を見つけ、移住するつもりでおりました。

でも、八十歳を越した両親がおります。両親にとつて新潟の地が果たして新天地だろうか？ 結局、移住を断念し、この地で両親を見送ろうと決心しました。

そうしたら、今までと違う山木屋が見えてきました。今までは、この地で生まれただけで何ら迷いもなく、漠然とここに住んでおりましたが、避難生活のなかで、ふるさと山木屋を客観的にみる事が出来ました。結果、居住地の選択の自由ができました。山木屋を必要とする人だけがここに残り、ほかの人は新しい人生を新天地に求めればよいのです。その動向が収まり、半分押しつけの復興が終わる。それからが本当のこの地に住む人たちのための再興が始まるのではないのでしょうか。そこで暮らす住民こそが日々の暮らしに必要なもの、改めなくてはならないことが一番わかっております。行政に何かを求めるより、私たちが快適な住みよい暮らし

を入手するためには何をなしうるかが求められると思います。

山木屋は釧路並みの気候です。ならば、その寒さを活かした地域づくりをすればよいのです。

私は寒さを利用した田んぼのスケートリンクを今年で三十三年続けております。今年は、岡山、東京からも来場者がありました。インターネットを利用した結果です。アメリカのボストンのジャーナリスト、イギリスのBBCのメンバーからも励ましのメールが届きました。一年に僅かひと月の田んぼリンク。それでもこの山木屋を世界中に紹介できるのです。

それだけでなく、厳しい冬を耐えた後には、すばらしい春がやってまいります。三春どころではありません。五春も、六春もある、百花繚乱の春がここ山木屋にはあるのです。その後にはクラーのいらぬ快適な夏が参ります。そして、山の幸がいっぱいの稔りの秋、よその地区にはない素晴らしい四季がここにはあります。

定住人口が頭打ちのいま、これからは、この素晴らしい四季を活用し交流人口を増やしていくのも地域活性化への途ではないのでしょうか。

ここに住んでいる人たちがみんなが住んでよかったと言える地域づくりを皆さんでやろうではありませんか。

大内 秀一 (東ノ沢 七十代)

避難になるまで

忘れもしない平成二十三年三月十一日午後二時四十六分東日本大震災がおこりました。それに伴い東京電力福島第一原子力発電所事故が発生し、大量の放射性物質が放出されました。

山木屋地区も屋根のグシ瓦が落ちたり、道路が割れて段差がついたり、石が崩れたりしました。三月十八日放射線量を測定すると、山木屋郵便局で15.12マイクロシーベルトでした。

ガソリンの不足によりスタンドでは長い列ができ、ケンカ腰でした。

三月二十五日には、山木屋地区災害対策会議が開かれました。

三月二十七日に、町役場に地区の要望書を提出しました。

四月十六日に、山木屋住民に説明会があり、福山内閣官房副長官がおいでになり、放射線量の累積を考慮した結果、健康への影響から、「計画的避難」を決定せざるを得なかったとの説明がありました。年間積算線量が20ミリシーベルトを超えるから、避難して下さいとのこと。それまでは、稲作農家の人達はお米をうるかし、たばこ農家の人達はハ

ウスにビニール張りをし、木の葉を集めに山に入った人もおりました。

それから、町長を交えての区長会が改善センターで開かれました。報道や新聞の記者もたくさん来ました。五月十五日から避難開始されました。六歳未満の乳児や、妊婦のいる世帯を優先に、八世帯四十九人の皆さんは町営の壁沢団地、賤ノ田団地、小綱木団地、おじまふるさと交流館にそれぞれ避難しました。

五月二十二日 九十六人が、福島市の穴原温泉月之瀬、新野地温泉相模屋に一次避難を開始しました。

五月二十六日 山木屋地区が避難状態となりました。

町の自治会会長会があり、夜家に帰ってきたら、他の家は暗く外灯だけが点いておりました。

六月五日 私達も川俣の借上げ住宅に避難しました。

菅野 源勝 (木ノ根 七十代)

・山木屋の今・昔

自然豊かな土地で、水稻、葉たばこ、花卉、畜産に懸命に働き、山木屋の農村を作り上げてきた。そんな山木屋に災難が来るとは…

・避難生活

事故から一か月後に避難指示が出て、五月末までに避難とは、まことにお粗末な指示であったと思う。

六年に及ぶ長期の避難となり、他産業へと働く場所を変えてしまった。

仮設住宅には各地区、県内外から支援ボランティアが集まり、時折の余暇をすごす事ができたが、高齢者には時間がありすぎたのではないかと思う。

・事故と除染

東京電力の原発事故は、私達の自活、人生を変えることになった。

避難指示が出た日、JAでは営農作付けの説明会から一変、作付け中止の説明会になった。組合員の皆さんから、自治の事、生産資材の支払いは？など多くの意見が出され、JA吾

妻組合長、沢口産業課長に詰め寄る一面もあった。

又、除染では、表土剥ぎ取りについて、肥沃な土を捨てるのはもったいないなど、多くの意見や、仮置き場の集約などに、自治会では週に2〜3回の会合をもち、また、JAも会合を重ね、当面の山木屋が進む方向を作っていた。

・帰還と営農再開

六年に及ぶ避難から山木屋に戻ってみると、子供の声が聞こえない山木屋になり、高齢化社会の幕開けとなった。元の山木屋の姿がなくなり、農業の再開も後継者がいないので進まない中、若い花卉農家、若い六人のグループが大型機械による飼料作付けするヒュッテファーム、水稻も一部の人が作付けを始めるなど、山木屋での農業も見える様になってきているが、地区外の人達の生産意欲には負けてしまう。

・祭りと文化

氏子の皆さんの協力で、冷害の時も戦争の時も三匹獅子舞が絶えることなく奉納されて来たが、東京電力の原発事故では六年間奉納されず、役員だけで氏子の皆様の家内安全と山木屋の繁栄を願い祈願してきた。

世帯数の減少と若者の少なさで、文化芸能の伝承はできなくなっていくのだろう。復興にはほど遠い。

行政が笛をふいても、地域は踊ってくれない。

・人々の出会い

独立行政法人農業研究所の実証圃場作り（作物による除染）、行政法人産業技術機構の水質調査、千葉大学のモニタリング、除染の検証など、多くの調査に出会った事で、私の不安と理解が入り混じってしまった時もある。そんな中、学生も来るようになり、不安が取り除かれるような思いがするようになった。

今では、山木屋学校（仮称）として、多くの大学、学生、社会人が、農業体験をし、ボランティアとして来てくれるようになってる。

また、双葉町との交流も生まれ（ヒガン花）、今後、多くの人に山木屋を見てもらう事になれば良いと思っている。避難中に於いても役職を担っていたので多くの人々に出会った。その経験を今後の復興に生かしたいと思う。

菅野 勝久 （秋葉森山 六十代）

東日本大震災前は、（株）笠原鋳物工場に勤めながら小菊の栽培をして、平穏な日々を過ごしていました。

それが、平成二十三年三月十一日午後二時四十六分の大地

震と東京電力第一原子力発電所の爆発事故で生活が一変してしまいました。

地震当日は会社に勤務していて、大きな揺れがありました。大きな損害もなく帰宅しました。家の方も室内の物は落ちましたが、大きな被害もなかったので安心した事を覚えています。会社は三日間位停電したので休業しましたが、その後は通常操業になったと記憶しています。

四月二十二日国から計画的避難区域に指定され、五月末までに避難する様に指示がありました。私の所はペットを連れての避難なので、一戸建てを探しました。会社も移転先を探していましたが、見つからなくて困っている時に、国と町から放射線管理をしての室内操業が認められました。私も避難先から通勤をしなければなくなり、会社に近い小綱木の羽金に家を見つけ、準備ができ引越しようと思った時に水道が出なくなってしまう、その家をあきらめ、次に、小綱木の金米の一戸建てを見つけ六月末から住むようになり、そこから一年間位会社に通勤していました。が、家の周りに猿の集団が出るようになり、転居を余儀なくされました。次に、友人の紹介で川俣町羽田の一戸建てに引っ越して、平成三十年の初めまで居ました。そこから会社に通勤していましたが、都合により退職し、その後、シルバー人材センターや、川俣町社会福祉協議会など、いろいろな職種を体験でき

ました。

避難指示解除の時期も決まり、帰還後山木屋で何かしら農業をやりたいと思っていた時に、川俣町でアンズリウムの栽培者を募集していることを知り、説明会に参加してアンズリウムの栽培をやることにしました。平成三十年十月末から苗の定植をして、令和元年五月から少量ですが出荷できるようになり、山木屋のとんやの郷でも無人販売をやっています。2020年の東京オリンピック・パラリンピックにアンズリウムの花を採用してもらえるように、日々PR活動をしています。

今後、町と山木屋の特産品になるように頑張っていきたいと思っています。



アンズリウムの花 提供 菅野勝久様

菅野 サクイ (大沢山 七十代)

第三十六回川俣町女性大会

(平成三十四年十一月二十五日 中央公民館)

テーマ「私の3・11・・・そして今」

川俣町女性団体連絡協議会より依頼があり、発表。
その時の、手持ち原稿です。

避難の記憶

私は、山木屋に嫁いできて四十年になりました。

現在は、夫と二人で年金生活をしております。

私達には二人の息子がおりますが、長男家族五人は福島市蓬萊町で、次男家族四人は茨城県つくば市で生活しております。

昨年の三月十一日の東日本大震災による大津波そして、東京電力福島第一原発事故により、私たちの住む山木屋地区は「計画的避難区域」と四月二十二日に国から指定され、無我夢中で住むところを探し、とりあえず仮設住宅が出来るまでと五月二十二日に川俣町本町に引っ越し、現在もここでお世話になっております。

さて、思い出すのも嫌なのですが、あの三月十一日は、週末を利用して、次男の所に行く予定で準備しておりました。夫は真福寺総会があつて出かけており四時頃に出発する予定で帰りを待っていました。そんな時、あの大地震がおきたのです。私はひとりで気が遠くなり大パニックに襲われ、落ち着くようにと自分に言い聞かせておりました。夫が帰つて来て「大丈夫か！」と発したあと、「大変なことがおきたので、つくばに行くのは中止」と大声で私に言いました。夫は私の状態など理解しないまま、区長なので「心配だから部落をまわってくる」と、家を出て行きました。私はひとりで余震の中、家の中を片付けていると、夫が帰つて来て「住宅の屋根は四十%くらいの被害がある。それから、一人暮らしの方には安心するようにと声をかけて来たよ。」そしてまたすぐに、川俣町の役場（山木屋出張所）に報告に行くと行って出かけて行きました。所長は、町からはまだ報告はないとのこと。夫は、部落の被害状況を所長に報告したとのこと。夜になって、電気は付かず、ローソクの明かりで食事をし、夫と交代で車の中でラジオを聞いていると、この世の中で一体何が起きたのだろうと、いろいろなことを思い不安がつのるばかりでした。

そんな時、午後九時頃から自衛隊の車やパトカーが浪江方面に向かって何台も行くのを見て、不安がますます大きくなりました。午後十一時頃、蓬萊町の長男の所に行くことにし

たのですが、途中、川俣町内も飯野町も電気が付いておらず、真っ暗でさみしい中、車を走らせました。

翌三月十二日の朝、福島市は水道が断水となっていたので蓬萊の市役所前で水の給水が始まりました。私も孫たちと半日並んだのですが、一人一リットルと言われました。これでは、生活が大変です。一方、川俣町では水道が利用できるを知り、夫は親戚の所に行き、三月十四日までポリ容器で水を運んでいました。

そんな時、長男と次男が連絡を取り合つて、福島原発で水素爆発しているのだから、福島の子供たちを連れてつくばに来るようだという話をされました。でも、孫たちは「親から離れたくない。学校もあるので避難しない」と言い福島に残り、心配しながらも私と夫は三月十五日午前十時に福島を出発。したものの、高速道路は利用できず、四号線を走りましたが、避難者の車が多く、つくばに着いたのが夜中の一時頃でした。次男夫婦は心配をしながら待っていてくれました。普通なら三時間で行くところを十五時間もかかり、トイレに行くことはできないし、食べる物が無くなるし、そのうち夫は怒り出すし、大変苦労しました。

翌朝、車の燃料がないので、近くのガソリンスタンドに行き並んだところ、会員の方だけで新規の方はお断りと言われ、夫は「店長を呼べ」と言つて怒りました。「この電気はどこ

から来ているのかな」と大声で言ったところ、理解したのか二千円分のガソリンを入れることができました。

私たちは数日で帰る予定でしたが、次男夫婦に、三カ月は様子をみて福島には帰らないで下さいと言われ、世話になるつもりでおりました。が、夫に部落からの連絡があり、急遽四月三日に山木屋に戻ることになりました。するとその後、四月十六日、山木屋の生活改善センターで住民説明会が開かれ、町長をはじめ、福山内閣副長官から山木屋地区全地区が「計画的避難区域」になると言われ、大変おどろいた事は今でも忘れることのできない出来事です。古川町長から、「避難するときも、帰る時も、山木屋は全部一緒に」と言っておりましてので、私はそれを信じています。

もうすぐ避難してから二回目のお正月が来るのに、まだアパートでの生活が続いています。アパートでの生活になかなかなじむことが出来ず、毎日を不安な気持ちで過ごしています。それは、これからの住宅の除染、農地の除染、いつ始まるともわからない除染のことや、仮置き場の問題、山林の多い山木屋地区です。山の除染をしないでどれだけ線量はさがるのでしょうか？商店、学校、診療所、JA、郵便局、子供たちは、孫は・・・どれだけの人達が除染後に山木屋に戻るのか・・・とても不安でなりません。

避難するまですごした山木屋のことを思うととてもつ

らくなります。

私は一日も早く山木屋地区に戻りたいのですが、毎日毎日目標が決まらず不安です。でも、今までの絆を大事にしながら、戻れる日を望んでおります。

以上で、三月十一日から現在までの避難の報告とさせていただきます。

※近況追加

震災後、同じ地区の方々は、ばらばらになってしまいましたが、二カ月に一度、安否確認を兼ねて女性七名程で集まっています。「なかよしクラブ」と名前を付け、飯野町のお店の二階で、食事やおしゃべりをして楽しんでいます。今後も続けていきたいです。

菅野 栄作 (問屋 五十代)

震災から現在・家族

私は、生まれた時から山木屋に居住していました。

福島第一原発事故が起こった平成二十三年三月十一日当時、私は家族十一人で暮らしていました。当時、私は四十七歳で職業は自営業(旅館・食堂)と農業(葉たばこ・水稻等)を営んでいました。八十歳を過ぎた両親と、妻・長女・次女・次男・の長男夫婦・孫二人の十一人で、支えあい協力し合い仲良く暮らしていました。

私は、葉たばこの共同育苗作業中に大地震に遭遇しました。今までに体験したことのない大きくそして激しく長時間の揺れに、家族の安否が気になり急いで家に戻りました。両親・妻・嫁・孫二人の無事を確認し安心しましたが、勤めに出ている長女・次女・長男とは連絡がつかず、不安な時間が過ぎていきました。夕方、長女・次女・長男が帰宅し、一安心しました。ライフラインが遮断され、テレビも見ることが出来ず、情報源はラジオのみの状態でした。地震の情報を聞き漏らさないようにしていましたが、地震や津波の被害情報のみで、原発事故には触れていませんでした。そのため、福島第一原発が危険な状況とは全く知りませんでしたし、全く想定外の出来事でした。

大地震から一日がたち、仕事用の発電機で電源は確保しました。その時のニュースで原発事故を知り、状況の深刻さを痛感しました。しかしその時はまだ、水蒸気による爆発と知らされていた為、自分たちが避難する立場になろうとは夢にも思いませんでした。山木屋地区は、原発事故直後の避難はありませんでした。その後、計画的避難区域に指定され、十一人は五箇所に分散して避難しました。父と母(仮設住宅)、長女・次女(福島のアパート)、長男(福島のアパート)、長男の嫁・孫二人(山形のアパート)、私・妻・次男(妻の実家)に分かれての生活となりました。避難当初は山木屋に戻りたいという気持ちが強かったのですが、当時は放射線による健康被害への不安があり、国が行おうとしている住環境(宅地(二〇m)程度の除染では、子供たちや孫の帰還は困難と考えていました。

平成二十九年三月三十一日避難指示の解除(令和元年)も、それぞれが分散して生活しています。父は他界しましたが、長女・次女の結婚、孫も六人になり、八年間という時の流れを感じます。私自身、山木屋での居住を断念し、先祖より受け継いできた資産等を守り維持していくことができなくなり、山木屋での自営業及び、農業を再開しての生活再建は不可能な状況になりました。事故により避難当時は、精神的に不安定な時期もありましたが、現在、そして今後の人生は前向きに過ごしていきたいと思っています。

震災から現在・消防団

福島第一原発事故が起こった平成二十三年三月十一日当時、副分団長をしていました。当時を振り返ると、東日本大震災、そして原発事故と起こりえないと思っていたことが現実となり、浪江町方面から多くの避難者が当地区を通り川俣町内に避難して行きました。避難者数は六千人程度だったと聞いています。

川俣町消防団は避難者の対応にあたり、我々第十分団は川俣町から当時の分団長に地区民への広報督励の依頼があり、高い放射線量の中、連日広報活動を行いました。その後、計画的避難区域に指定され、川俣町では山木屋地区だけが避難となりました。

川俣町消防団は、十の分団があり、第十分団（山木屋地区）以外の他の九つの分団は平常の活動のままで、第十分団だけが避難しながら活動する特殊な地域になりました。五月中にはほとんどの住民の皆さんが避難されました。六月一日より、川俣町の依頼により第十分団員（八名）による山木屋地区の防犯パトロールがスタートしました。その後六月二十日より、第十分団員（十名）を中心に、山木屋地区民で結成した「山木屋地区地域安全パトロール隊」（山木屋地区巡回警戒活動）がスタートしました。私自身も七月一日付で第十分団分団長

となり、責任の重さを痛感した記憶があります。

第十分団の消防団活動は通常の活動の他、避難期間中の火災三件、行方不明者捜索二件、台風接近による高齢者避難開始情報広報一回がありました。

訓練においては、平成二十五年秋季検閲での小隊訓練披露を行いました。

その後平成二十九年三月三十一日で避難指示が解除となり、山木屋地区の消防拠点を一か所として新築屯所が落成しました。

また、平成二十九年六月の福島県水防訓練への参加、平成二十九年秋季検閲での小型消防ポンプ操法での披露、平成三十年八月の福島県消防操法大会への出場、平成三十年秋季検閲での小型ポンプ操法での披露と立て続けに行われ、上記の訓練参加、披露、大会出場に向けて訓練に励みました。

特に、福島県消防操法大会出場に向けた訓練は、山木屋地区に居住する団員が十二名という中で、冬季間の体力作りを含め、一年以上に及ぶ訓練が出来るのだろうかという非常に不安の中でのスタートとなりました。南分署の指導員の元、出場選手を中心に第十分団が一丸となり小型ポンプ操法に取り組み、川俣町消防団歴代最高順位の第六位で大会を終えることが出来ました。幹部及び団員の協力がなければやり遂げられなかったと思います。

この団結力は今後の消防団活動の大きな力となって、自分の地区は自分で守るという消防団精神のもと、地域に貢献できると考えております。分団長として心から感謝しております。

自身三十六年の消防団活動に幕、令和元年六月三十日退職。

菅野 泰彦 (大洪 四十代)

農事組合法人 ヒュッテファーム

(これまでの経過)

山木屋地区における震災前の経営農地面積は375 ha (平成二十二年農林業センサス)でしたが、川俣町が農地地権者に対して行った意向調査(平成二十七、二十八年)の結果、営農再開されない農地が7割(262 ha)以上であることが分かりました。

山木屋地区の農地のほとんどが荒廃してしまえば、かつての山木屋が無くなってしまふ、人が帰ってこられる場所では

無くなってしまうと考えた時、居ても立ってもいられず、農地をできるだけ預かり、帰還した農家がすぐに営農再開できるような環境を守るための組織を立ち上げること決意しました。

平成二十六年三月、同じ志をもった山木屋地区の三十〜四十代の若手農家で、「山木屋再生受託組合」を設立し、農地保全への取り組みを開始しました。

平成二十六年から除染作業の表土剥ぎ取り後の施肥作業等を担い、平成二十八年から福島県営農再開支援事業を活用した保全管理(当初54 ha)に着手しました。

補助事業の終了後も飼料生産販売によって、農地を活用していくことを目的として、同平成二十八年からデントコーンの実証栽培(50 a)に取り組み、浜地域農業再生研究センター、農業総合センター畜産研究所等の指導のもと、生産技術を培いました。

これらの取組によって、管理面積は、平成三十年までに273 ha (内牧草42 ha、デントコーン30 ha作付)に上ります。

本格的な生産物販売や資材購入等において、信頼を得て交渉していくためには法人化が必要と考え、福島県酪農業協同組合県北支所のアドバイスを受け、平成二十九年三月に六人で「農事組合法人ヒュッテファーム」を設立しました。

川俣町は、福島再生加速化交付金を活用して、飼料の生産

流通に必要な施設（平成二十九年度トラクタ六台、他生産収穫調整機械、同平成二十九・三十一年度倉庫七棟）を整備しました。当法人は、山木屋地区での広域的な飼料作物（牧草70 ha、デントコーン30 ha）の生産を約束し、それらの貸与を受けて運営を行っています。

生産した牧草、デントコーンは、町内の畜産農家のほか、福島県酪農業協同組合を通じて県内の畜産農家にも販売しております。北海道からの海運と比べて輸送コストが安く、近隣県からも引き合いがあります。

（今後について）

水田についても、震災前の経営面積149 haの内、作付再開された面積は25 ha（平成三十年度）にとどまっており、荒廃化による主要道路の視認性や、居住環境の悪化が懸念されております。

川俣町は、同様に福島再生加速化交付金を活用して、水稻（飼料米）の生産に必要な農業用機械、及びライスセンターを整備する計画です。

当法人は、保全管理を行っている水田を中心に、60 haの生産に取り組むための体制を整えています。水稻の生産にあたっては、地元の水稻生産経験者五名に協力いただき運用する計画です。

できるだけ広く水田を活用できるよう、省力的かつ確実な

生産方法を検討し、平成二十九年から鉄コーティング直播による実証栽培に取り組み、浜地域農業再生研究センター、福島県の指導のもと、生産技術を培っています。

（これからの課題）

現在の取組では、270 ha全ての農地を活用することは困難な状況です。今後更なる面積拡大には、農地の大区画化や集積などによる効率化が必要不可欠です。農地中間管理機構による集積、更なる基盤整備等を期待しています。

飼料作物が供給できれば、畜産農家が増え、堆肥ができれば、耕種農家が増える。作物で農地が緑になれば、さらに戻ってくる人が増える。そんな未来に向けて、山木屋という農村を守っていくため、皆様と共に歩んでいきますので、今後ともご支援ご協力いただけますよう、よろしくお願いします。

菅野 幸子 (大平 六十代)

避難解除になって、この地区に戻ってきたのは六軒です。帰って来て、福島のおばさんに頼んで犬を連れて毎日散歩しています。

避難前とは回りの光景が全部変わっていて、空き家と田んぼの中は黒い袋(除染して剥ぎ取った土が入ったトンバッグ)だらけです。淋しい気持ちを通りこして、むなしい気持ちです。

この歳になって、アパート生活をするとは夢にも思いませんでした。また、避難中に一番大事な友達が亡くなり、思い出が沢山あってすごく淋しい気持ちになります。

避難の中で、農協、県の方々の協力で、試験的に菊とりんどうを作りましたが、最初の年の小菊は、除染で表土が剥ぎ取られた後、山砂が入れられた土壌だったので、余り育ちませんでした。

山菜取りが大好きなのですが、一番放射線量が高いキノコは食べられなくなっていました。又、山は獣イノシシが沢山ふえて、怖くて入れなくなっていました。実家の方

に行って一一四号線を車で行くと、日中でもイノシシ、猿が歩いています。家の中に入ってみると、獣たちが入った跡があり、何か所も大きい穴があいています。家に続く道も全部、草や木が大きくなって、とても入れる状態ではありません。

避難中、何もする事がありませんでした。山木屋に帰って仕事が始まってみるとすぐ疲れてしまいます。筋肉がだめになって、歳もと、本当に仕事ダメになったと自分が情けなくなってしまう。でも、戻って来たので、もう何年か小菊を作って頑張ってみようかなと思っています。

先の事を考えると、いろいろ不安な事でいっぱいですが、みんなに協力してもらって頑張りたいと思います。

菅野 マス (清水 六十代)

震災以前は、葉たばこ、水田を作り、夫は会社員で朝夕農作業をしていました。家族は、義父母と娘家族をあわせて八人で暮らしていました。

菅野 富雄 (石森 六十代)

地震の時は、福島で次男と一緒に住む高校生の三男を迎えながら、帰りに小学校、幼稚園の孫を迎えに行き、その時地震に遭いました。体育館が大きく揺れ、雪が降って来て・・・孫たちを連れて家に帰りました。停電していたので、ローソクで一夜を過ごし、次の日は発電機でご飯を炊きました。

はじめの避難は、娘家族は福島の息子のアパート、義父母は夫の姉の所に、私達夫婦は夫の会社が山木屋にあるので、そのまま家にいました。しかし、計画的に避難しろと言われ、八人が住める大きな家を探してもらい約一年そこで暮らし、その後、飯野町に引っ越すことになりました。が、引っ越しが近くなった頃、義母の様態が悪くなり、済生会病院に入院をして、二週間ぐらいして亡くなりました。

その後、娘達は、子供が中学校、幼稚園にあがるので、郡山に家を建ててそちらに住んでいます。

私達は、山木屋に平屋を建てて、夫婦と義父三人で暮らしています。

これからは、秋に芍薬の球根を植えて、三年後には出荷になるので、今から出荷する日を楽しみにがんばっていききたいと思います。

震災前は、春はフキノトウから始まり、山に入るとタラの芽、ワラビ、ゼンマイその他、自然豊かな山菜が多くあり、秋になると栗、キノコが採っていた。特にキノコは、八月末から十二月初め頃まで、種類も豊富でキノコ採り愛好者も多かった。

私の母も山菜採りが好きで、四季折々の山菜を採って来て、好き嫌いは関係なく、いつも食卓に並んでいた。

今思うと、あの頃が懐かしい。あの頃のように、自然の物や山菜が自由に食べられるように、早くなつてほしい。

二〇一一年三月十一日 午後二時四十五分頃福島県沖で大地震発生、マグニチュード九を超す巨大地震、そして十五メートルを超す巨大津波により原子力発電所が操縦不能となりメルトダウンをおこし爆発（前代未聞）の大問題発生。その時、私はガソリンスタンドに勤務していた。ものすごい揺れだったので、従業員を建物の外へ出るように誘導した覚えがある。

それからがたいへんだった。

電気がすべて止まり、車に燃料の供給ができなくなって、開店休業状態となる。

その後、スタンド前に町の災害対策本部が設置され、なんとか緊急車両に十リットルずつで良いから入れて欲しいと言われ、ポンプ室にレバーを設置した。そのレバーを手で回し給油した。一リットル入れるのに十回まわさなくてはいけないので、十リットルでは百回まわすことになる。その他、消防署の車、病院の車、会社の緊急車両にも手回しで入れた。そんな大変な最中、町の水道課から六か所ある水道の中継所にディーゼルエンジン用の軽油の配達を頼まれた。手回し給油で大変な時だったが、若い従業員に半日配達に出てもらった。

後で思ったが、電気は三日間止まったが、水道は一度も止まらなかった。ああ、大変だったけれど、良いことをしたと思った。

それから、双葉地方から避難者が続々と川俣町に入ってきた。燃料もなし、食料もなしの状態だったので、炊き出し用の米を三十kg対策本部に入れた。

その後、しばらくして山木屋も避難区域となる。

山木屋を出て下さいと言われても、・・大変困ってしまった。とりあえず、妻と孫は親戚の家に避難させ、その後、飯野町に空き家を紹介していただき、飯野町での避難生活が始まった。

幸い、避難生活は、良い人に恵まれ、有るものは何でも使ってよいからね、と言われ、大変助かった。その近くに家を作り、今もお付き合いしていただいている。

それでも、やはり故郷を忘れる事は出来ず、山木屋に小さな家を新築して、毎日野菜作りに通っている。

菅野 多美枝 (木ノ根 五十代)

私が嫁いだ山木屋は、自然いっぱいの中で子供達が遊び、おいしくて安全な野菜をだれもが作り、食べ、健康に、そしてゆつくりおだやかに暮らせるところだった。

二〇一一年三月の震災、そして原発事故によってその暮らしは大きく変わった。

三月十二日の原発事故の映像を見た夫の決断で、福島市の義姉宅へ避難。現実起こっていることなのか信じられず、アタフタ。以後、知人の裏磐梯のペンション、福井の実家へと移動。子供達の春休みも終わるとのこと山木屋へ帰ると、待っていたのは聞いた事もないベクレル、シーベルト、マイ

クロシールベルトの数字。学校周辺の数値を聞き、学校へ。どのくらいが放射線量として危険なのか知識としては知らなかったが「なにかあぶない」と思った。学校としては避難はまだ考えていないとの返答があった。それは、四月十一日以前のことで、四月十一日以降山木屋も計画的避難区域になった。

夫と相談し、とにかく子供達を県外に出すことを決断。娘は京都へ、小学六年になった息子は私の実家へ避難、福井へ転校、が、新転地の言葉に慣れず登校拒否になり、何度も高速バスで足を運んだりした。が、幸い友達や地域の人、先生方に支えられ残りの学校生活を楽しく過ごせた。なによりも川俣での卒業式に福井の校長先生と担任の先生が出席して下さった事は、とてもうれしかった。中学校は京都で入学し、友人関係につまずく事なく過ごせることができた。高校三年生の息子は、あと一年だからと福島の学校へ通学し、一年後東京へ進学の為移動。甲状腺検査でA2指摘。正常範囲内とはいえ二〇mm以下のう胞が認められたことで、私達夫婦は一年福島に残した事をとて悔やんだ。

長いような短いようなこの八年。

子供達もたくさんの人に支えられ、つらいばかりの避難でなくたくさんの方達のつながりができたり、視野が広がったりと、多くの経験ができ、成長したと思っている。一人は海外の大学院を卒業し、一人は京都で就職し、一人は大学生と、

それぞれの道を歩き始めている。これからもうつらい中でも前向きにできることを楽しみながら進んでほしい。

甲状腺検査は、以後陰性になっている。

この夏、初孫が生まれた。何事もなく元気に産まれ、大きな声で泣き乳を飲む姿に、ただただうれしくて感謝するばかりだ。

何事もなく、未来へつながりますように。

菅野 福明 (木ノ間山 六十代)

昭和五十八年に山木屋の高冷な気象を生かし養豚業を始め、安定した経営状態の中で、平成七年には結婚をしてその後三人の子供達も生まれ、すくすくと成長した。長男は山木屋の三匹獅子の舞子として選ばれて、山木屋八坂神社、伊勢神宮にも舞を奉納しました。長女は同じく山木屋八坂神社の巫女さんとして、お祭り時に舞を奉納していました。

そんな中で、平成二十三年三月十一日あの未曾有の「東日

本大震災」が発生しました。その後、山木屋地区は東京電力福島第一発電所の事故により避難を余儀なくさせられました。

子供たちも、川俣町内の小学校、中学校の校舎を間借りして授業を実施する事になりました。

その様な中でPTA会長の職を受ける事になり、避難解除後の小中学校のあり方が話題に上り、小中一貫校で授業を行うという方向になり、先進地でもある郡山市の湖南町と、会津の桧枝岐、それに静岡県の沼津市の方にも小中学校の両校長先生と役場職員の方達と視察に行かせて頂きました。その後、いく度か話し合いの場がもたれ、小中一貫校で進める事となり、山木屋小学校の改修工事が始まりました。

平成二十九年三月末に避難解除となり、平成三十年四月五日、小学生五人と、中学生十人の計十五名で、山木屋小中一貫校がスタートしました。

しかし、平成三十一年三月には、小学生五人と中学生七人がめでたく卒業されて、それぞれの進路に進み、現在は中学三年生の三名の生徒しか学んでおりません。このままでは、来年の春には休校になってしまいます。いくら少子高齢化時代とは言っても原発事故、避難生活が無ければ、まだ先が見えていたと思います。あらためて原発事故がもたらした惨劇に怒りを隠しきれません。

二〇一九年平成から令和に元号が変わりこの時代の子供達にエールを送りたいと思います。

「開拓精神」を忘れるな！

菅野 典保 (北向山 六十代)

まさにその時行政区長

私は今、川俣町の羽田地区に住んでいます。

借り上げ住宅に避難をして三年目の春に、大家さんより「この住宅は三年しか貸すことができませんので、別の所を探してください。」と言われました。避難区域となった我が家に戻ることもできず、住む家がないという事はこんなにも大変な事なのだと悔しい思いを噛み締めました。考え悩んだ末、避難先の近くにあつた宅地を買うことに決め、平成二十五年の秋に住宅が完成し、我が家と呼べる新居に移り住むことができました。

私は、平成二十三年の四月より五区の区長となりました。まさに「計画的避難区域」に指定されたその時です。

避難をするための説明会があり、次に第一次に避難する日程が五月二十五日と決定され、五月三十一日までに避難を完了するために、それまでに避難先を決定してくださいとの役場の指示がありました。

区長となった最初の仕事は、行政区の人達が無事に避難することができたのかどうかの確認をしたり、避難先の住所や電話番号を調べてまとめた物を地区の皆さんに郵送したりという、事細かな仕事でした。

私は、借り上げ住宅での避難生活でしたので、特に感じなかったのですが、仮設住宅に避難した人達は、天井が低く住宅が狭くて、窮屈な思いをしたと思います。しかし、仮設住宅には、たくさんのお隣の県外の人達から激励や差し入れ、昼食なども作ってもらったりして、励ましていただいたようすです。

私達五区行政区も、花見や芋煮会などを開催して、再会を喜び合いました。

仮置き場の選定についても、外部の人達からの反対などがあり、当初決定した場所を変更せざるを得なくなり、大変苦労しました。

また、区長会議も月に多い時は六回、少ない時でも二、三回はありました。

私は、避難の一年前より、公民館の副館長としてお世になつておりました。

避難してからも館長や主事さんと共に、山木屋地区の皆さんとより深く親睦を深めていける様にと事業を実施しました。ウォーキングや田部井淳子さんより招待されての登山は二回もあり、そして、グラウンドゴルフ大会、卓球大会など、仮設住宅を中心として、山木屋地区の絆を深めてきた様にあります。

平成三十一年三月で五区区長と公民館副館長を退任しました。

そして、今思うことは、東京電力福島原子力発電所の事故は、私達山木屋地区住民の、いや、福島県民の故郷を失い、地区住民の生業や絆を奪い、大切な住宅や農地までも、全ての物を奪い取る事になったと思います。

避難解除になったとはいえ、山木屋地区の人達は離れ離れとなつてしまいました。

私のように山木屋を離れてしまつていても、やはり自分の住宅や農地は大切です。

ましてや、生まれ故郷は特に大切に思います。

菅野 りつ子 (向羽山 七十代)

平成二十三年三月十一日午後地震が発生した。揺れが強く急ぎ外に出た。いつ止まるのと待ったが、揺れが止まるどころか長く続き、屋根の瓦は落ち、電線の揺れの大きさは今までの地震では見たこともないほど大きく曲がってビックリした。家がどうなってしまうのかと心配だった。

家に戻りテレビを付けたが電気は切れ、電話もダメで情報がわからずだった。家の中の物が落ちたので片づけようとしても、繰り返し揺れでなかなかできず大変だった。まわりの方々はどうなったのか良くわからなかった。が、携帯ラジオがあったのでそれで情報を得ていた。海の方ではすごい津波で、国道六号線の方まで大変になっていることが少しわかったが、原発が大変になっていることは知らなかった。とにかく、子供達に携帯で電話しても通じず、夜になってしまったが、公衆電話まで走ってやっと通じ、短い話しかできなかったが、無事がわかり安心した。

夜は、繰り返し揺れの地震で眠れず朝になった。電気が切れているので携帯電話の充電をしなくてはと、福島市内の親戚のところに行き充電してもらい、テレビを見せて頂き、そこで初めてすごい津波や原発の爆発のを知り、体がふるえた覚えがある。日本列島はどうなってしまうのかと思った。

家に戻ってすぐ、家の前の道路は浪江方面からぞくぞくと車が続いていて大変な様子だった。皆さん自主避難を始めた。大変な数の車での移動を見ていた。それから、二、三日でしたか、私達も自主避難した方がいいのではと、福島親戚に泊めて頂き一週間お世話になり家に戻りましたが、周りの家々は帰ってきた人からまだ自主避難している人から、バラバラだったので、夜は灯りが付いている家が少なく淋しく感じた。

外にはなるべく出ない方がいいと知らせがあり、家の中に居るようにしたが、山木屋の避難はまだ決まっていなかった。その後、町役場からでしたか、避難に対しての説明があるとのことで生活改善センターに集り話を聞き、避難することが決まり、五月二十二日までに山木屋全地区が避難することとした。

温泉に集団で行く方々、アパートを見つける、親戚を頼るなど、それぞれの考えでの避難になり、この時から八年間の避難でいろいろなことがあったと思います。

住居のことや、家族がバラバラになったり、急に仕事がなくなつてストレスになったり、大変なことだった。

避難解除になったが、若い方々は避難先で職が決まったりして、戻ることがはっきりしない。私もその一人かも。

毎日山木屋に通って仕事させて頂いていますが、まわりの

家はもう住んでいませんし、年になり考えさせられます。が、やはり山木屋に居る時間は、ホッとして癒されます。今までこの山木屋で皆さんにお世話になり暮すことが出来て嬉しく有難く感じております。やはり外で畑に野菜を作り育てて自分で食べることの嬉しさ。一層おいしく思います。動く場所があることで体も元気になれるそうです。

菅野 文夫 (大沢山 七十年代)

もう一度山開きを (山木屋自然愛護会)

高太石山は、名前の通り御影石の石の山です。

山木屋には山が多いが登山する山がないので、この山に登山道を作ろうと考えた方がおりまして、五名の有志を始め、多くの方々の賛同を得ました。山は、国有林であるため、森林組合役員だった故佐藤盛人様にご協力頂き、許可を得て登山道を整備しました。

木の伐採に取り掛かりましたが、それはそれは、山は深く、石が多く、クマザサが広がり迷子になりそうになりながらの

大変な苦勞でした。数週間作業を続け、延べ数百人以上の労力を費やしました。それもボランティアの手弁当で協力頂き、なんとも、今考えると本当に皆々様に感謝するだけです。

平成十三年五月二十七日

第一回の山開きとなり準備をすすめました。公民館を始め、各団体に協力をお願いし、当日を迎えました。天気も良く、良いスタートとなり、登山後は、グリーン牧場様の協力で、つめたい牛乳を無料でいただくことが出来ました。

人の力、人の協力、地域の和を大切にし、そうして川俣里山倶楽部の「かわまた里山十名山」に仲間入りすることができました。

その後は毎年、山開きの前五月初めに、行政区役員の皆さんに登山道整備と草刈りの協力をいただきました。

平成二十二年第十回が、最後に行った山開きです。

平成二十三年三月十一日東日本大震災の後、原子力発電所の事故が起きました。

平成二十三年五月二十二日で山木屋地区は全員避難することになり、登山どころではありませんでした。第十一回目の山開きは、不可能となりました。

二十年前の登山道作り、八年前、三月十一日の原発事故の恐ろしさ・・・色々思い出します。

そして今、（令和元年）現在は、東京電力の職員の手で登山道を整備していただいているところです。

原発事故による山の放射線量も、少しずつ少なくなってきました。あれほど苦勞して登山道を作ったのだから、一日も早く山開きをして、あの樹齢四百五十年以上の大ブナを町内外のみなさんで囲んで、お話ししながら食事が出来るように努めていきたいです。

もう一度、皆さんの「地域の和」をいただき、山木屋の豊かな自然と、豊かな人情と絆を大切にして、盛大な山開きが出来るように努めたいです。

菅野 好広 （世戸四山 六十代）

その当時、スクールバスの運転手をしていました。

突然バスがグラグラグラと揺れ、今日はやけに風の強い日だなどと思い、窓から外を見ると家がこんなにやくのようになぐグニャに見えました。少し離れたところのライスセンターの窓からは火事かと思うぐらい凄い埃が噴出していました。

これは、大変なことが起きたぞ、まずは学校に行かなくてはと学校に向かいました。

子供たちはグラウンドの真ん中に避難していました。寒い日だったので先生方がブルーシートで子供たちを寒さから守っていました。しばらく余震が続いていて、体育館の窓ガラスが今にも割れて落ちそうでしたが、余震が少し収まってきたので、子供たちをバスの中に乗せて、家族が迎えに来るのを待ちました。全員が帰ったのは暗くなってからでした。帰りの道では、途中土砂崩れがあり、Ｕターンして国道に戻り菅の又から田沢を回って帰宅しました。

それから数日が経ち、いわきの次男家族が避難するというのでいわきに向かいましたが、高速道路も四十九号線も通行止めで、三四九号線を通ってようやく嫁と孫三人を福島市成川の長男の家に義母と妻も一緒に避難しました。私ひとり山木屋に残りました。

いろいろとありましたが、過ぎると一瞬の出来事のようにです。

山木屋も変わってしまいました。

しかし過去の長い歴史の中でも、山木屋は十年に一度くらいの頻度で冷夏があり、その中でも天明年間には三年続く冷夏で大勢の餓死者が出たと聞いたことがありました。

それでも生きて山木屋をつないできた先人のことを考えるとき、また、必ず山木屋は復活し未来につないでいくと信じています。

菅野 良弘 (平山 六十代)

1、震災

平成二十三年三月十一日の東日本大震災が発生した当時は、未だJA本店に勤務しており仕事の関係で東京と電話をしていた時でした。あまりにも揺れが強く長く続き、後ろのキャビネットが倒れてきたので、急いで電話を切り屋外に出ました。

それでも揺れはまだ続いていて周りの家屋も大きく揺れるたり、気分を悪くする職員もいたほどでした。この地震の大きさに心配で妻や家に携帯を掛けても繋がりません。これは只事ではないと思い車のナビでニュースを見ると、三陸地方の津波の映像が映し出されその被害の大きさに驚きました。

JA本店では組合長はじめ幹部職員が集まり対策会議が開かれましたが、電話も携帯も繋がらないため、各支店に窓口を閉めるとともに職員を早期に帰宅させることを通知する手段がなく、それぞれの出身地区の支店に職員を直接派遣することとなり私は、川俣支店に内容を知りたくて直ぐに車に向かいましたが、道路はどこも渋滞しており午後四時半前に出発しても、川俣支店に着いたのは六時半過ぎでした。支店は真っ暗で誰もおらず結局その日に通知することはできませんでした。

また、子供達からは携帯のショートメールだけが何とか通じ、お互いの無事を確認することだけは出来ました。帰宅すると停電で真っ暗な家の中で妻と父が、ラジオ放送を聞いていました。父に地震の被害について確認すると我が家は大きな被害は無いとのことでした。一安心しましたが、電気のない生活は不便なもので、余震が続く中不安な気持ちで床に就くしかありませんでした。

次の日は土曜日で日曜日と仕事は連休でしたが、ラジオから流れる情報だけで何もすることもできずに過ごしていましたが、日曜日の夜七時頃によく停電が解消され、テレビで映し出された震災の被害の状況と原発の爆発それと、頻繁に流れていた公共広告機構のCMだけは未だに記憶から離れません。

十四日の月曜日はいつものとおりに出勤しましたが、交通事

情とガソリン等の燃料事情で当面は出身地近くの事務所に勤務と言うことになり、翌日から山木屋支店に出向きました。しかし、オンライン等の機能がストップしていたため、通常の業務はできず来店するお客様への説明と電話当番が主な仕事でした。このような状況が丁度二週間続きました。

この間一番思い出に残っているのは、山木屋のガソリンスタンドの運営です。震災から一週間も経過するとどこでも燃料不足が生じており、また開店しているスタンドも少なく多くの人がガソリンを求めて何時間も並ぶと言う現象が起きていました。

山木屋スタンドも例外では無く、しかも在庫の量も少ない状況でしたが、そんな中で山木屋の人達からスタンドを開けて欲しいとの要請があり、本店の統括部所と電話で連絡を取りとり合えず、有る分だけを販売することにしました。

しかし、販売当日は地区外の人も給油に来ていたため、また山木屋地区の人達から非難を得ましたが、JAである以上本来は組合員さんが優先ですが、異常事態の中ではそういう訳にも行かず理解を貰うに苦労をしました。そのガソリン販売も一時間ちよつとで終了してしまいましたが、本心では自分も並んで給油をしたいところをお客さんの苦情を聞いていなければならぬ我が身の状況を悲しく感じたものです。

2、原発事故

三月十二日には多くの車両が川俣方面に向かうのを見て、何が起こっているのか分かりませんでした。しかし、ラジオで福島第一原発が爆発したとの報道を聞き、大変なことが起きてしまったと同時にここは大丈夫なのかと不安になりましたが、政府が原発から半径20～30 km 圏内の住民は屋内退避指示を出したことから家の中で過ごすしかありませんでした。

当時は少しでも離れた方が良いかと思い、妻の実家に数日間世話になりましたが、十四日に原発三号機も水素爆発を起こしその映像をテレビで見たときは、現実に行き起きているものとは信じられませんでした。

放射能の怖さをそれまでは実感したことが無かっただけに不安ばかりが増しました。特に通勤の途中、完全装備の防護服を着た車両に会うと自分たちはこのような普段着で歩いていて良いのだろうかと思つたものです。

また線量計を持つて走っていると、山木屋ばかりではなく川俣も福島も所々に線量の高いところがあるのを知りました。特に南向台やトンネルを抜けた渡利地区は高かったと思います。

事故後仕事も通常に戻ってから、「県がどの位放射能が降つたか調べることになった。山木屋の水田と畑の二か所を測定するのでどこが良いか。」との相談を受けたので私の水田

を提案しました。

当時、県は農業の再開は5,000 Bq以下であれば作付けして良いとの方針でしたが、測定の結果は、私の水田は約2,850 Bq程度でもう一か所の川芎の畑も約4,800 Bqでしたので山木屋は大丈夫だ、農業を継続できると一安心したのも束の間で、その日のうちに山木屋地区も線量が高く年間20マイクロシーベルトを超える可能性があるので計画的避難区域に指定されるとのニュースが報道されたのです。

これを聞いて私は直ぐに知り合いの工務店に電話を入れ、町内の空いているアパートを探してくれるように頼みました。

3、避難生活

避難は五月末までに完了することとなり、その間国や町から仮設住宅の説明等がありました。私は最初から避難をするなら町内のアパートにしようと思いました。その理由は父が透析の治療を受けていたため病院に近いことと、私も妻も勤めていたので仮設住宅での生活は合わないと思っただからです。

運よくアパートも見つかり三人での避難生活が始まりましたが、日中一人でいることの多い父にとってはアパート暮らしも相当なストレスになったのでしよう。なるべく毎週山木屋に戻り、家で日中過ごすようにはしてはいましたが、そ

の父も急に体調が思わしくなくなり、避難して十ヶ月でこの世を去ってしまうことになりました。

今でも、父には自宅でゆったりした生活を過ごして欲しかったと心残りです。

その後、妻と二人で六年間に及ぶアパート暮らしを経て、避難解除とともに山木屋に帰還したところでした。

帰還を決めた理由は、感情的な望郷感とか義務感とかではありません。冷静に化学的に見て川俣町内・福島市と比較しても住むことによる放射能リスクに大きな差がないことから、山木屋に戻らない理由が見つからなかったからです。

避難生活中、仕事柄放射能に関する情報や県等の施策が早く触れることができたのと、インターネット等で色々な情報を取得できる環境にいたことが、自分なりの決断が出来たものと思います。

最後に、被災した最初の年にJAの青年農業経営塾の開催を担当していた時、放射能の風評被害について塾長でもある東京大学名誉教授の今村奈良臣先生が講演の中で「今回の風評被害が生じている理由は、消費者はもちろん生産者も放射能に対して無知であることが一番の原因である。知識の無いことが不安を煽り、増大させて疑心暗鬼になる。」と言われたことが、とても心に残りました。

また、今村先生は「菅野君、風評を払拭するには時間が掛かります。諦めないことが大切ですよ。」と言われたことを

昨日のように思い出します。

他人の意見を鵜呑みにするのではなく、なるべく自分の目で見て調べて状況を把握する大切さを痛感したところです。先生からの言葉はこれからの人生の中でも重要なことであると肝に銘じているところです。

紺野 早那 (問屋 十代)

私は、震災当時は小学校の教室にいました。六校時目の授業が終わり、帰りの準備をしている最中でした。友人が「地震だ」と机の下に隠れました。それに促されるように私も机の下に隠れました。普段起こる地震よりも長いなと思いつながら、揺れが収まるのを待ちました。すると、先生から外に出るようにと指示があり、教室を後にしました。昇降口に行くと、下足がほとんど床に散乱していました。靴を履き替えるまもなく、外に避難しました。校庭など地割れしているところもあり、幼稚園のフェンスの近くに集まりました。家族の迎えを待ち、各々自宅に帰りました。家に帰ると、電灯が落ちていたり、棚が倒れていたりしている部屋がありました。

しかし、家族の誰も怪我がなかったので安心しました。

それから、数日後に山木屋地区が計画的避難区域に指定されたことを知りました。避難をしてからの生活や間借りした校舎でのなれない学校生活は、大変苦勞しました。小学校・中学校・高校と避難先から通い、七年間はとても長く感じました。二十九年四月に避難解除となりましたが、高校の部活動を引退してから山木屋に戻ってきました。

山木屋に戻ってからは、就職試験に向けて勉強をしました。その年は、正職員の募集がなく、臨時職員の試験を受けました。高校卒業後は、晴れて臨時職員となり働きました。しかし、知識もなく社会人となった私は、自分がなにをすればいいのか分かりませんでした。それからは仕事を覚え、正職員になるための勉強を続けました。その年に、試験を受け、今年の四月に正職員として採用されました。新しい環境で不安なことが多いですが、仕事に慣れるために勉強を続けたと考えています。

また、仕事の後に週三回、町のスポーツ少年団の手伝いをしています。今は指導員の補助として参加しています。高校の友人と大会に出たり、大会の審判の手伝いをしたりして休日なども活動しています。学生時代とは違いますが、体を動

かすことはとても楽しいです。

山木屋も避難解除となりましたが、戻っても同世代の人が少なくとも寂しく感じます。また、戻ってきた人も昔より減っているので悲しく思います。しかし、とんやの郷で、懐かしい人たちと顔を合わせられることができるため、建物があつて良かったと思います。今も復興のために道路が作られているので、もつと地域の人には戻ってきて欲しいと願っています。

私は来年に成人式を迎えますが、晴れ着が着られることを嬉しく思います。これからも仕事や趣味であるスポーツをしながら、晴れ着のように明るく過ごしていきたいと思っています。

紺野 正寿 (問屋 八十代)

○震災当時

避難前は母と私夫婦と長男の四大家族で、母は老人ホームにお世話になっていました。長男は農協に勤め、私夫婦は農

業で水稻と葉たばこを耕作しておりました。

震災当時たばこの仮植床の準備で落ち葉を軽トラックで運んでいる最中に車のハンドルがきれなく変だなと思ったら大地震と分かった。急きょ車から降りて住宅の方を見たら、窓のガラスが今にも破裂するように大きく膨らんでおり、あの光景が今でも忘れられない、その後、電気もこないのでトランジスタラジオで状況聞き、その時、大変な地震だ、と思いました。ロウソクの灯りで早々と夕飯を食べて休みました。

○愛犬との別れ

始めの避難先は隣の飯野町の借り上げ住宅でした。近くには知っている人が居なくて寂しい日々でした。隣町に避難したのです。と言うのは、町の説明では仮設住宅にはペットの持ち込みは出来ないと言われたからです。その二ヶ月後仮設住宅の集会所で催しがあり見に行った時に、近所の人に仮設住宅が空いているから来ないかと誘われ、今後避難生活が何年続くか分からないと思い、町の担当者に相談したら、やはりペットはだめでしたが仮設住宅に入居することは出来ました。飼い犬は仕方なく山木屋の家で飼う事にして、一日おきに通って餌をくれていました。餌を与えて仮設に戻る時、犬が寂しい顔をします。それを見ると後ろ髪引かれる思いで仮設に戻ってきます。その内に愛護団体の方々が餌を

与えるようになり、三ないし四日おきに餌くれに通うぐらいでしたが、しばらくして家に行ってみたら犬が首輪を残していなくなり、家の回りを探しても見つかりませんでした。愛護団体の方がオリを置きつかまえて新潟県まで連れて行かれていたのです。愛護団体から電話があり犬に会いたい時は新潟まで来てくださいとの事でした。しかし新潟まではいけないので誰か欲しい人がありましたら上げて下さいと言いました。これを機に愛犬とわかれしました。これが原発事故の厳しい現状です。

○仮設住宅で

愛犬と別れ寂しかったが仮設住宅の人達と話し合う中で寂しさも忘れ、以前から写真撮るのが好きだったので、仮設住宅の人達や集会所での催しなどを撮りました。イチョウの木の下でベンチに腰掛け世間話をしているのが日課の一つで、その姿を撮るのが楽しく、写っている人にタダであげて皆から喜ばれています。今ではアルバム七冊にもなっています。



また八年ぶりに山木屋公民館で写真展(文化展)を行う事を知り、私も仮設住宅の時に撮った記録写真約七十枚を出展し、皆から関心して見ていた話を聞くと、今まで写真を撮ってきた事は無駄でなかったなと思う。

○避難解除く現在

避難解除と同時に山木屋の家に戻りました。風呂と台所を新しく入れ替えをして住みました。「耐震の調査を無料ですます」の広告を見たので調査をお願いしました。その結果、築六十年が経っているので土台から直すようになると言われ、息子と相談し急ぎよ新築する事になり、解除一年後の五月に引っ越しました。新しい家は段差がなく、六年もの避難生活の中で二人とも足腰も弱って来ているので、今は快適な生活を過ごしている。

これからの山木屋は、働き盛りの若い人達は、六く七年が経ち避難先で働く職を見つけて働き、避難した先に定着していると思うので、どんなに農業の近代化を進めても戻っては来ないと思う。そう考えると山木屋の将来を言葉に表す事は非常に困難だと思う。

私は八十歳半ばを過ぎ健康もすぐれないので、今の健康維持しながら好きな写真を撮りながら夫婦仲良く楽しく過ごしていきたいと思っています。

山木屋の魅力、それは「自然の豊かさ」だと思う。又、その中から自然と地域の人達が共存共栄しながら育んで来たあつたかな地域性です。ステキな環境から「結」を生み、相手を思いやる心、助け合う力が受け継がれて来た人間性豊かな山木屋だと思います。それに加えて、この地域は、地球温暖化、地震にも強く、水害も少なく日本で一番安全な場所だよと、地域づくりインターン生等にもよく言っていました。

ところが、私自身東日本大震災で原発事故が起き、放射能汚染に苦しむとは夢にも思っていませんでした。

それは、小学三年の時、社会科見学で大熊町にある東電第一原発PRセンターで見た太い鉄筋が組み込まれたメートル以上のコンクリート原子炉壁。絶対原発は安全だと言う先入観が脳裏に生き続けてきたからだと思います。

原発事故直後、消防団からはいつでも避難できるように指示されました。病気の両親を連れて県外には親戚もなく、何処に避難するか迷いながら、会社はどうすればいいのか、原発事故での避難区域で六十五%の顧客を失い、若い社員も県外に避難する可能性が高まり、休業に追い込まれたら、畜産

業の電気工事に特化している会社としては倒産を意味します。

この状況で後何日間会社が続けられるか、その間どう手を打てば継続できるかを考えると、自分たちは何も悪くないのに「なぜなの」と自分に問いかけ、車一台、人ひとり通らない雨に打たれた国道を見つめていた時、急に涙が流れて止まらなかった。でも一日一日継続する事だけに集中して我慢の日々を過ごしました。その年の五月七日に川俣町内に、会社、住宅も避難出来ました。

幸い社員も誰一人欠けることなく事業を継続出来ました。若い社員は出来るだけ県外出張工事。復興工事関係、畜産補助事業による仕事の増加、そして、補助金活用で制御盤工場の新築、四名の新規雇用、作業車両、重機等の増設。

何と言っても地域の人達のご協力、そして社員のやる気と努力によって、震災前の会社に戻すことが出来ました。みなさんに感謝の気持ちで一杯です。

平成二十九年三月三十一日 山木屋地区避難解除後、妻と二人で山木屋の自宅に戻りました。店舗を改装して食堂 語らい処「やまこや」を、その年の九月一日に開店しました。現在、店舗隣接地にグループ簡易宿泊施設を建設中です。その思いは、働く場所を作り、特に若い人たちがひとりでも山木屋に戻って来て欲しい、交流人口を増やし山木屋に少

しでも「にぎわい」を取り戻したい、人と人との交流温もりを作れる場所を提供したい、ということです。そして、地域の皆さんに少しでも恩返しができるよう日々努力したいです。

私の一番の願いは、いつか子供達が外で大きな声で元気にはしゃぎ回る姿を見る事です。

佐藤 覺雄 (川芎 七十代)

平成二十三年三月十一日 震災前までは、家族四人で平穏な毎日を送っていたが、その時は突然やつて来た。その日は、寺の総代世話人会の日で、午後二時三十分より総会が始まったが、二十分位過ぎた頃、突然大きな地震にみまわれた。総会に出席していた三十数名の役員全員が表に出たが、立っているのがやっとの揺れで、駐車していた軽トラックがジャンプしたのは、みな驚いた。地震がおさまったので総会を再開したが、数分で再び大きな揺れを感じた。その時、役員の奥さんが何人か来て、家の瓦が落ちたと言って来た。それで、

今日の総会は中止となった。翌日、境内をあちこち見ると、門柱二本のうち一本が倒れ、石の大佛も倒れていた。幸い家屋、本堂や観音堂は無事だったが、位牌堂の中の檀家の皆様の位牌がすべて倒れていた。

その後、東京電力原子力発電所が爆発して、住民に避難命令が出され、山木屋のほぼすべての人が避難を始めた。私の家族は、まず母を南東北リハビリ館に頼んで、その後六月の上旬に娘の嫁ぎ先、川俣町羽田の菅野家に避難をしたが、毎日羽田より寺に通うことになる。その後、羽田より、仮設住宅に移り、避難解除まで毎日ほとんど休むことなく寺に通った。自分でも良く避難解除の平成二十九年三月三十一日まで六年間通ったものだと思う。

解除後は、寺に戻り、震災前と変わらない生活をとっているが、田畑で作物が作れないのが一番変わったことかも知れない。

又、平成三十年九月に、息子に住職を譲って、私は東堂と言う立場で息子に寺の事でいろいろアドバイスをしながら毎日を送っている今日この頃です。

これから、夫婦で旅行でも行つて楽しみたいと思っています。

佐藤 茂 (坂下 七十代)

・震災前・震災

家族七人で暮らしていました。構成は、私夫婦と長男夫婦と孫が三人でした。私ら夫婦と長男夫婦はそれぞれ勤め、孫達は山木屋の学校に通っていました。一般の生活と同じ暮らしをしていました

三月十一日の東日本大地震の時は大人四人共、働きに出ていました。孫長男は卒業式を終えて早く家に帰って来て一人でした。妻は家が心配なので早めに仕事を切り上げて帰ってきすぐ学校へ行き、孫二人を連れて帰ってきました。長男孫はひとりで寂しくみなが帰って来るのを待っていました。嫁さんは夜勤でいみせんでしたが、全員無事でしたので一安心しました。

・避難

長男夫婦と、孫達は優先的に川俣町体育館に避難し南小学校に通うことになりました。私達は仮設住宅が出来るまで、つきだて花工房に避難しました。その後、農村広場・町体育館の二か所に仮設住宅が出来上がり、孫達の学校が終わった後の面倒を見るのに都合が良いので体育館の仮設住宅に入る事にしました。

私は避難後も同じ会社に勤めていましたが定年を迎え退職、その後、パトロール隊員に誘われて申し込みをしましたら採用され、現在も続けています。妻、嫁さんは新たな職を探してそれぞれ働いています。私達は山木屋に住んで居た時は、戸を開けておいたり大声で話したり誰にも気がねすることなく暮らしていましたが、仮設住宅での生活はそうはいかないので大変苦労しました。が、その内、隣近所は山木屋の方々なので、段々となれてきました。友達も増え、良い経験をさせて頂きました。

・避難解除

平成二十九年三月三十一日避難解除されました。私達の部落は居住制限区域でしたので復興住宅を町から進められ、家族と相談しいろいろ迷いましたが復興住宅にお世話になる事にしました。長男夫婦と孫達は、お嫁さんが福島市内で働いている関係で福島市内に住宅を新築し、そこで暮らすようになりました。

私夫婦はしばらく復興住宅で暮らしていましたが、どうしても山木屋の大自然で暮らしていたことが諦めきれず、帰る事にしました。私の住んで居た所は一軒しか戻っていなかったのですが戻りました。復興住宅の仲間達から「もう帰ってしまうのですか。」と、言われました。

「都会暮らしは私らには合わないので戻ります。」
と、言って帰ってきました。

・現在・これから
帰って来て、やっぱり山木屋はいいなー と思います
勤務しているパトロールの仕事は山木屋から通つていま
す。

妻は、花のない生活は生きている価値がないと言うぐら
い花が大好きで、野菜畑を残して後は全てに花を植えて毎
日咲いた花を見て楽しんでいます。私は仕事の合間をみて
釣りに出かけています。

これからは、健康に注意をしながら、好きな趣味を生か
し人生を楽しく過ごしていきたいと思います

佐藤 新一 (菅下 八十年代)

震災、原発災害があつたあの日、わが家にとって忘れるこ
との出来ない日であります。それは、小生の家内が末期がん

と云う事で済生会病院に入院中でありました。突然の地震で
部屋の天井が落ちるような様子でありました。その時に家内
が目をばつとあけまして病気が良くなるのかなと思いまし
たが、三日後の早朝、静かに息を引取りました。震災で葬儀
場が使用できなくなり、お盆近くになりようやく葬儀を済ま
せました。

原発事故による避難指示がなされましたが、仏をかかえて
の事で、まず親類の戸沢に半年程世話になって、その後川俣
の仮設住宅に世話になり、避難解除により現在、元の山木屋
に帰りまして静かに毎日を過ごしているところであります。

わが家の農業は、もともと畜産農業であり、酪農を二十代、
三十代と取組み、その頃は手しぼりの時代でしたが、「ミル
カー」が導入されてから大変良くなりました。が、小生の仕
事の都合から和牛飼育になりまして、牧野を囲い放牧畜産を
行い、又、減反による水田一町歩程のこれ又放牧飼育を行っ
てまいりましたが、時々脱柵をされ逃げられる事が多くなり、
大変になった事から、原発災害の前年の八月に和牛飼育をや
めまして、来年から「ひつじ」を飼う計画をしていたところ
でありましたが、山木屋からの避難で、これが実現されなか
ったので農業生産「ゼロ」で、賠償を受ける事はできません
でした。

又、当時浪江の農青連の元盟友からもらった「ウコッケイ」

を十五羽程飼っておりました。避難していた東和の親類の家は農家でありまして、畜舎がありましたので「ウコッケイ」をもつて行きましたが、その後、山木屋に移して飼育しておりますが、J Aの直売所で卵を少し売って収入を得ておりましたが、ある日その小屋にキツネに入られて「ウコッケイ」を全部取られてしまいました。

さて、小生昭和六十三年來、J A役員としてお世話になってきました時代に外国農業視察に参加させてもらいました。アメリカのカルフォルニアの牧場で十万頭の牛が放牧されている様子を空からの見学で、牛がマッチ棒のあたま程に見えました。広い牧場でありました。大きな国だと感じられました。最近新聞テレビで今日日本の食料自給率は三十七パーセントだと報じられております。文明国として先進国と云う国にしては低すぎる数字で大問題だと思えます。今年は国政の中で、食糧、農業、農村の基本計画が見直される年と云われております。川俣町の統計によると、町の山林の面積は84・49平方キロメートルと大きな面積であります。これが活用され国家プロジェクト等の施策の導入をもつてされるならば、外国輸入されている肉、及び小麦等の国内自給の度合いを高めることが可能とされ、そのための牧野の開発及び畑地の造成がなされる事を進めてもらいたいものです。これらを是非今後の政治課題に充分なる取り組みを願うもので

あります。そうされる事によつて、われわれ老人も含めて働く場が得られるものと考えます。

そして、最後に申し上げたい事は、原発は「ダメ」です。原発は安全・安心だと云つて原発を進めて来た政治家は、その責任を果たしてしるべき事と申し上げます。

佐藤 信雄 (入久保山 六十代)

震災前、平成二十二年春、要支援一と認定された母。父母ともにこの年も農作業をいつもの様に手伝ってくれてありがたかった。秋には肺気腫と診断され、来年の生業はかなりハードになるなあと、めまいがしていた。どうしたらこのピンチを乗り越えられるだろうか、とにかくやるしかないだろう・・・と。

平成二十三年三月十一日二時四十六分 この日は山木屋に居た。

いつもの様に灯油配達のアルバイトをしていて、タンクへ

灯油を補給中、突然立っていられない様な激しい揺れ。一端給油を辞めて待機。ローリーがひっくり返るんじゃないかと思った。ゴーゴーという凄まじい音、雪は降ってくるし、寒いし。早く止まってくれと空を見上げていた。

本当にこの間の長かった事。これだけ強い地震を経験したことはなかった。幸い建物等倒壊した様な所はなく、ほっとした。

しかし停電にはほんとうに困った。今や、電気なしでは生活できない。我家では、父の酸素の機械と地下水を汲み上げるポンプの電源には困った。なんとか発電機にて対応。三日目ようやく復旧。この間の長かった事、本当に電気のありがたさが身にしみました。

インフラの寸断での燃料、食料他物資の滞り。とにかくこんなことになるなんて、思いもよらない事態となってしまうた。

さらに東京電力福島第一原発事故。これも不幸中の幸いで、このくらいで済んだから今こうしていられるけれど。

平成二十三年度の葉たばこの作付けは、県下一斉に休作。育苗はして苗配布までは行ったけれど、その後の作業は中断、後片付けをして終わり。水稻の方も作付け中止。田畑の周囲の草刈りと畑やハウス周辺の立ち木の枝打ちなどはやった。また、田んぼの中の草刈りもやってみた。

父母を姉の所へ（松戸）少しの間預かってもらった。

五月中に避難して下さいと指示が出された。が、どこへ行っているのやら。とにかく母を預かってもらう所を探した。幸いリハビリ南東北川俣さんで、まだ空きがあり五月十八日に母を入所させてもらいほっとしました。

父と私と妻の三人は、娘のところに行きこんだ。

壁沢団地は結構広いので助かった。ここに約一カ月お世話になった。

六月二十七日に農村広場仮設住宅に引っ越した。狭いけれど全部が新品の為、気持ち良かった。ここで、当分の間生活するんだな、何となく実感がわかなかったが、月日は待たなしで過ぎていく。

六月二十日山木屋地区のパトロール開始、入隊、又、農地の剥ぎ取り除染の為、時間がかかりそう。黒いフレコンバツクが目立ち始め、手つかずの所は荒れ放題。故郷の変わり果てていく姿を見ながらのパトロール。長期戦になりそう。

父が避難してから三年目くらいで、外に出なくなり段々と歩けなくなってきた。平成二十七年十月七日までパトロールをやめさせてもらった。

約四年間大変お世話になりました。ここから、父の介護が始まりました。

また、母の方もずっと一か所でお世話になり安心でした。けれど、あつという間に要介護5になり、生きているだけになつてしまいました。

平成二十八年に入り、父の体調不良、入退院の繰り返し、七月二十三日退院、まっすぐ山木屋の自宅へ戻った。家はいいと苦笑い、食も前よりすすみ元気が出てきた。

まだ準備宿泊中なので、地区ではだれも帰ってこなくて寂しかった。が、ヘルパーさん訪問看護士さん、訪問入浴さん、又、介護所でのショートステイなどのお世話になり、疲れをおこす事もなく、お陰様で父の介護もできました。ありがとうございました。

避難中に母を、解除後に父を亡くしたけれど、このような時で生業のことは考える事なくつきつきりで介護できた事は、本当に良かったと思います。

しかし、なんとなく複雑な心境である。

平成二十九年三月 山木屋葉たばこ協議会解散 皆様長い間ご苦勞様でした。

三月三十一日 待ちに待った避難先からの帰還開始。それぞれの家庭の都合のある中、ここ坂下でも一軒、また一軒と増え、五軒になった。

ようやく少しはにぎやかになってきた。ごみステーションが無かったので新設した。まだ来ない人にも声をかけた。ここで顔を合わせてコミュニケーションをとります。

町内の宮町に建てた住宅も三年目。この三月から家族全員

と同居はやはりいいけれど、めいめいに言い分があつて、にぎやかすぎる中での生活。となりも近いし色々と気を使う。何となくくつろげないところが有ります。が、それでも最近ようやく慣れてきた所です。

どこへ行くにも歩いて行ける距離がいいね。

さて、最後にこれからの事なんですけれど、最後まで農業人として終わりたいけれど、仕方がないですね。

家族がいて、仲間がいたからやってこれたのだと思います。やはり、一人では何もできないし、精神的に疲れました。まして、持病の腰痛には日々悩まされています。

とにかく、農業のことが一番気になります。先祖様の事を思うと荒廃させたくないし、便利の良い農地は借りて欲しい。不便な所については、何とか自分で保全していきたい。どこまでやれるかわかりませんが。

とにかく、一日一日を大切に、悔いのない様に生きていきたい。

佐藤 正明 (石森出身 東京在住)

山木屋地区と原発事故と私の思い

(原発事故と計画的避難)

とんでもないこと・ひどい目に遭ったものだ。

山木屋に住む人々が何か悪い事でもしたというのか。

東京電力・福島原子力発電所のおかげで、福島県民は恩恵をうけてきたから、少しぐらいのことは目をつぶれとでもいうのか。

山木屋の住民はそんな恩恵など一切受けていないはず。

それどころか、原発事故が起きた場合、発電所から三十数キロも離れた山木屋の地にまで影響が及ぶとの説明は、かつて一度も聞いたことはない。

原発事故は起きない、だからそんな影響を考えることは「杞憂だ」。あるいは滑稽な話だとさえ言われてきたのではなかったのか。

山木屋地区が計画的避難区域に指定されるという新聞記事を見て、私の胸の中に、何とも整理のつかない疑問や怒りが湧き上がってきました。

十八歳の春、それまで育てられた山木屋の地を離れるまで、

東京電力の原子力発電所が、その電力供給地である関東ではなく、関係のない福島県内に立地することなど、新聞でちらりと見た気はするが、遠い町村の話でしかなかったのです。

今になって変な話だと気付くのです。東京電力の管内の関東では立地反対運動を怖れたのだと。農林漁業の第一次産業が主で、冬には出稼ぎに頼っている地方なら反対運動は抑え込めると。立地交付金と地元雇用の餌に食いつくはずだと。いくら安全だと言っても、事故が起きたら大変な事態になる原子力発電所を、国策で推進するのだから、電力会社の管轄以外でも、反対運動の少ないところを選んで立地するという方針は最初から決まっていたのです。

次に、原発事故に対して「計画的避難区域」とは、苦肉の命名なのでしょうが、あまりにも間の抜けた、とつてつけた官製用語としか思えません。

原発のメルtdown事故が起きたのです。政府はその放射能汚染状況は直ちに国民に知らせるべきだし、山木屋も緊急に避難すべき地区だった。詳細を何も知らされていない山木屋の人たちに不安が広がるのは当然でした。

地区の中央を通過する国道一一四号線を通って、浪江町や双葉町など浜通りから避難する人たちを目にすれば、自分たちも安全な場所に避難することを考えます。そして、一時的にせよ避難した人たちが三月十九日時点で地区住民四割に当たる五〇三人を数えたのでした。(川俣町の依頼によ

る自治会・消防団調査

それに先立つ三月十六日時点で、アメリカ政府は、福島原発から半径五十マイル（約八十km）圏内に住む自国民に対し、いち早く退避勧告を発していたのです。

このような緊迫した状況の中で、政府や福島県の対応は、あまりにも遅きに失したと言わざるを得ません。山木屋地区が計画的避難区域に指定されたのが四月二十二日、政府指示による避難開始は五月十五日と原発が爆発してから二カ月も経過していました。こうした中で、山木屋地区住民の政府に対する不信感が大きくなっていったことは想像に難くありません。

その次に、私の心に浮かんだ心配は、①山木屋の人々の放射線の影響と、②避難先の問題でした。

①双葉町から川俣小学校に避難してきた子供たちには、事故を起こした原子炉から放出された放射性ヨウ素の被ばくの影響を避けるために、安定ヨウ素剤の服用が実施された。でも山木屋の子供たちには、それは行われていません。

それ以外にも、同じく原子炉から出た放射性セシウムをどれくらい浴びたのか、五月になって避難を開始した人々の健康への影響はどうなるのか。「いまだちに、健康への被害はない。」という政府や県の発表は何を根拠にしているのか。そもそも国は実態解明につながる初期の放射線被ばくに

ついて信頼できる調査をしていないと思うのです。

福島県での初期調査は、国の原子力災害対策本部が二〇一年三月下旬に実施したいわき市、川俣町、飯舘村の子供千八十人の簡易測定と、弘前大の調査班による同四月の南相馬市と浪江町の住民六十二人などに限られるのです。

さらに国の対策本部は、内閣府原子力安全委員会から、より精密な追加検査をもとめられたが「地域社会に不安を与える」などの理由で実施しなかった。

また弘前大調査班は、福島県から「人を測るのは不安をかき立てるからやめてほしい」と要請され、継続検査を断念したと聞きます。

②避難先をどこにするのか、どうやって探すのかも、とても心配でした。

健康被害を考慮しなければ、時間的には余裕があったとはいえ、既に浜通りなどから多くの避難者が県内外に避難先を求めた残りを捜さなくてはならない。

また、牛など家畜への対応も、未知数のことだらけだったと思います。

結果的には、それぞれ知恵を絞り、親戚友人の力も借りて、町内や県内外に避難し、仮設住宅が完成後はそこに移った人たちも含め、日常生活を取り戻すために頑張った。しかし、いずれにしても仮の住まいで、山木屋に残した自宅のメンテナンスや、心無い盗難被害への対応など苦心の毎日だったと

思われます。

このような事態を受け入れることに耐えられない、心細さを象徴する事件がありました。原発事故関連死の山木屋地区第一号ともいえる自死事件です。

そのころ、私は、ボランティアで関東地区の『いのちの電話』相談員をしていた。

一日二十四時間、年中無休の『いのちの電話』の一番の目標は、自死を考える人の訴えを聞き、寄り添って一緒に考え、自死を思いとどめさせることです。

福島市や郡山市にも『いのちの電話』がありますが、その存在は一般的に知られていないのでしよう。たとえ、知っていたとしても、原発事故のような、理不尽なことの遭遇した場合、『いのちの電話』など、解決のためにはとるに足りない手段としか思い浮かばなかったのではないか。

私自身の無力さを思い知らされたし、一方でこのような事件を起こすもとなった東京電力や、いわゆる『原子力ムラ』の無責任さに怒りがフツフツと湧いてきたことを覚えています。

この原発事故について、国会事故調査委員会は、政府、規制当局、及び東電の不作為による「人災事故」と結論づけました。しかし、それを受けて、国会は事故の世委任者の追及や処罰など、本来やるべきことに何ら手を打ちませんでした。

刑事事件として東京電力役員などを告訴したのは、（私を含めて）一般の市民です。検察当局は（政府に付度して）不起訴を繰り返しましたが、市民の力で「強制起訴」となり、裁判が行われています。一番の東京地方裁判所では東電の元役員三名に禁錮五年の求刑が行われて結審し、この九月に判決が予定されています。

その判決内容が有罪・無罪のどちらでも、続けて、高裁、最高裁という長い裁判が予測されます。最終結論が出るのを見届けるまでは、後期高齢者になった私でも、死んではおれないと思っています。

（避難解除と原発災害からの復興）

原発事故による避難指示が解除された山木屋地区の復興については、私には儀式としか思えない出来事があります。

政府は、六年という根拠が詳らかでない避難解除の年限を定め、二〇一七年三月に山木屋地区の避難を解除しました。住民から強い要請のあった森林除染は手つかずのままなのです。これではいくら安全と言われても、子供たちを住まわせることに山木屋の人々が二の足を踏むのは当然と私は思います。

二〇一八年四月には山木屋小学・中学一貫校が開校しました。合わせて十五名の生徒たちは、全員が山木屋地区外からのスクールバス通学です。一年後の今年、小学校は六年生が

卒業し休校となりました。この生徒たちは山木屋中学校に進学しないので、三年生だけの中学校も来年二〇二〇年には開校二年で休校となるでしょう。

大人たちの政治的な思惑で、『復興』の名の下に行われた一年間ないしは二年間の開校期間中、子供たちはどんな気持ちで通学していたのかなあ。山木屋小学校や中学校の校長名の卒業証書が授与されたことが『勲章』という人がいても、子供たちにはピンと来ない大人の仕組んだ儀式にすぎないと私は思うのです。

さて、復興をどのようにしていくのか。これまでの政府と県のやり方を見てみると、放射能の影響を過小評価し、それに対する批判や行動を「地域社会に不安を与える。」との理由を付けて抑え込もうとしてきました。根拠もなく「笑って暮らせば、健康に人生を送れる。」と言って、除染も地区の大半を占める森林の除染を見送っているのです。

これに対し、古川町長（当時）は「住民が立ち入る里山は除染すべき。生活に密着した森林を再生しなければ、山木屋の復興は難しい。」と、国に森林除染の実施を切望していました。（福島民報社新聞 二〇一四年四月二十二日による）政府が最初に定めた除染の長期的目標は、「追加の被ばく線量 年間一ミリシーベルト以下」でした。

しかし、その目標を達成するには、住宅地や農地を除染し

た後でさらに五〜六兆円の費用が必要とのことで、目標そのものがあいまいにされ、個人の判断という押しつけが、政府によってなされてきたのです。

田村市都路地区が区間線量五ミリシーベルトで除染した後、政府はこの地区の避難指示を解除しました。これがその後の他の地区の避難解除基準モデルとなったのです。その当時、政府原子力災害現地対策本部の赤羽一嘉本部長は、都路地区の住民説明会で「解除したから帰還しなさい、ではなく個々の判断です。」と述べています。（毎日新聞二〇一四年三月九日による）無責任極まりないと思います。

東日本大震災で一番大きかった津波被害からの復興と東電・福島原発被害からの復興には、根本的な違いがあります。

この長期に続く放射線による被ばくと健康への影響を、きちんと調査し、それに基づく除染が必要です。また、特に子供たちへのケア対策を示して、安心して暮らせることを地区の住民に伝えてこそ、復興への道が開けると私は思っています。

最後に、私は、山木屋中学校の同級生（廣野隆俊公民館長など）をはじめ、避難後山木屋に帰り日々奮闘されている皆様に心から敬意を表します。医療、防犯、防獣その他の取り組みべき多くに課題の解決に、地域一丸となって邁進されま

すようお願いできません。

佐藤 美佳子 (坂下 福島市在住 三十代)

私が山木屋に来るようになったのは、主人の実家があったため、十数年前からのことです。

震災前までは、たばこの葉を摘んだり、田植えを手伝ったり、時々ですが、したことを思い出します。当時、いわき市に住んでいた私たちは、浪江から津島を抜けて何度か山木屋の実家へ来たものでした。豊かな自然が山木屋の財産であり、それが失われる日が来るとは夢にも思いませんでした。

二〇一一年三月十一日。

あの日に忘れもしない東日本大震災が起きました。

震災が起きた時、私は福島市に住んでいました。今までに体験したことがない揺れでしたし、その後の停電、断水、食料不足など、市内でも混乱がありました。そんな中で、福島原発における事故の映像を見て、これは大変なことが起きたとなんとなく感じていたけれど、それが自分の家族に災難としてふりかかるとは予想だにしませんでした。

避難が決まってからは、生まれ育った家を離れる無念さを抱えながら、今後の住まいを考えなければならず、義母の心労は相当なものだったはずですが、それでも、足の悪い祖母のために借り上げ住宅に住むことが出来たのは救いになった

のではないのでしょうか。

離れて暮らす私たちに出来ることは何もありませんでしたが、孫の顔を見せに行く、話を聞きに行くことが励みになればと、避難先へ顔を出すことが度々ありました。その都度祖母が、

「原発さえなければ・・・山木屋に帰りたい・・・」

と、言っていたことを覚えています。月日が経つにつれ、そう言うことは少なくなっていきましたが、当初そばで毎日聞いていたであろう家族の辛さはどれほどだったかと思えます。事故さえなければ、それは避難を経験した誰しもが抱え続けた思いでしょう。

八年という長い長い避難生活も、避難指示解除という形で終わりを告げることとなりました。

山木屋に帰るということを決めていましたが、家を建て直すしなければならず、帰ることも容易ではありませんでした。「解除」の一言で済ませようと思いますが、そこには住む人がいて、住む家があって、その人たちの人生があるということ忘れてほしくありません。

今、山木屋の実家は家を建て直し、元の場所で新しい生活を始めました。かつてのように花や野菜を育てて穏やかに暮らすことができるようになって、ほっとしています。しかし、同じ山木屋に戻ったとしても、震災、原発事故により変わっ

てしまったもの、失ってしまったものが多くあり、決して元に戻ることはありません。

それでも、八年もの間耐えてきた義母たちが、ようやく取り戻した故郷なので、これからの山木屋が笑顔であふれることを祈っています。

佐藤 盛雄 (坂下 六十代)

震災前は家族三人で葉たばこ、水稻、和牛を主とした農業経営をしていました。

例年通りに葉たばこを準備していた時、大地震が起こりました。今まで感じたことのない大揺れで、建物まで倒れてしまいそうな揺れを感じました。が、幸い何事もなく無事でした。

しばらくすると、停電になり、電気のない生活が、三日間つづきました。消防団員の方々と区長さんたちが広報活動をしており、商店さんの協力でカップ麺などの配布をしてもらいました。ほんとうに感謝しました。

また、葉たばこの種まきをしていたので、役員さんが交代で灌水を行いました。

そのうち、親戚の家に三日間自主避難しました。国道は、浪江方面からの車で大渋滞でした。

そののち、東京電力の役員の方から、謝罪の言葉や、政府からの避難計画の説明があり、各自避難場所を決め、自分は旅館に希望を出し、約二カ月間お世話になりました。(一次避難)七月から仮設住宅に入居し、避難解除まで約六年間お世話になりました。(二次避難)

その間、田畑の草刈りや家財の整理、農業資材、農機具等の処分、又、家のリフォームなどを行いました。

避難解除と同時に母と二人で帰還しました。

今振り返って見ますと、長い六年間でした。昨年は母も亡くなり、現在は一人です。

これからは、田畑の保全管理や、自家野菜などを作り、趣味を生かしながら前に進みたいと思っています。

鳴原 勝由 (蔵平 五十代)

・震災前

我が家は、葉たばこと、水稻の農業で暮していた。私が三十六歳で勤めをやめて専業農家となり、近所から有休農地を借り受け、本格的に農業に取り組み、規模拡大を進め、大型機械も導入し、山木屋でも大農家と呼ばれる中の一員となっていた。

また、家族も三世代八人と、これまた指折りの大家族であった。

・地震の時

三月十一日、昼休みも終え、公民館に用事があり改善センターに行っていた。その時、地震に遭った。駐車場が地割れしながら動くなか立っていた。早急に家に帰り安全を確かめた。我が家は大丈夫であった。電気が来ない為、発電機を回しテレビをつけた。世の中の状況を確認。津波の襲来と、原発の事故を知った。

・避難になるまで

ガソリンが少ない中、たばこの育苗センターに通いながら、パソコンで放射能の流れを確認していた。

四月二十二日に避難指示になるまで、育苗作業を続けていた。究極なのは、子床を作る為、原発事故後、山に行ってマスキもつけず素手で木の葉を集め、袋に詰めていた事だった。放射能に対しては、全く無知であった。

また、この時、一区行政区長であったので、毎日がとても忙しかった。

・避難中

当分作物は作れない事になってしまったので、専業農家を始める前に勤めていた会社で復職する事になった。

両親は、仮設住宅での生活が始まった。

子供たちは、それぞれの生活を始め、一家八人は五か所に分かれて暮らす様になった。

・避難解除

国は、理不尽にも避難解除に踏み切った。

山木屋の核のゴミを置いたままである。ただでさえ放射能が残る地域に、目に見える物体までもがあると、子や、孫が生活するはずがない。

私の親達は、「帰りたい」と、解除と同時に山木屋の家に帰った。

父親は、その年の十二月に他界、山木屋での余生は、半年で終わった。

・現在、これから

私達は、二本松で生活をしている。長男家族も近くに住んでいる。

現段階では、山木屋の農作業の再開は考えていない。避難と同時に、借りていた農地を返した。本来我が家は、小作規模の農地しかないのです、あまり痛みはない。が、先祖様には申し訳ないと思っています。

鳴原 正 (蔵平 六十代)

震災前

私は、地元の笠原鋳物工場に勤めまもなく定年を迎えようとしていました。

娘は、同じ山木屋にあるシェルモールド・カンノに勤めていました。

孫は、小学生三年生と、四年生になり、町内南小学校に通学していました。

農業は、同じ境遇の勤め人同士の三人組で稲作を土日利用して必死に育て励んでいました。

会社では役職に就き、娘や孫たちと、特段裕福ではないけれども人並みの暮らしはできていました。

地震の時

あの日、私は会社の倉庫にいました。大きな揺れを感じ倉庫の外に出て工場に目を向けると、工場が軋む大きな音とともに揺れています。工場の上についている煙出しが左右に大きく揺れ、今にも引きちぎれそうになっています。検査員が工場から出てきて私の傍に来て、心配そうに工場を見つめていました。一旦揺れが小さくなり工場へ足を向けようとしたら、更に大きな揺れが襲ってきます。止む様子のない揺れに、隣の検査員が「どうなってしまうの」と悲鳴をあげます。長い揺れがようやく収まり、従業員の確認と工場の点検、キューポラの湯を抜く作業に入ります。従業員が食堂に集められ、工場長から早く帰って家族のもとへ、との話の後、解散になりました。

私は自宅に戻りました。台所側が地割れと共に傾き、アルミサッシの引き戸が外れ地面に落ちていました。室内の壁が剥がれ落ち、仏壇は倒れています。食器棚の食器も棚の内外で壊れています。それでも住めないほどの被害は見当たらないので、ひと安心しました。

娘が孫を連れて帰ってきましたが、怖がって家の中に入ろうとしない孫をなだめるのに難儀しました。

避難になるまで

地震の後、電気が復旧すると同時に、幹部が会社を集められました。顧客要望により、至急生産を開始しなくてはならず、生産に向けて工場内の点検に入りました。幸いキューボラに傾きやズレは見られず、造型機、砂混練機その他の機械にも不具合はありません。どこよりも早く生産が開始されました。燃料不足の中、会社のワゴン車を通勤に提供し、梁川、保原から従業員の足としました。震災後に関わらず会社は忙しく、食料不足や燃料不足とゴタゴタ続きの生活の中で原発事故が起きました。

浪江や飯館に高線量地帯が存在することが報道されました。従業員の中に津島境から通勤している者がおり、自分の今いる場所が高線量地帯でどうかしてほしいと訴えていました。晴天の霹靂という事態が起きます。

国は避難区域の発表を行いました。生活改善センターに山木屋の住民が集められ、マスコミ、国、県、町、議員役員が居並ぶ中での説明会が行われました。怒号、喧噪、不安・渦巻く中で「えらいことになった。」と思いました。

山木屋が避難地域に指定されたことにより、会社は岐路に立たされます。山木屋で生産できない場合の対応と、山木屋

での生産を町へ要望します。自動車メーカー間に於ける部品供給網の一翼を担う製品は、供給義務を負います。顧客は、万が一笠原鋳物の製品が供給されない事態に備え、余分に製品を抱えておきたいと考え、通常の倍の発注をかけます。又、顧客に安心してもらう為に、代わりに生産していただく工場を見つけお願いし、代替え生産ができるシステムを構築し提示しました。放射能騒ぎの中で生産に追われる日々が続きました。五月中旬、笠原鋳物に避難区域での生産が認められました。条件の一つに、従業員は避難区域外から会社に通勤する事がありました。急遽、住居確保に奔走します。幸い借上げ住宅が見つかり、五月末日飯野町へ一家四人で避難しました。

避難中

私が避難した先は、以前ブローラーを経営していたがその後廃業し、今は住む人のない空き家でした。環境は、山木屋と近いものでした。生活は徐々に落ち着いていきます。

避難先から通勤通学が始まり、特に通学にはスクールバスが手配されました。

会社では、派遣された長崎大学教授から放射線防護の教育を受けました。放射線防護の観点でいろいろな制約がありました。汚染物質は、持ち込まない、持ち出さないが原則です。その為、入口は二重にしました。会社内と会社外を遮断する

ため、入口だけでなく、履物、衣類を完全に分けました。外気を遮断する為、窓は締切になりました。鋳物工場にとつて夏の暑い時期の窓締切作業は、辛いものでした。製品の出荷に当たっては、製品の放射線量を測定し、空間線量を引いて月一回データを納品先へ送付します。これは顧客の要望でもありますが、その先にいるユーザーに安心して頂くためです。会社内でも、従業員に安心して働いて頂く為に、会社内十七か所を指定し、毎日線量を測定し掲示しました。工場敷地も測定位置を指定、測定し月一回掲示しました。

山木屋の除染の意向が国より示されました。数回の説明会を経て、除染の方向が決まりました。私は、除染によりリセットまではいかなくても、綺麗になると思いました。そうすれば、いずれこの地に戻ってこられる、安心して暮らせるはずと考えました。当時、木に付着した放射性物質が問題になっていました。国は木の除染は行わない方針であり、私は井垣の伐採を要望しましたが駄目でした。除染しても木が残っているのは、結局安心できません。私は井垣の伐採を決意します。苦勞の末、井垣はすべて伐採しました。除染が行われ、住居周辺は綺麗になりました。しかし、いまだに山木屋へは戻っていません。

私も、娘も震災前と震災後で職場も同じ、孫たちも通学は同じ南小学校から川俣中学校へと、基本生活は変わりません。農地周辺も当初は避難前と同等の思いで草刈り等をしてしまし

た。将来を見通せない現実、時間だけが経過する中で、徐々に意欲が削がれていきます。

避難解除

町と国とで避難解除の時期が協議され避難解除日が指定されました。その日が来ても何も変わりません。私の地区でも半数の戸数が戻りました。戻っても農業は誰もしません。その中で、三名の方が亡くなりました。解除されても避難時と同じように人の交流はなく、農地は草まみれ、除染物のトンバックが田を占領しています。一度壊れたコミュニティは、二度と復活しない現実を知りました。

現在、これから

私は、福島市に中古の住居を求め、現在住んでいます。山木屋にも小さな新築住宅を建てました。私は現在六十八歳、年金暮らしです。山木屋での農業を諦めた訳ではないのです。本心は、何もしないことが苦痛であり、何かをしたいのですが、何をすれば良いのかわからないのです。

巨費を投じ除染をしても何故安心安全に繋がらないのでしょうか。事故直後のスピーディ情報隠しに始まり、数々の情報隠しが後に発覚し、国民に深刻な不信任を植え付けました。国は除染後安全宣言をし、避難解除を宣言すれば・・・との思いがあるのでしょうか。しかし、信頼を失った国に素直に

耳を傾ける人がどれ程いるでしょうか。そんな環境で、私たちが山木屋は安全だなどと声高に叫んでも、滑稽以外のなにものでもありません。結局、国も町も将来のビジョンを示せないまま解除され、展望は開けません。多くの人と会話すると、今は動かない何もしないことがベストだといひます。将来の山木屋、将来の自分達、子孫の未来を考えると暗澹たる思いになります。

今の状況を、良くも悪くも時が解決してくれるのだと思います。その時まで何とか農地や居住を再開できる環境に整えることに努めることが、私の使命と考えます。

嶋原 秀雄 (大松平 七十代)

山木屋の農業振興

平成二十三年三月、東日本大震災、東京電福島第一原子力発電所の相次ぐ爆発事故により山木屋地区に大量の放射性物質が飛散し、地域住民全員が避難を余儀なくされた。放射能汚染により全農地が不耕作となり、生業農業はできず、自家野菜すら作れなくなった。

そんな時、土を使わずに農業ができることを近畿大学農業振興グループの先生より教えられ、平成二十三年、川俣町と近畿大学の試験実証圃場が小島地区に作られ、馬鈴薯、サツマイモ、ハーブ、バジルなどが土ではなくポリエステル培地で栽培されているのを見たときは、この培地で色々な作物が作れると思った。

平成二十四年、小島実証実験ハウスでは、トマトの栽培が開始され、いく度も視察した。他、自然薯、ワイン用ブドウも栽培されていた。

平成二十五年には、聞いた事のない花の苗が定植され、半年後、見たことも無いプラスチックの様で真っ赤なハート形の花が咲いていた。これが『アンスリウム』との出会いである。熱帯アメリカ原産で、観賞用として花持ちが良いことから、鉢植え、切り花として栽培されているとのことだ。

平成二十六年、実証ハウスに2,000本を定植、平成二十七年には、見事に情熱の花、『アンスリウム』の栽培が可能であることが確認された。

平成二十八年から、川俣町でアンスリウム栽培農家の募集、説明会も重ね、広報でも募った。一回目には概要説明、約三十数名の出席、二回目には二十数名となり、最終実施に向けての説明会には十五名の出席であった。

平成二十九年には、「ポリエステル媒地活用推進組合」を十一名で設立、平成二十九年度事業福島県加速化交付金でハ

ウス九棟が建設された。次年度に二棟が整備され、十一棟が完成した。

山木屋地区では五名の生産者で定植本数約4万株、平成三十年十月の町内小学生の体験学習で植え付けが終了し、町内四名も同様に植え付けを終了した。組合全体で、8万5千株が定植され、販路に向けた活動を行っている。国、県、関係機関、花卉市場、生花卸店、生花小売店を、町長はじめ町関係者、組合員で訪問し、各種イベント、町行事等へ、『かわまたの花・アンスリウム』の広報活動を兼ねて積極的に参加してきた。2020年東京オリンピック・パラリンピック会場での装飾フラワー使用希望を目標に、生産安定及び、品質向上に取り組み、花卉市場からも好評価され、生産意欲も向上してきた。

なぜ、この川俣町で『アンスリウム』に取り組むことになったのかと言うと、市場では輸入品が98%を占めており、国内産地が極めて少ないので今後の需要が期待されるのとです。

最先端の機械を使った近代的な栽培方法を用いて、出荷本数50万本を目標に、『かわまたの花・アンスリウム』が国内に誇れる花となるよう努力して参ります。

終わりに、今後の農業の振興のために、ポリエステル媒地使用により多種にわたる生産が可能になりますので、もっと取り組まれようになることを希望いたします。

鳴原 春男 (坂林山 七十代)

震災の記憶

私達の住む山木屋は阿武隈高原の中山間地に位置し標高五〇〇m〜六〇〇m位で、山に囲まれ平坦な土地が広く、農業を主にしているところだ。多くは兼業農家で酪農、畜産、水稲、葉タバコ、野菜、ハウス園芸、花木などを生産していた。

私の家では、葉タバコと和牛の繁殖をしていた。葉タバコ苗の定植、幹刈り収穫など忙しい時などは、隣近所で手伝い合い(ゆい)仕事をしてきた。

春には山菜、秋にはキノコ採り、自然豊かな山の恵みが楽しませてくれる。沢山採れた時などは、隣におすそ分けをしたこともあった。また、地区の行事には八坂神社三匹獅子、地区運動会、盆踊り、文化祭、各部落の講中、新年会、老人クラブ、等、人と人の親睦を深め合う機会が多くあり、楽しく暮らしていた。

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分頃、三陸沖でマグニチュード九の地震がおきた。今までにない地震で家の外に飛び出した。山がうなり地が揺さぶられ立っていられない。昨年建立した日山神社参道鳥居は無残にも倒れていた。共同

墓地の墓石も全壊、地割れがおき建物の壁はひび割れ傾きが生じた。室内は食器のガラスが散乱し、余震もすごかったので落下物のない所で車中泊をした。

山木屋地区も地震発生から停電、ラジオ放送で原発が危険な状態であることを知った。

十二日朝、一一四号線、四五九号線は今までに見たことのない車の列だった。原発の放射能漏れを恐れての避難中のものであった。浪江に住む娘夫婦も孫を連れて避難してきた。同日夜川俣町農村広場運動場に避難し、車中泊をして、次の朝、牛がいるので家に戻った。同居していた娘と孫も数日後川俣町に自主避難をした。

山木屋地区唯一のガソリンスタンドも給油待機車両が一杯で、並んだがガソリンが品切れとなり買えなかった。

山木屋の基幹作物であった葉タバコの育苗施設は、地震で水道、温床が被害にあったが、地区役員の方々の懸命なる復旧作業により、四月タバコ苗が各農家に届けられた。しかし残念ながら耕作中止の連絡が来てタバコ苗を処分した。汚染された土地での作付けはできなかった。

四月十一日、山木屋地区が計画的避難区域となる公表があった。酪農家、和牛農家、養豚、養鶏農家などは、山木屋地区では事業ができなくなった。私の家でも牛を二本松市木幡の牛舎に預けることとした。ペットの犬も動物愛護団体に預

かってもらい、家を離れる準備をした。

五月二十二日から町が確保した町内外の旅館、公共施設、介護施設、ホテルなどへの一時避難開始、私たちも五月二十日から川俣ホテルに一カ月ほどお世話になった。毎日毎晩、ホテルから木幡、自宅で牛の餌を取り、ホテルに戻る片道五〇kmを通うことになった。いつまでも続けることもできないので、六月の競り市で売り渡した。

六月二十九日、農村広場仮設住宅完成入居開始、七月十五日、体育館仮設住宅完成入居開始となった。広さ九坪、キッチン、バス、トイレ、四畳半の部屋二部屋、家財道具を持ち込むと歩くのがやっとの広さ。隣との仕切りはラスボード一枚、仮設生活六年間、隣の住人に気を配り、テレビの音、会話など、小声で話す味気ない毎日。私は幸い仕事があったが、家内はやることなく暇なので、折り紙、毛糸編み、吊るし雛、ペーパークラフトなどを始め、時間をつぶした。

仮設生活の中では、農村広場において、盆踊り、山車、山木屋太鼓、各種団体によるイベント等で楽しませていただいたり、ボランティアによる食事の支援を受けたりと、ありがたかった。保健師、生活支援相談員の訪問活動などもあり、大病もせず過ごせた。

震災から二年、畑には木が生え、田には柳やセイタカアワダチソウが黄色の花を咲かせていた。今まであまり見掛けな

かったイノシシが増え土手や農地をあらしていた。

平成二十五年四月二十五日、山木屋の本格除染が始まった。家と耕地の周り二〇m除染、田畑は表土の剥ぎ取り山砂を覆土、農家の命ともいえる土を持っていかれた。非常に残念であり悔しい気持ちだ。今は除染も終わり、中間貯蔵施設への搬出をしている。山の除染はまだされていない。実証実験として数か所しただけだ。

平成二十九年四月、避難解除、親が苦勞して切り開いた土地、生まれ育ったわが家、子供たちが帰る故郷を失わせてはいけなと、帰ることと決め山木屋に帰ってきた。しかし山木屋に帰ってきたのは自分と同年代か高齢の人ばかり。今後山木屋はどうなるのか。今でも過疎なのに、人の住まない崩壊集落となるのかと危惧される。

今は自分達の食べる自家用野菜を作る程度、花木や花を植えて見て楽しんでいる。体が動く限り自分の土地の管理をして守っていききたいものだ。



仮設避難中に作った荷造りバンドのマスコット
提供 嶋原春男様

嶋原 明寿 (蔵平 福島市在住 八十代)

原子力発電(原発)に未来はたくせない

平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災は、自然災害では済まない「原発災害」となった。

自分の場合、農業だけでは生計が成り立たず福島でささやかな会社「福島学秀社」を起業、山木屋で父の介護(平成二十年四月九十六歳で他界)をしながら、二足のわらじで農業を守ってきた。

福島の住まいも震災の傷跡は大きく、屋根は卒から落ち、停電で水道も使用できず、当初は山木屋から水を運びながらの生活であった。

のちに山木屋地区民が避難することになるが、原発の水蒸気爆発は車のテレビで知った。

浪江町からなど、次々と避難する人達への対応(ボランティア活動)に追われ、山木屋の状況を知らされたのはその後であった。

一区行政区の一員として、長いことお世話になりながら営農を続けてきたが、住民票がないという事で蚊帳の外に置かれ、今まで築いてきた集落での絆は途切れてしまった。自宅に入る許可証も発行されず、ようやく出入りが許された時は、先祖の位牌と自分が使用していたベットだけが福島まで運

び出せた。

仮設でのつらい方々に比べれば、まだ幸せな方で、母屋にかけたブルーシートでの生活は長く続いたが、ライフラインは元の状態に回復した。

しかし、山木屋での生活は一変し、農耕はもとより住居の雨漏りの修理も手つかずのまま、玄関脇には芽だし途中の種粃が山積みされたままで、唯一できたの作業は墓石の修理ぐらいであった。

その後は長い歲月、東京電力や環境省との除染を含む賠償問題との戦いとなるが、山木屋でありながら「山や木」は、未だ汚染されたままである。

春の山野草(こしあぶら)や、秋の味覚香茸(猪鼻)などは今も五百ベクレルを超えている。

九年近い歲月は、除染という言葉すら死語に近い昨今である。仕事を奪われた若者たちと、学び舎を追われた子供たちには、帰還にあたっての苦しい選択が迫られ、現在も進行形である。

我が家も長男夫婦が子供たちの将来を考え、福島に戻ることを諦め、関西に永住を決めた。苦渋の決断に対して、親としての希望や発言は全くできないのが現状である。

さて、今回の原子力による災害は、国のエネルギー政策に

大きな転換を迫られたはずなのに、福島事故など忘れたかのように次々と原発再稼働が進められている。果たして原子力発電に未来はあるのか？

私が学校教材の仕事を通して原発事故前から学んだ事を含め、幾つか持論を述べてみたい。

まず、原子力発電に利用される「ウラン」は、石油などの化石燃料と同じく有限であり必ず枯渇するもので、その埋蔵量は石炭の十分の一程度であること。

次に、安全性についても、今回の事故で最も危険な物質であり、人間の手に負えない事がわかったはずだ。

また、コストについて、国は「コスト安」を売りにしたが、真逆であって、原発の入口までの費用と、出口での後始末に掛かる費用は膨大なもので、その歳月を含め、計り知れないものがある。

さらには、長所とされた「少ない量で大量のエネルギーを得る」ことも、少量で大量の廃棄物（死の灰）を生み出すのだから長所とはならず、「二酸化炭素などのガスを出さないクリーンなエネルギー」も、原子炉の中だけの話で、採掘から製錬、濃縮成型加工など、入口だけでも二酸化炭素と劣化ウラン及び大量の廃棄物を出し続け、出口では発電量の七割近くを高熱のまま海に捨てられる。

何よりも出口で大きいのが、使用済み核燃料という崩壊熱

を出し続けるやっかい物である。点検中の四号機までが爆発を起こして放射能をまき散らす。

さらに問題なのは、三号機のプルサーマルである。反対を表明した「知事抹殺」にまで至った代物だが、増え続けるプルトニウム処理に困り、モックス燃料として稼働させる、即ち石油ストーブに灯油とガソリンを混ぜて使用するようなものである。

電気は必要不可欠だが、原発では温暖化対策になる筈がなく、ましてや人間の五感では測れない放射能は、音もなく、臭いもせず、見えることもなく、また、空間にバリアをはる事も出来ない。

広島や長崎の原爆はアメリカが齎したもののだが、福島原発事後は、国策による人災とみる。

つい先日、東京電力旧経営陣三名に無罪判決が出たが、国も東電も何も責任もないのか？

全て外国に依存するウランと負の遺産を出し続ける原発に未来はないし、その未来を託す子供たちの事を考えたら、一日も早く再生可能なエネルギーにシフトすべきである。

帰還されて頑張っている山木屋の方々に感謝と敬意を表し、戦前生まれで八十歳すぎの自分の心境とする。

嶋原 利彦 (新屋敷 六十代)

震災の記憶

あれから何年経ったろう。

平成二十三年三月十一日金曜日でした。

あの時は、今でも忘れはしません。その日は何時もの時間より早く会社に出勤しました。四時で仕事が終わるので、母の所に回ってから家に帰る予定でした。

その翌日、山木屋の住民にとつて大変な日々が始まってしまった。今まで経験したこともない原発事故です。それから一カ月後山木屋の住民に大きな災難が降りかかりました。避難です。山木屋住民の大移動です。

一瞬どうしていいかわかりませんでした。約一カ月の間に避難先を見つけないければと、毎日部屋探して大変でした。私は福島に勤めていたので、福島市内に見つけました。月日が経つにつれ、山木屋の家のことも心配で、一週間に一度は我が家の様子を見に行きました。夏になると家の周りに沢山の雑草が茂り、そんなわが家の姿を見るとがっかりしました。

月日が経って、七年も避難生活が長引いてしまいました。その後、解除になり、山木屋に戻る人、戻らない人、二つ

に分かれてしまった。

それも避難生活が長かったせいでしょうか。それも自分の選択ですから。

今では昔の我が故郷の風景を二度と見る事が出来ない。春の風景、そして秋、黄金色した水田の風景も見ることが出来ない。

もう昔の山木屋に戻ることはできない。

高橋 正春 (木ノ合木米山 五十代)

あの日を鮮明に覚えています。

いつものように家内と二人で鶏舎の見回りの仕事中心でした。

突然轟音とともに立っていられないほどの凄まじい揺れ。鉄骨でできた鶏舎が吊り橋のように上下左右に揺れて、鶏はパニックに陥って、あちこちで山のように重なりました。ず

いぶん長い時間三分位続いたと思います。そして停電。昼間でも暗いウィンドウレス鶏舎なので照明がなくなると真っ暗になります。ちょうど一番奥にいたので、真っ暗な中を手探りで出てきました。

発電機が作動し、エンジン音が鳴り響いていましたが、それ以外は妙に静かで得体のしれない不吉さを感じました。案の定、その後テレビでは大津波の情報流れ、原子力発電所が水素爆発を起こすなど、危機的状況へと変わっていききました。

浜通りの方から次々と顔色をなくした人たちが通り過ぎて行きました。

この地での地震による被害は、道路の地割れや水道の配管が駄目になったり、建物にひびが入ったりはありましたが、さほど遠くなく日常を取り戻せる程度でした。しかし、放射能となると事態は深刻です。

これまで山木屋は、冷害とかはあったものの、災害は少ない場所と思っていました。ましてや四十キロも離れた原子力発電所の事故など、想像もしていませんでした。それが現実起こったのです。

その後、計画的避難地域に指定され、避難を余儀なくされてから、生活や仕事、人生にいたるまでの多くの変化をもたらす結果となりました。いかに平和と安全が大事であるかを痛感しています。

この時代に生きた者として、災害や放射能の怖さを後世にしっかり語り継がなければと思っています。又、解除後における地域社会の崩壊とも感じられる過疎化や高齢化、少子化は深刻です。どうしたら良いのか分かりませんが、案ずる者の一人として何かしら微力でも役に立てていけたらと思っています。

私に関われるのは山木屋太鼓と盆踊りしかありませんが、ひとつでも誇れる文化の継承に寄与できればと思っています。そして、試練を乗り越えて、みんなが誇れる「山木屋」になってくれることを切に願っております。

広野 清美 (細畑入山 六十代)

平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災と、これに伴う福島第一原子力発電所事故により多くの福島県民が避難生活を強いられました。

地震のあった日、家には病院を退院したばかりの義母と二人でした。すごい揺れに義母を外へ連れ出しました。家が崩れるかと思うような横揺れを見ていました。その後、今まで見たこともない長く続いている車のライトの灯りをびっくりにして見ていました。それが、原子力発電所の事故で避難する浪江町方面の方々の車の列でした。

それから、山木屋地区も避難となり、町内の借上げ住宅で暮らす事を決め、そこから長い長い避難生活となりました。さらに、この事故で、私自身、仕事も無くしましたが、六月に一齐に仮設住宅に移行するなか、仮設のコンビニもスタートする様になり、声掛けしていただいたので、スタッフの一員として採用され働くことができました。スタッフとお客様の関係ではあったが、地元住民の方とお話する事ができたと、どこの地区の方か知る事ができました。

その事があったから、二十六年六月より生活支援相談員として訪問しても、溶け込みやすい環境にあったと思えます。福祉の事は、全然と言ってもいいくらい無知でしたが、この仕事を続けるようになり、多少わかった様に思います。

避難中、二十六年に義母を、二十九年に義父を亡くし、現在四人で、川俣町内で住宅再建し生活しています。

あとどれ位この仕事に携わっていくことができるかわかりませんが、相手の境遇や心情を十分に配慮して適切な距離感で相手に寄り添った支援を続けたいです。また、各人の自立再建への歩みを踏まえつつそれぞれの事情を考慮して、新たなステージに即して支援していくことが大切であると考えます。

廣野 晶彦 (家野 三十代)

・震災前

二〇〇九年度から、実家の花農家を継ぐために東京の花の市場で研修をすることになった。そろそろ実家に戻り花農家としてのスタートを切ろうと思っていた矢先、東日本大震災が起きてしまった。

・震災の時

市場業務も当日の仕事が終了を迎えるころ、大きな揺れがあった。事務所にいた全員がただ事でない揺れに驚き、即座

に屋外に避難した。大きな揺れは二度あり、揺れも落ち着いたころテレビ中継を見て愕然とした。東北地方の尋常でない被害、実際の津波も初めて目にした。津波とはこれほどに恐ろしいものかと感じた。実家の山木屋地区は内陸部にあり地盤も固いため、地震の被害はあまり心配してはいなかった。しかしその後原発の爆発があり、健康への被害など心配だったが、あまりにも情報がなさ過ぎて、いまいち実感がわかなかった。その後、食料、燃料あらゆるものが不足していった。

・避難になるまで

原発の爆発から避難指示に至るまで、とにかく情報が不足していて、何をどうしていいのかわからないことだらけだった。実家の花の栽培も継続できるのか、もしできなければ、収入がなくなってしまうので、今後の生活についての不安が強かった。また、自分自身の将来について、人生設計についても根底から覆ってしまうのではないかとということが考えられた。

・避難中

実際に避難生活を送るようになり、山木屋地区は帰還困難地区ではなく帰還できる希望があったので、花栽培をできるだけ早く再開するために活動することになった。その後、試験栽培を経て避難先から通いでの営農が再開できるように

なった。今までの生産スタイルと違う日常の中で作物を管理するのは、今までと違った苦労があった。自分自身も生産開始から二年目の二〇一五年度より実家に戻り花の栽培を開始した。

・避難解除

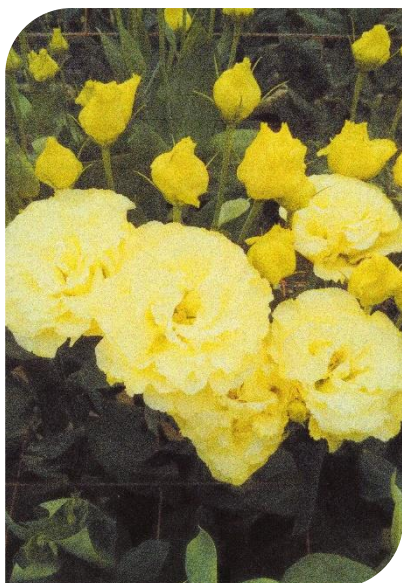
営農再開してから避難指示解除となり、本格的に生産活動ができることとなったが、実際はもともと早く避難指示が解除されてもよかったのではないかと思った。避難指示解除が遅れば遅れるほど、避難場所での生活に馴染みが出てしまい帰還しにくい状況になってしまうことが、周囲の話からも聞こえていた。子供がいる世帯は、学校を転校させることになると、せっかくできた友達とわかれさせなければいけなくなったり、通勤や買い物面で便利な街中での生活から、不便な山間部での生活に戻るのかという問題などがあつたり、どうしても戻りたい人以外は戻らないという結果に結びついていると思った。

・現在、これから

避難指示解除後、帰還者のほとんどが六十五歳以上の高齢者ということになり、自分と同じ世代、四十代以下の割合はかなり少ない。今後このままでは人口は減る一方で増加する見込みがない。地域の生活環境、里山の景観の維持、用水路

など共有財産の管理など、ある程度の人口がなければ維持することが難しいと感じている。また、放射能の影響もあり有害鳥獣の駆除について、捕獲した後の食肉利用ができないなどの問題があり、イノシシなどが急増している。昔と比較して野生生物が人間の生活圏にかなり近づいており、実作物への被害も出ている。震災以前の山木屋地区のコミュニティを、今後どれだけ維持していくことができるのか。大きな課題ができてしまった。

一方で山木屋地区ならではの魅力も残っている。都市部より一時間圏内の距離で自然に満ちていて適度な田舎感があり、状態のいいある程度平坦な農地が空いているなど、田舎で農業を始めてみたいという人にはなかなか良い条件だと感じている。そういった部分で移住を考えている人など積極的に受け入れる体制が構築できれば、山木屋地区の存続に希望が持てるのではないかと思う。



トルコキキョウの花
提供 廣野晶彦様

廣野 俊之 (川芎 四十代)

1 【震災前】

私は高校を卒業してからずっと川俣町内にある会社に勤めていました。会社勤めも二十五年目となり、実家をほとんど離れる事なく勤務していました。

2 【震災の時】

震災当時は会社にいました。机に座っていた時に通常の地震と思いそのままいました。なかなか揺れが収まらず、だんだん大きくなってきたので外へ出ました。屋外タンクがものすごい揺れで、中の溶剤が波打っていました。まだ外に避難していない従業員もいたので、すぐ外へ出るように指示しました。正面玄関へみんな集まりました。電気もストップしていたので仕事にならず、一旦帰宅することになりました。家も心配だったので電話をかけましたが、なかなかつながらず時間がかかりました。やっと繋がって母親に状況を聞くと、瓦がたくさん落ちていたとの事でした。急いで帰ることにしました。途中、道路も所々亀裂が入り壊れている状況でした。家についてみると、話の通りから屋根瓦がだいぶ落ち家の前のアスファルトも亀裂がたくさん入っていました。その日の夕方、消防のパトロール要請があり、地区内を搭載車で見回

りました。パトロール中も家と同じように瓦が落ちているところも見受けられました。道路も亀裂が入っていたり、崩れていたところがありました。その日の夜はろうそくで明かりを取り、蓄えてあったカップラーメンを食べて寝ることにしました。

3 【避難になるまで】

次の日は会社には仕事関係の業者を頼んでいたもので朝早く出かけました。業者はやはり来ておらず朝から片付けをすることになりました。まだ電気も来ていなかったので片付けを終え家に帰りました。家の瓦もだいぶ落ちていた状況でしたので、父とブルーシートをかけ補修をしていました。その日の夜も電気が来ないので、同じくインスタントラーメンを食べて過ごしました。消防団の集まりもあり、その中で原発がどうなるか分からないのでいつでも避難できるようにしておくようにと地区の住民への連絡を指示されました。一軒一軒家を廻り連絡していききました。その時、既に消防屯所の前の一一四号線は避難する人たちで車の列になっていました。避難中の方で、どこに行っていないかわからないので聞いてくれる方もいました。大変だな、とその時は他人事と内心思っていました。

その後、私たち家族も郡山の妹の嫁ぎ先に自主避難しました。その時すでに県内はガソリンがない状態になっており、

ガソリンスタンドに列をなしている状態でした。妹の義父さんに近くのガソリンスタンドにガソリンが入る情報をもらい、そのスタンドに向かいました。順番待ちで並んでいる途中バッテリーが上がってしまいました、義父に救助に来てもらい大変お世話になってしまいました。結局ガソリンを買うことが出来ず終いでした。一週間ほどお世話になり、また山木屋の家に戻りました。会社も生産ができるようになり通常の状態に戻りつつありました。

その後、計画的避難指示がありアパートを探すことになりました。なかなか見つからず、両親と一緒に住むことができず別々に暮らすことになりました。

4 【避難中】

避難中はたまに山木屋に戻り、家の中を確認したり車を洗ったりしていました。

会社のほうは電気の使用量を平準化するために、木金曜日が休みの土日は仕事、と言う不規則な勤務状況となりました。日中の電気量も減らすため、通常は早番遅番勤務でしたが、夜勤早番と言うこちらも通常とは違う勤務となり負担も大きかったです。

避難中いつ戻れるか分からないまま二、三年が過ぎました。そのうち周りの人たちが土地を買った家を買ったなどの話が出てきて自分たちも土地や家を探さなくてはと言うこ

とになり検討をいたしました。なかなか良い土地も見つからず、一年、二年と探し続けていました。ようやく土地も見つかり家を建てることに成りました。建てている途中も、本当にここに住むのかどうかと言う不安もありました。

5 【避難解除】

避難解除のメドがつき戻れることになりました。新しい家に家族みんなで住むようにしていましたが、両親は山木屋がいいと言うことで両親だけ山木屋に戻り自分一人で新しい家に住むことになりました。予定とはだいぶ違っていましたでしたが、新しい地域での生活も周りの人達が親切にしてくれていることもあり、町での生活も少しずつ慣れてきていくところであります。山木屋の自分の住んでいた部落は結構戻っている方が多く、両親は避難前と変わらない人付き合いをしているようです。田畑に関しては避難前と様変わりしてしまっていて全く違う景色に見えます。

6 【現在・これから】

今回の震災で避難したことは、まさか自分がこんな経験をするとは予想もしていなかった事でした。実際避難をして違う地域での生活と一人暮らしは大変でしたが、良い経験になったことも事実です。これからも色々な状況の変化に対応出来る精神を持っていきたいです。

震災から九年目、山木屋へ帰還して三年目になります。

私は、努力すれば、頑張れば・・・と思いながら、農業に従事し生活してきました。でも、原発事故により避難するようになった事については、物事言わず従わなければならない。今の今まで手にしていた事をやめ、離れなければならない、そんな場所になってしまったのだということを、思い知らされました。

地震での津波は恐ろしい事態だと思います。でも、原発事故の静かな津波は、目に見えない、肌で感じることも、聞くこともできない、後になって鳥肌が立ち身震えするような、言葉にならない恐ろしさを感じました。

主人と私は山木屋以外に住む場所は考えられず帰りたくて帰って来ました。除染をして線量を測り基準より下がった事も確認しました。自分を納得させ、大丈夫なんだと繰り返ししています。自分で野菜を作り大丈夫と思いながら食べています。おいしいはずの野菜の味は半減してしまいます。子供達にも孫達にも安心して遊べる、安心して食べられると思っているのに言えないでいる私です。

今、私は、生活支援相談員と言う仕事をさせていただいています。いろいろな人の話を聞かせていただいていると、私だけではないんだと気持ちがいやわらいでいる時があります。少しでも誰かの役に立ちたいと思っています。

帰還して山木屋で生活しようと思った人達（私も含め）も、山木屋を離れそれぞれの理由でそれぞれの場所で生活しようと思った人達も、山木屋という故郷への思いは同じだと私は思っています。

広野 太（細畑 六十代）

仮設住宅の六年間の歩み

く未来の創生

二〇一一年三月十一日、地震、原発事故、この日から物事がすべて変わり始める。

原発事故により、四月二十二日計画的避難区域となり、避難生活が六年にも及ぶ。二〇一七年三月末、避難指示解除さ

れるも、仮設住宅で暮らす避難者は、二〇一九年三月末までに及ぶ。年齢問わず環境の変化で亡くなる人もあり、生活環境の大切さが思い知らされる。

六月二十六日農村広場仮設住宅に入居が始まり、七月五日、仮設自治会設立、農村広場仮設住宅の完成のお披露目に町の皆さんに大勢来ていただき、忘れられない日となった。それから、避難解除までのあいだに、多くの方々の訪問、支援などお世話になった事を記憶に残してほしい。（別表）

山木屋の創生

「とんやの郷」を山木屋の情報を発信するオアシス基地として活用し、農業、工業とも地区に生産工場をもつ事業所様と連携を持つべき。

国道一一四号線を利用する町内外の人々が気軽に立ち寄り、多目的に年齢問わず利用できる場所になると良い。青年と語り合う交流人口をふやし、県内外からの人達にも地区の取り組みの情報を発信する場所にすべき。散歩して癒せるところがもうひとつ欲しい。

二〇一九年九月九日台風十五号が襲来し、千葉県で住宅の屋根が吹き飛び、鉄塔電柱樹木が倒れ送電線の復旧に時間がかかり停電が続き、生活や農業などに大きな被害が発生した。地震、台風、大雨と河川の氾濫、気温の上昇、地球温暖化の

影響によるものが、近年多く全国で多発している。大きな被害の無い山木屋地区が、自然災害に強い地域と言えるのではないだろうか。山木屋の良さを発信することも大事と考える。

山木屋地区自治会、仮設自治会の活動、新年会、さなぶりまつり、夏祭り、敬老会、町運動会参加、仮設住宅お別れ会など各行事に、町職員の皆様に協力いただいた。機関紙はやぶさの立ち上げ発行、食事会や仮設行事全般は、支援員の皆様にご協力いただいた。各新聞社、テレビ局の対応も多くあった。

原発事故から八年、避難指示解除後三年目にはいる。

山木屋に戻られた多くの方が年配の皆さんですが、多彩なスポーツに取り組み元気にプレイしている。花木栽培も施設内で通年出荷出来る新しい農業の取り組みや、粗飼料組合も生産体制が整ってきた。水田も耕作が進み、山木屋中学校の生徒も、部活動などで活躍している。二〇一九年十月六日の八坂神社の秋祭りで三匹獅子舞が奉納される。

今までと違う山木屋地区が生まれてくるのは確かだ。

原発事故の被害に遭い、いろいろと困難な状況のなかで、山木屋地区自治会、仮設自治会をすすめてこられたのは、役員の方々はじめ、地区の皆さんのお陰です。お世話になりました。平成から令和へと歴史が進みますが、今後も山木屋の

再生に協力していきたいと思っております。

○別表 仮設住宅への支援等の一覧

事 柄	訪問・支援者
物資の支援	ライオンズクラブ様、ロータリークラブ様他多数
見回り	県警、各県の警察官の皆様
炊き出し等	新潟県湯沢町南雲様、酪農家の皆様、 AARジャパン様、仙台、北海道のお坊様
仮設訪問、山木屋訪問	古川町長と原子力事故調査委員 町各自治会長様、町、県、国各議員様 アメリカズ日本代表ラモナバイヤ様と大学院生 ドイツジャーナリスト、 プロスケーター浅田真央様、県外大学生、先生方
花、プランター等の提供	すみよし自治会様、AARジャパン様
健康診断	済生会病院様、渡利病院様
無料散髪	東京散髪組合様
鼓笛パレード、合唱など	山木屋小中学校、町内小中学生、先生方
山車、だんじりの披露	町内お祭り山車、大阪岸和田地区の皆様
芸能祭、落語会	各NPO団体様
演奏会、コンサート	東京イエスキリスト教徒の皆様、ギタリスト木下尊惇様、 飯舘 佐藤八郎様
太鼓演奏	山木屋太鼓様、 日本福祉大学付属高校和太鼓部様
大道芸	東京大道芸様、シコウチビデ様（秋山生まれ）
空中芋栽培試験	近畿大学様

※他 多数あり

廣野 新市 (長橋 七十代)

現実を語る

三月十一日 真福寺の総会に行く途中凄いい揺れ、墓石などが踊っている。車を止めて、ただただ崩れ落ちる墓石を見ていた。真福寺の墓石は、ほとんどが立っていない状況であった。本堂では、総代会をしていたが、みんな外に飛び出ている。数分後、大きな揺れがまた来た。本当に怖かった。総会終了後、家に帰る途中、話にならない状況である。電気は停電、夕方から黒っぽい雪が舞う寒い夜であった。翌十二日朝、部落を巡回し見廻りをした。道路、土手、用水路、家などが壊れ、ぐしやぐしやである。今まで見たことのない状況であった。

その後、東京電力原子力発電所が爆発して、大変なことが起きたと聞かされた。

国道一一四号線では、浜通りの人達が早く早くと、何台も逃げていく姿を目にした。JAガソリンスタンドでは、ガソリンが無いから入れられず、喧嘩をしている人も多かった。初めて見る光景である。

当時、区長(総務部長)として、ある行動に入った。十五日午後、飯館村役場に放射線測定器があるとのことで、飯館村比曾で待ち合わせ、行政区長五名で放射線の測定を開始し

た。山木屋地区十か所を測定した。放射線が多いのにはびっくりした。測定した内で一番多かった場所は坂下地区である。地上高1mで百十五マイクロシーベルト、10cmで156マイクロシーベルトとの事である。区長五名で夕方役場町長に報告に行ったが、避難者の対応で忙しく、会って話が出来なかったというのが事実である。翌十六日朝、また区長五名と飯館村職員とで、生活改善センターに集合して、そこから山木屋地区内全域を回り放射性物質を測定調査した。やはり坂下地区が多く、グリーン牧場のバス停の所が一番多く、地上1mで20.93マイクロシーベルト、10cmで100.50マイクロシーベルト、草の上で156.00マイクロシーベルトであった。山木屋中央のJA山木屋支店前は1m10.19マイクロシーベルト、10cm52.090マイクロシーベルト、だった。また、川俣町役場に行き、今度は町長に会うことができた。そこで、私たちの話を聞いてもらい、翌日JA山木屋支店前に行くからと言われた。十七日、JA山木屋支店前に約六十名の人達が集合した。町長からの説明は、「山木屋地区の放射能は大丈夫」との説明だった。集まった人達は、本当なのかい?という気持ちだった。

私達区長は、「山木屋地区災害対策本部」立ち上げた。会長に自治会長・大内秀一を中心に、会議を進めた。毎日のように会議を開いた。町、県、国には、数回要望書などを作成

し提出した。

四月十二日には、区長会議において、町から山木屋地区全体が計画的避難区域に指定されるとの説明を受けた。

四月十六日 山木屋たばこ育苗センターで耕作者に説明があった。佐藤まさひさ参議と、佐藤金正県議の二方の説明では、「避難することはない、大丈夫」と、太鼓判を押したかのような説明で耕作者を安心させた。が、その日の午後から、生活改善センターにおいて、地区民に対し国から説明会が開かれた。国の各大臣（福山、細野、松下）が、山木屋地区が「計画的避難区域」になるとの説明であった。午前中は、大丈夫と言われ、午後には避難しろとの事・・・ただただ呆然、唖然としたのである。

五月二十二日計画的避難 山木屋生活改善センターから数台のバスで、それぞれの避難先へと出発して行った。私達は泣きながら見送った。のち、私は福田羽田地区の借上げ住宅に避難した。

その後、除染物質の仮置き場について、区長会で国から説明があった。苦渋の選択であった。当初一か所との説明であったが、地区民の反対で各部落に置くこととなり、今に至っている。置場料、10 aあたり川俣は三十八万円であるが、山木屋地区は一万二千元〜十八万九千元である。同じ川俣で差があるのも問題だと思う。

山木屋地区に、復興拠点として「とんやの郷」が作られた。

少子高齢化も問題である。当初、高齢者施設（データーサービス、集会施設等）が「とんやの郷」にできる計画を聞いたが、今は、ファンズとあじせんの出前店だけだ。ほんとうは、地産地消で、六次化（地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す取組）ができる山木屋の農産物を中心とした「とんやの郷」であってほしい。

小中学校も昨年開校して、今年は中学生が三名である。来年は学生が誰もいなくなり休校となるだろう。

みんなで戻れる山木屋にすると言っていたのだが、全く国、町は嘘つきである。ただ数名の人が潤っているだけではないのか？表土5 cm除染されてもその下層には放射能が残っており、私達は一生その放射能と向き合って暮らさなければならぬ。

若い人達はいない。高齢者だけの山木屋である。数件あったお店もない。これが今の山木屋である。元の我が山木屋ふる郷にしてほしいと思います。

これが、山木屋の現実である。

廣野 勝久 (家野 六十代)

我が家は家族経営。トルコキキョウ、水稻、食べる位の野菜を作り、皆で頑張っていた。長男は、東京の市場で、花の勉強をしながら働いていた。そろそろ長男を家に戻して一緒に花の栽培を出来れば、と思い、準備を進めていた。

平成二十三年三月十一日 東日本大震災発生。

すごい揺れが何度となく続く。大きな地割れ、停電になり、ろうそくを灯し重ね着をして皆でこたつにもぐり、不安な夜を過ごした。

二日、三日と電気が来ない。なんとか発電機で風呂をわかったと思ったら、四日目に電気が来た。そしてテレビを付けたら津波被害の映像、東京電力原子力発電所の二号機が爆発目に見えない放射能被害。これからどうなってしまうんだろうと思った。

とりあえず、一時避難。

何度か、町、国からの説明があつたが、今までがんばってきた家業が全てダメになった。これから仕事、どうしよう：と思った。

計画的避難区域となり、仮設住宅に入居する事にした。

山木屋地区パトロール隊を二年間勤めた。その間に、ニンニクも栽培していたので、せめて種子だけでも残しておこうと福島島の知り合いの土地を借りて、通いでニンニクを栽培した。

あせる毎日。早くトルコキキョウを作りたい。

グループ員と共に農水省に何度も話を聞きに行った。

市場からも早く再開してほしいとの期待をいただき、ようやく若いグループ員の実証栽培が許され、栽培結果が良いことから、次年度からトルコキキョウが作れる事になった。

住宅周辺、作業場、作付け圃場も除染をしていただき、ようやく通いで農作業が許された。何から始めたら良いか。土もはぎ取られハウスの土の状態も変わってしまった、新たな一からのスタート。

作業が出来る事になり、二年が過ぎ、三年目の春に長男が家に戻って来てくれたので、とても心強く思った。これからまた家族、力を合わせて花作りが出来る。

早いもので震災から八年。近所にも戻って生活している人が増えてきた。

更に、山木屋の良さに気づき、戻ってきてくれる人が増える事を期待したい。

廣野 義孝 (下戸草 五十代)

あの時・・・

あの時から八年が過ぎました。もう八年、まだ八年とそれぞれ感じ方が違うと思いますが、今でもあの時の事は忘れる事の出来ない記憶となつて残っています。あの時は・・・

三年間の中学校生活を終え、これからの未来に希望あふれる卒業生を、例年の様に送り出して安堵した三月十一日、当たり前の日常が繰り返されると思っていました。経験したことのない凄惨な揺れが、山木屋と私達の人生を一変させる事になるうとは想像もしていませんでした。

当初、地震の被害について心配している状態でしたが、原発事故による見えない敵と戦う事になってしまいました。何の知識を持たない私たちは、子供の健康被害・将来について不安や今後について、保護者同士でも様々な考え方があり、世間の情報に翻弄させられた一ヶ月を過ごす事になりました。

毎朝、夢であつて欲しいと願つて目覚めた記憶があります。

この間、小中学校の先生方は、ガソリン不足や混乱の中、自身の家庭もあるのに子供達の安否確認の為、連日学校に来てくれました。

当時の先生方には本当に感謝しています。

放射能の不安の中、入学式を終え新年度が始まった矢先の十一日早朝、川俣町の一部に避難指示が出るニュース報道がありました。すぐに教育長さんに電話で確認をしました。山木屋地区全部と聞き、PTA会長だった私は、この一ヶ月間の後悔と今後の不安に押し潰されそうでした。

その後、町からの説明を自治会の皆さんと聞きました。当然、怒りや不安と混乱の説明会でした。山木屋幼稚園・小学校は川俣南幼稚園・小学校への避難を考えているとの事でした。困惑の中、帰り際にある方が、『最後に子供を守るのは親だぞ、後悔しないように』と言葉を掛けてもらいました。その言葉に背中を押される感じがしました。十五日のPTA総会に合わせて、町より保護者向けに説明をしていただきました。多くの取材カメラが有る中で当然、保護者も混乱しておりましたので、結論がでる状況ではありませんでした。

副会長二人とは、子供たち最優先で考えようと一緒の思いでした。保護者の皆さんには、『国が避難指示を出すのは、よほど悪い状況だと思うので、残念ですが一刻でも早く避難しましょう』と、涙ながらに話をして学校避難を決定しました。当時、私の中では山木屋小中学校がこれで終わる重大な決断だと考えていました。

この日が金曜日で、十八日の月曜日にはスクールバスで川俣南小学校に登校しました。後で知ったのですが、この土日

の二日間で、先生方が手配に奔走して頂いて実現した避難でした。小学校の先生方は、スクールバスを実際走らせてシミュレーションをして、山木屋をどのルートで時間がどれくらい必要かを検証して運行表を作成してくれました。中学校の先生方は、南小学校のランチルームを中学校にする為の工事をやっている所へ出向き、黒板の位置や照明について等、学習環境を整える為に力を注いでくれました。この話を知った時には涙が出ました。もちろん受入れて頂いた川俣南小学校の関係者の皆さんのご理解とご配慮があったのも忘れてはなりません。

山木屋の子供たちは、学校移転という困難な状況の中でも一致団結して乗り越えてくれました。子供たちの頑張りが保護者を勇気づけてくれたと思います。

もう一つ忘れられないのが、学校移転に伴って川俣町体育館にある合宿所に、いち早く避難所を開設したことです。一部の子供とその保護者が山木屋を離れ避難生活を始めました。子供だけ避難している方もいましたが、数名のお母さんが我が子の様に食事等の面倒を一生懸命みてくれました。合宿所の避難場所が上手く機能したのは、この保護者のおかげで感謝しております。

学校移転から一ヶ月後、山木屋地区民、全員の避難となりそれぞれ不自由な生活が始まりました。子供たちも様々な所へ生活の拠点に移り、福島からもスクールバスでの通学が始まりました。夏には仮設住宅が完成しました。

この頃、世間では野外活動の制限や放射線量について混乱の真っ只中で、PTAでも何度か保護者会を開いて、手探りの中悩みながら過ごしました。

年が明け、卒業式が近づいて来ると、卒業式だけ山木屋で出来ないか、私と校長先生は同じ事を考えました。しかし、山木屋の学校は、一年前の避難から何一つ手付かずの状態で、卒業式を行う事を断念しなければなりませんでした。慣れ親しんだ山木屋では無く、南小学校で卒業式をしなければならぬ、悔しさと寂しさを改めて感じました。また、子供たちに説明もせずに学校移転を決定したので、心の準備もさせてあげられなかった事に申し訳ない気持ちがあがってき、卒業式でした。この時の卒業生は、山木屋小中学校の最上級生として、見本となる行動とリーダーシップを発揮して、避難先で山木屋の新しい伝統を作る活躍をしてくれました。その後の後輩たちも伝統を引き継いで行ってくれたと思います。

私は、新年度に会長職を次の世代に託し、退きました。後の会長さんを始め役員、保護者も避難生活の中、山木屋小学

校・中学校の継続に努力をして頂いたので、山木屋の地で学校が再開する事が出来ました。

少子化の影響を受けていた山木屋で、避難という追い打ちが有り、益々厳しい状況ですが、あの校庭で、また、大運動会が開けたら、嬉しく思います。あの時の様に・・・

本田 勝信 (赤坂 六十代)

原発事故前、息子は農業を継ぐために会社を辞め、一緒に農業を始めていました。

原発事故が起きた時、私は、妻、息子、娘、父、母と六人暮らしで、水稲、酪農、小菊栽培をしていましたが、子供たちは福島市内に、父は埼玉の妹の所に、母は老人施設に避難してもらいました。

私達は、乳牛がいたためその世話と、今後乳牛を引き取って飼ってくれる所が見つかるまで山木屋で生活していたため、避難できたのは六月の始めで、川俣町内に避難しました。避難してからの生活を考えると、何もせずにいられず暗中模索している時、ある人から和牛の世話をしてくれないかと話があり、三カ月間お手伝いをさせて頂きました。そんな時、友達から「花作りを再開しよう」と誘われました。

私自身、もう一度花を作りたいと思っていたので、川俣町内に土地を借り、花作りを始めました。

山木屋では除染作業が始まることを聞き、私の田・畑は、モデル除染場になっており、原発事故から二年目より、水稲の試験栽培が始まりました。お米を収穫し放射能検査をした結果は「不検出」と聞き、安心しました。

避難解除後は、自宅をリフォームして、私達夫婦と父は山木屋に戻り、水稲、小菊の栽培を再開しました。

今、山木屋で生活して感じていることは、高齢者が多くて子供を始め若者がいないので、本当に寂しく感じています。

廣野 古雄 (川芎 矢祭町在住 六十代)

私の故郷はいま

私は、一九四九年(昭和二十四年)福島県川俣町山木屋川芎(二〇一一年三月の原発事故による計画的避難区域)に生まれ、中学卒業と同時に東京オリンピックの翌年、井沢八郎「あゝ上野駅」の世界、集団就職列車で東京へ。高校、大学は勤労学生で夜間部、職場は、金融機関に勤務し、定年退職後、妻と二人で四十五年ぶりに福島県に。矢祭町に移住し、現在にいたっています。矢祭町は、福島県の最南端にあり茨城県に一〇kmの位置で桜も県内で最も早く咲きます。

矢祭に移住して、中高年の健康増進、仲間との親睦交流のためボウリング、グラウンドゴルフをはじめ世話役をしています。健康とスポーツの係りは、検診等で塩分控えめに、運動をアドバイスされます。気軽にできる運動としてボウリングとグラウンドゴルフは最高です。今では両方の会長で、県内各地に遠征大会に参加し、出会いと交流を深めています。

矢祭に移住して二年目に忘れもしない二〇一一年三月十一日東日本大震災その後の原発事故が発生しました。テレビ映像は、大津波の影響と原発事故による避難でした。山木屋は、原発事故現場から直線で四〇km離れており(矢祭町は八〇km)おり、影響はないと思っていました。

兄貴から、山木屋全域が計画的避難地区に指定され山木屋から離れるとのことでした。町内は浜通りの各地からの避難者を受け入れ、山木屋からの避難者の住宅が少なく仮説住宅を作るとのことでした。避難期限ぎりぎりに町内にどうにか仮住まいが決まりホットしました。放射能は、影形もなく、無臭、無色透明と言う厄介な代物です。

立ち入りはできるものの、住民は誰一人いなく、雑草が茂り父母の墓参りもままならず、変わり果てた故郷に啞然とするばかりでした。矢祭の子供たちも線量計を胸に下げ通学する姿は何とも言いようがありませんでした。

福島には十基の原発があり、全て東京電力(東京はじめ関東各県に供給。新潟県の原発も同様)に送電し、地元の福島県では活用することはなかったとのことでした。国と東京電力の「原子力発電は安全な電力との安全神話」を信用した結果がこの結果です。何ともやりきれない限りです。除染も終わり避難指示は解除されましたが、帰還者は少なく復興事業のシンボル立派な学校も生徒がいなかったか・・・

くしくも、来年は五十六ぶりの東京オリンピックが開催されますが、私の故郷山木屋はどうなるのでしょうか？

私たちの願いは、中通り・浜通り・元通りです。

廣野 隆俊 (川芎 七十代)

一・原発事故から避難生活へ

山木屋地区住民は平成二十三年五月二十二日、第一次集団避難が開始されました。第一陣は九十人余りで、改善センターに集まり区長や公民館長も参集して壮行会を行いました。当時の古川町長が、

「皆さんの留守宅は山木屋地域安全パトロール隊を結成し、毎日見守りますから安心してください。皆さん全員、山木屋に帰還できるようサポートしますので、それまで元気で頑張っていて下さい。」

と、涙汲みながら激励し、町長の言葉を信じ大型バスに涙を流しながら乗り込む人々の姿が今でも心に強く印象に残っております。

私は避難当時六十歳代でしたので町のシルバー人材センターで働くことになり、主に草刈作業です。私の避難先は町市街地のアパートの二階でした。毎日草刈機と燃料缶を持って階段を上り下りし、部屋を通過してベランダに置くのが大変でした。

その内、町役場で山木屋地域安全パトロール隊員を募集しているのを知り、私も応募し採用となりました。平成二十三年六月二十六日から通称「青パト」と呼ばれた公用車で一台

の「青パト」に三〜四人が乗り山木屋地区全域をパトロール巡回しました。昼休みは改善センターで過ごし、弁当を食べながら休憩しました。勤務体制は、四日勤務二日休み、また夜の九時まで夜勤の日があるというサイクルでした。

その間に、千葉大学のボランティアの学生四〜五人が山木屋地区にやってきました。女子大生も交じっていました。学生達は山木屋地区の山林や田畑の四地域を重点に放射能測定を行っていることでした。雨の日や寒い日などには改善センターに来てパトロール隊員と一緒に昼食弁当を食べながら話し合うこともありました。若い学生達が、たとえ学習の一環とはいえ、遠い見知らぬ土地に来て、しかも高放射線の中、女子大生までが一生懸命に研究している姿を見て、私は避難解除になったら迷わず山木屋に戻るんだ、と心に決めました。

二・避難指示解除と帰還

平成二十九年三月三十一日山木屋地区の避難指示が解除されました。ただ、山木屋地区は解除後一斉に帰還するとはなかったため、希望者だけがぼつりぼつりと戻ってくるという状況でした。ある村では、のぼり旗を立てて迎えたとか、またある町では桜まつりに合わせて花火を打ち上げて帰還

した人をお迎えした、などという話を聞くと、何のセレモニーも行わなかった町の対応に、少し残念な気がしました。

私ら夫婦は避難指示解除後、直ちに我が家に戻ってきました。直ちに戻れたのは避難解除準備区域に指定された時から暇あることに家に来て後片づけし、家の外回りもおこなっていました。また、業者に依頼して家のリホームも済ませていましたので、いつでも帰れる準備だけはしていたからです。平成二十九年四月三日、待ちに待った我が家に戻ってきました。借り上げアパートの近所の方々から、

「本当に山木屋に帰るのですか。」

と、言われましたが、

「私は除染も終わりましたし、六年経ち放射能も下がったようなので帰ります。長い間お世話になりました。」

と、御礼を申し上げて借り上げアパートを後にしました。

避難と同時に山木屋公民館活動を休止しました。一年後、避難生活が少し落ち着いてきましたので、とりあえず少ない人数で出来る太極拳や卓球、ウォーキングなど、農村広場仮設集会所で行えるようなものから始めました。連絡等は、公民館主事さんが仮設住宅住まいでしたので、スムーズにできました。又、グラウンドゴルフについては、旧福沢小学校（羽山の森美術館）のグラウンドを、地元福沢の人達が使わない日を借りて練習、吹矢の練習も福沢多目的集会所で地元の人

達と一緒に練習させていただきました。それぞれの大会を開く時は、川俣町体育館や鶴沢公民館、旧福沢小学校グラウンドをお借りして行い、避難先の皆様方には、大変お世話になり、御礼と、感謝を申し上げます。

六年後、山木屋に戻って来てからは、また避難先の方々に世話になるようでは戻った意味がないので、グラウンドの確保を町に話したところ、山木屋中学校校庭は校舎の解体が九月から始まるのでそれ以降は使えない、また、公民館については、その当時、「休館扱いになっています。」と言われ、物置状態に乱雑になっていた所を片付けて、悪戦苦闘しながら練習を続けてきました。

避難解除から一年後の四月にようやく公民館も再開し、また、学校校庭も授業中でも使って良いと言われましたので、週三回グラウンドゴルフの練習をしています。「授業中でも使って良い」との一言が、スポーツを楽しむ者にとってどんなに勇気づけられ、励みになったことか、と思います。

現在、山木屋に戻ってきている人は同じ年代の人がほとんどです。このため、健康維持と交流を深めるため、グラウンドゴルフや吹矢、卓球など、山木屋小中学校の校庭や公民館に集まり行っております。こうした健康スポーツはお互いの励ましにもなり、仲間も増えて頑張っております。

三・ 大学生との出会いと交流

愛知学院大学

愛知県日進市では毎年川俣町の花火店から花火を購入して花火大会を開いていましたが原発事故以来、放射能が含まれているのではないかと問題となりました。それをきっかけとして日進市職員が川俣町役場に派遣されて原子力対策課で働くようになりました。その派遣職員の紹介で愛知学院大学の准教授と学生たちが山木屋地区を訪れるようになりました。

准教授と学生たちは山木屋地区の人達と交流会を持ち、原発事故の当時の事を詳しく聞き取り調査を行っていました。一方で、愛知学院大学から紹かれて山木屋地区の代表として私とほか一名の二人と職員合わせて三人が、講演会と意見交換に行ってきました。この時、愛知学院大学の学生とその地域の人達は、福島での原発事故について知らなかったという事実には驚かされました。愛知県と福島県はだいぶ離れており、どこか遠くの出来事という認識であったかもしれません。

山木屋地区と愛知学院大学との交流を通じて、福島県の現状や山木屋地区の実態をだいぶ理解していただくようになりました。平成三十一年夏、愛知学院大学の先生と二十人の学生達が山木屋にやって来て、三戸の農家を個別訪問しました。私の家にもやって来て、庭の草花やビニールハウス内の

野菜畑を観察しながら交流しました。この時、近所の仲間たちもやって来て、事故前はほとんど農家で忙しい時は「ゆい」で協同作業していて互いにコミュニケーションがあつて楽しかった、避難後は以前のような交流がなくなつたなどと、事故前後の話しをしながら交流を深める事が出来ました。

千葉大学

平成三十一年春、原発事故当時の報告会が公民館でありました。千葉大学と産業技術総合研究所は、原発事故直後から山木屋に入り放射能の測定調査を続けていました。その調査結果がまとまったので、報告会が開かれたのです。山木屋公民館に地区の人達が集まり私も参加しました。映像を見ながら報告を受けました。この調査結果によると、宅地周辺や農地の除染終了、放射能が年々減少傾向にあり、現在ではそれほど心配しなくてもいい値までに減つて来ていることがデータで示されました。この報告後、学生たちの手料理で交流を深めました。このように、大学の先生や学生が山木屋にやって来て調査研究を行うとともに地域との交流を深めて頂き、帰還している我々高齢者たちに生きる勇氣と希望を頂いたことに深く感謝申し上げます。

山木屋を訪れた学生達が社会人となり、再び山木屋を訪れ交流し合うことを祈願して、これからの山木屋地区の発展に、高齢ではありますが尽力して参りたいと考えております。

震災の記憶

田植えをする人、畑仕事をする人、草刈りをする人、見慣れた風景の中にすれ違う車は高い確率でこの地区の人に分かる。家の玄関先に出て目を閉じて聞こえるのは、鳥や虫の声。臉を上げると見えるのは四季折々に姿を変える山、畑、草木、少し遠くを見れば一面水田が広がっている。その向こうには、近所というにはなかなか距離が離れているが民家がちらほら見える。昼間は窓の外から不定期に聞こえてくる動植物の音に耳を傾け心地よく、夜になるとシンと静まり深い眠りにつける。私のふるさと山木屋だ。

小学生の頃はうちにテレビゲームなどが無かったため、自宅敷地にある川や山で自然界にあるものを使って遊んでいた。どこの土が一番硬い泥団子になるだろうかと素手が泥まみれになっても気にせず、日が暮れるまで真剣に泥をこねていたことなどが思い出せる。学校の友人と遊ぶのは基本的に放課後の学校校庭がお決まりで、鬼ごっこや一輪車、竹馬などで大盛り上がり。ブランコは何時も人気の遊具だった。

中学生になってくると自分の住んでいるところがいわゆる「田舎」だと分かり、いやになることが多くなった。何もない、バス代なんて馬鹿にならない。テレビやインターネット

トで見る都会の学生とはかけ離れた生活だった。休日になると「さて何をしようか・・・何もないしテスト勉強するか。」という思考になっている。今思うとなんて勉強熱心なんだろう。見習いたいくらいだ。高校受験ではクラス全員が一発合格を果たし高校生活を楽しみにしていた。まさかあんなことになるなんて、その時は誰も予想がつかないだろう。

高校へ進学させてもらい、私は福島市内にある学校で寮生活を選択し、山木屋へ帰るのは週末のみとなった。中学生時代までの生活が一変し、高校一年目はあつという間に過ぎていった。

高校一年が終わる三月になり、春休みで山木屋の自宅にいた私は、趣味のお菓子作りをしていた。今回はガトーショコラだ。高校一年の時は毎週末、家に帰る度何かしらお菓子を作っていた。今回も長期休暇となりいつもと変わらず趣味に没頭する、つもりだった。型に流し込んだ生地を予熱しておいたオーブンへ入れ、あとは焼き上がり待つのみ。順調だった。オーブンに背を向け焼き上がりまでテレビでも見ようと、姉の居るリビングに足を進めた、その時だ。

「ん？」床についていた足の裏から腰、背中、耳、頭へザワツと昇って来る悪寒のようなもの。間髪入れずに突然、ツド、ゴオンツと床下から突き上げるような強い衝撃が襲ってきた。すぐに地震だと理解した。理解はしたものの地震は遠

慮なくさらに強く、大きく揺れる。しかも上下に揺れている。家全体をシェイクされているように滅茶苦茶な揺れ方だったことは確かだ。もちろん家の中は散乱し、誰も冷静ではいられなかったが、恐怖からだろうか声も出なかった。

しかし、いつものように地震なんてすぐに収まるだろうと思ってしまった私は、自分より背が高い食器棚まで戻り食器が飛び出してこないように支えた。冷静に考えていたらあり得ない、命を落としかねない絶対NG危険行為だ。

「やばいやばいやばい・・・早く終われはやくおわれはやく、家が倒れちゃいそう、やだやだやだやだ・・・」

この時の頭の中はこんな状態だ。今回の地震は尋常じゃないうと感じながらも、激しい揺れで立っているのもままならない。逃げることもできず、止まるのを待つしかなかった。この時間はまるで地獄。たった数十秒、数分だったであろうが、とても長く感じた。猛烈な揺れが収まった時の静寂は安心感とは違い、恐怖の余韻のようなものを残していた。

地震後、今となつては、記憶は曖昧になっているが、家族全員の無事を確認したところでライフラインがすべて使えなくなったことが判明した。携帯電話も混雑だろうか通信速度が遅く、使い物にならない。外出していた姉も帰宅し、福島市内も騒然としていることを聞かされる。食料品を確保するためだろうか、立ち寄ったコンビニの棚が空になっていたという。

電気が復旧するまでの期間、冷蔵庫内の食品を卓上コンロで調理し家族で分け合った。私が地震直前まで作っていたガトーショコラも、焼き途中でオーブンの電気が途絶えたためペチャンコになった。これをフライパンで焼いて食べた記憶がある。状況が分からない不安な時、「落ち込んで仕方がない！」と、あれこれ工夫した料理をしてくれた母の存在だけが心強かった。

地震から約一週間、何よりお風呂に入れないことが一番堪えた。自分の体臭が気になって仕方がない。水のいらない身体を拭くシートが重宝された。しかし衛生的な日本でこんな思いをするなんて考えもしなかった。姉妹も同じだったのだろうか、山から湧き出ている水を使って湯を沸かそうということになった。山から拾い集めた木々で焚火をし、調理用の大きな鍋に山の湧き水をためて温まったら浴槽に注ぐ。この繰り返しでやっと一週間ぶりの入浴が出来た。スイッチを押せば湯が出てくるお風呂のありがたみを痛感した瞬間だ。

やっと身体を綺麗にできたと外で焚火をしながら騒ぐ中、一台の車が私たちの前に勢いよく滑り込んできた。ズザザザッ、と横滑り&砂埃を巻き上げ、一体どんなスピードで突っ込んできたのかと目を疑いながらも「あ、お父さんだ」と皆すぐに分かる。強い地震が起こると不在になるのが父で、

家族は慣れていた。

これは忘れられない記憶なのだが、車から降りた父は久しぶりに会うにもかかわらず険しい顔でズンズンと歩み寄り、「〇は？〇は？・・・」とあくまでいつもの口調で家族の名前を呼んだ。一人ひとりの顔を確認すると、その場にしゃがみ込み、目頭を押さえて涙を流した。私がまともに父の涙を見たのはこれが初めてだ。驚きのあまり声が出ず、その場にただ茫然と、迷彩柄を身にまとう父を見つめることしかできなかった。このときの父は現役の陸上自衛官だ。

父はそれから身支度を整えすぐに宮城県の被災地へ救助活動のため行ってしまった。今回の地震で津波が起こり、酷い被害だということだけ母に伝えたようだ。私は言葉を交わさなかったが、振り返ることなく車に乗り込んだ父の背中を見て「ああ、この人が私のお父さんなんだ。」と実感する。

無事を確認した途端涙を流すほど家族が心配でも、一番傍らに居たいときに離れなければならぬ。最悪帰ってこれない可能性もある。誰よりも被災地の最前線に立つて多くの人を救助しなければならぬのが父の仕事だった。命を失った人の亡骸や助けを求める人たちの顔を前に、どんな心境だろうと考えると胸がひどく痛かった。見送らなければならぬ母の気持ちや、見送られる父の気持ちを想うと今でも涙が出てくる。家族全員が生きていて、いつでも会えるというのは決して当たり前のことではないのだ。

地震から一週間が経ち、やっと電気が復旧し真っ先にテレビをつけた。ニュースで画面越しに映っていた津波の映像を見て言葉を失う。見たこともない勢いで家屋が波に破壊されていく光景を見て、今東北が過去最大にして最悪の大災害に遭っていると分かった。東京電力の原子力発電所で起こった水蒸気爆発の知らせも重なり、本当に自分の住んでいる福島県でこんなことになるなんて信じがたいことだった。避難指示もなかなか出ず、ただ拡散される多くの情報に翻弄されていた時間は、不安や恐怖でいっぱいだった。真っ暗なところに家族で置き去りにされたような感覚だ。

しかし、父の代わりに家族を守らなければならない母の心情は、私以上に不安と心配事が絶えなかっただろうと思う。

避難先を見つけるのも容易ではなかった。福島市内のどこかの不動産屋も「県や国から物件を押さえられていて入れられない」と断られ続けていた。やっとのことで入居した避難先でも、余震に怯え、不安なまま避難生活がはじまった。

避難中は三回の引っ越しを経験することになった。私は震災前まで学校の寮生活だったが、福島市内に避難してからは自転車通学をするようになった。それぞれ家族全員が生活環境の変化で疲弊し、一番負担が重かった母は精神的・肉体的に疲労困憊だったろうに、家族のために明るく振舞おうとし

ているのが分かった。祖父母は知人が多くいる仮設住宅での生活を選択し、私は高校の部活動も相まってなかなか会いに行けなかった。

避難先を得たときは一時ほっとしたものの、どこか自分の家とは思いきれず違和感があった。何かしていないと落ち着かないようになり、震災後の高校二、三年は、部活動と勉強にひた走った。ただ単に熱中していたようにも見えるだろうが、今思うとこの時の自分はどこか情緒不安定でキレ易かったと思う。何も欠けてない、完璧でなければいけないと自分を追い込んでいた。震災が関係あるのかと聞かれたら不明だが、避難してきた身としてどこか引け目を感じていた部分があった。また週末の楽しみだったお菓子作りもいつの間にか遠ざかるようになっていった。地震直前にしていた事だからかは分からないが、何か機会が無ければやりたくないと思うようになっていた。テレビで震災関連の放送がある度、いつになったら家に帰れるのだろうと不安になり、考えるのが嫌でテレビを見なくなった時期でもある。

私は高校卒業後、短期大学進学させてもらうと、授業で過去の震災について学ぶ機会があった。新潟の中越地震や、福島浜通りの地域での震災前後や震災時の体験を見聞きした。その後、偶然か必然か、たまたま父が出席する山木屋の集会、話し合いの場に同席したときは啞然とした。うつむいて

いる人、険しい顔で見つめる人、視線の先には役場の人たちだろうか横並びになって順番に紙に書かれた文章だろうかを読んでいる。山木屋の今後について考えるはずの場にしては、やけに形式だけのもののように見えた。

役場の人からの提案は、複合施設の建設であったが、数年後に管理を山木屋に任せるというものだった。偶然だろうか新潟県では震災後に「箱もの」を多く造ってしまい維持管理ができなくなってしまうと学んだばかりだった。そこは将来性を踏まえてよく詰めてかんがえなくてはならないと思いつつ、集会の流れを見ることにした。具体的な疑問や要望などが挙げられるだろうかと考えていた。

しかし予想に反し、誰かが話し始めてくれたかと思いきや、自身の身の上話や震災後にどれほど苦労したかを吐露する人、自身の家や土地の心配をする人、それに応える役場の人も「〇〇さんのところではくしているところですよ。」と一人一人に対する受け答えをしていく。周りを見渡すと、聞いてはいるものの右から左に聞き流し、ため息をつく人も多い。正直これでは山木屋全体の今後についての話し合いなんて進まないのも当然だと思ってしまった。その場の誰もが後ろ向きで悲壮感ばかりが漂い、形式だけの集まりになってしまふ。これでいいのだろうかという疑問と、焦燥感が沸き立つ。長年暮らしてきた諸先輩方には劣るが、山木屋の自然の中で育ち、良さも悪さも自分のなりではあるが見て聞いて感じ

てきたつもりだ。このまま傷だらけのふるさに「復興の希望なし」などに見切りをつけられるかもしれない。そうなくてもいいのだろうか。いや全く良くない。山木屋の学校では生徒こそ少ないものの、その代わりに教員や親の目が行き届き、スポーツや勉強などに励む子どもが多くいた。田舎で何もない嫌なところだと思ったこともあったが、それがいいところでもあった。震災後失ったふるさとの存在のおおきさを実感したじゃないか。きっとそれは私だけではないはずだ。この想いには自信があった。ここにいる誰か一人くらいは、この想いを理解してくれるだろうか。このまま終わらせたくない。ここにいる全員で、実のある話ができたらきっと前に進めるのでは。様々な思いが頭の中を駆け巡るなかで、気が付けばマイクを握りしめていたのを覚えている。

気持ちばかりが先走るところや、知識経験不足を痛感しつつも、その後無事卒業して社会人となった。しばらくして山木屋の家に立ち入りが許可され、久しぶりに踏み入った家は、震災前と変わっていた。周辺は雑草が生い茂り無法地帯と化し、ひとの居なくなつた家屋の劣化が目立った。小さい頃泥遊びをしていた水田には黒い塊が積み上げられ、普通ついていた学校も廃れ、子どもたちの姿も見えず雑草ばかりが背をのばしていた。ここだけ取り残されているような孤独感、悲しさともなしさばかりが心に残り、「見たくない」とさえ思っ



商業施設計画の説明会（平成26年 東福沢多目的集会所）

てしまった。帰りたくても帰れない、帰っても以前のような生活ができないと知り、ふるさとは強制的に奪われてしまったようで悔しかった。

しかし世間の目は、そんなことは知らないのだろう。至って冷やかだった。

社会人一年目の私は、社内でよく聞かれることがあった。「帰れるようになったらどうするの？」と、そんなこと見当もつかないが「帰りたいけど、帰れないと思う」と答えた。「市内は通勤とか買い物も便利ですしね」と冗談交じりに笑いながら付け加える。すると「えー！？ふるさと捨てるの！？ひどい！お金もらってるでしょうに！そんな声が飛んできた。この人は私の何を知ったうえでこんなセリフを言えるのだろうか、と正直思った。その後も無責任だのひどいだのと一方的に責め立てられ言われるがままだった。そう思っている人のほうが多いだろうなと半ば諦めもあった。それまでも、そして今も私が山木屋出身と知った途端「山木屋の人？じゃあ「コレ」持つてるよね（笑）」と、「コレ」と言いながら片手で親指と人差し指をくっ付けそのまま手のひらを上に向け、「コレ」＝「金」を指している。冗談で言う人も居たのだろうが、お金が絡むと人間の本性、汚さが露になると知った体験だ。震災から年月が経つと、震災でふるさとを追いやられたことへの同情心や慰めよりも「コレ」ばかり

が印象に残っているのだろう。嫌味を言われることが多くなった。

今回もそうだろう。これだから出身地の話はしたくないんだと思いつつ、本当の家に住めなくなっているのになんてこんなに非難されなければならないのかという悔しさやそれに対する恥ずかしさ、あのときの涙を流す父と見送る母の顔や、先の見えない真つ暗な不安を思い出す。「あんな思い、したことないくせに」と素直に沸き上がってしまう負の感情に蓋をして、グーツとどうにか抑えていたところ、ある人が口をはさんだ。

「あなたがそれを言う権利ないでしょ。」と、一蹴。

「あなたは住む家も震災前と変わらず暮らせてるでしょ。家追い出されて慣れない生活している人たちの状況も何も考えないで軽々しく言っていることじゃないよね・・・」

率直なうれしさと、負の感情を抱いてしまった自分の幼さへの恥、そんな風に思っている人がいることへの驚きなどで私は固まってしまい、その後の記憶が曖昧だが、つらつらと論破していたことを覚えている。実名は伏せるが、私は今でも覚えているし、それほど印象的な出来事だった。

十人十色は当然であり、誰かに叩かれたり殴られたりも当然であり、しかし見てくれている人もいる。世間は冷たいものだが捨てたものじゃないなと考えた。

社会人になり数年経ったころ、震災から何年目の冬だろうか、私たちは家族を一人失った。入院していた祖父が他界してしまったのだ。避難解除はその二カ月後だった。避難期間 はあまりにも長すぎた。

私は休日で車を運転していた。そこへ祖父の病院にいた姉からSNSで連絡が入った。SNSを開いたまま、呼吸も忘れ、サツと思考も全身も硬直する。なぜもつとたくさん会いに行つてあげなかったのか、最期も立ち会えなかったなんて、という後悔と、家族という自分の一部を失った喪失感でいっぱいのまま祖父とお別れをした。

「病氣は絶対治つて、帰ってくる」と信じて疑わなかった、直前までの自分をボコボコに殴つてやりたかった。震災直後に「家族全員が生きていていつでも会えるのは当たり前ではない」と感じ取っていたはずなのに。会いに行かなかった自分が情けなく思った。震災後、マイナスな考えが少しでもあればそこから逃げていた自分に気づき、『後悔しない生き方』を考えるようになっていった。

避難解除もあり山木屋に出入りしやすくなってからは、以前にも増して家を訪れる回数は増えていった。祖父が亡くなってからは事あるごとにお墓参りに訪れるようになった。すれ違う車は大きなダンプや社用車と見受けられるものが多

くなったが、その分道路も整備され車の通りがスムーズになった。多くの人の手が加わつて前を向いていつているように感じる。

今では家族各々で山木屋へ出向き焼肉をしたり、鳥や虫の声を聞きながら昼寝をしたりと、かつての生活を懐かしく思いつつ、今の山木屋を楽しんでいる。

震災を経て、今生きていることが奇跡であり、生きたくても生きられなかった人たちがいるということを私は忘れない。天災だからこそ誰も責めることができず苦しく、つい誰かに当たりたくなる。

しかし、いつ何が起ころるか誰にも予想できない。「ごめんね。」「ありがとう。」そう言いたい人がいるなら言葉にしてきちんと伝えよう。私も心掛けている。失ってから後悔するのではない。どんなに恥ずかしくても、不器用でも良いから自分の大切な人に「あなたはわたしにとって大切な人だよ。」と伝える。それが「できる」のは、双方が生きている時に限られていると私は考える。

震災が起きたことは変えられない過去だ。忘れたい人も居るなか不謹慎と思われるでも仕方ないが、しかしそこから学んだり感じ得たりしたそれぞれの想いは、風化してはいけない気がする。

宮地 勝志 (川俣町産業課長 五十代)

「せっかく、どうもない」

福島言葉を代表する？この言葉を初めて耳にしたのは山木屋の花き生産ハウスだった。

私は震災・原発事故の翌年の二〇一二年、ご縁あって、愛知県日進市からの派遣職員として除染事業に携わった。一年の任期であったため、復興どころか復旧に近づくこともできなかったが、多くの住民の皆様に接する中で、この地や人、言葉に愛着を覚えて、二〇一四年春に川俣に移住して今日に至っている。

私は、南信地区という愛知県北部に接する長野県の方々と長くお付き合いをしてきた。その地方の標高は山木屋よりも高く、地形も急峻で耕地の勾配もきつく、過疎化はかなり進んでいる。度々通う中で、地元の方々との交流が深くなった。きっかけは、アウトドアの趣味であった。仲間らと自然を満喫することを楽しんでいたので、いつしかそこに暮らす方々から「山間地での生き方」や「伝統芸能」を教えてもらったり、一緒に作業をしたるすることの方が楽しみとなって

いった。愛知から福島に移住しようとしたことに、多くの方から激励の言葉をいただいた一方で、長野の方々から「遠くなるぞら」と言われたときの顔は今でも忘れられない。

私にとって二〇一二年の山木屋は、放射線量の測定で通っていたところであった。春の連休にも残っていた林道の残雪に、夏の木陰の冷涼な空気に、カラマツの黄が映える秋色に、冬の紺碧な空色に、南信の景色が重なり、まるでそこに暮らしの匂いがあるように懐かしく思えた。

二〇一四年に川俣へ戻ったときから、山木屋の方々とのお付き合いが増していった。避難中のために山木屋の家々に生活感がないのはしょうがないとしても、道沿いに積まれ始まった除染廃棄物の山は、これまでの人生で見た景色として「あまりにも似つかわしくないダメなもの」と感じた。

「福島県の観光地は会津が中心だが、福島市から一番近く会津（のようなもの）を味わえるところ」。県外からの視察対応を任されることが多く、山木屋をこう表現させていた。中通り県北にあつて降雪量の多さ、山の幸の豊かさ、人情の濃さ等々、私の感覚ではあるが、観光適地としての要素がとびつきり高いところである。かつて塩の道が通っていたことが街道にその雰囲気醸し出していることも魅力のひとつである。勝手な夢ではあるが、請戸での水揚げが再開された暁には、中通り県北で一番新鮮な魚介が手に入る市が

立つことを期待している。

戻らない、あるいは戻れない人が多くなってしまったのは、避難生活が長くなったことが原因であるが、それまでより便利などところで暮らしたことや、それまでより自由に判断ができるようになったことが大きい。ふるさとの喪失感はいくつもの感性によるものかと思っている。私には「ふるさと」があるようには思えない。幼い頃の記憶にある田畑の風景は、小学校低学年の頃にはなくなっていた。地区は都市化して残っているが、暮らす人の多くは知らない人たちであり、五十年そこで暮らしていても、そこを「ふるさと」とは呼べない。ところが、都市化が始まった頃から越えてきて、「ふるさと」と感じている同級生もいるのである。

「地区がなくなってしまうかもしれない」。限界集落なんて言われる村々が多い南信地区でもよく耳にした。「もしかししたら、自分はふるさと探しをしているのかもしれない。」と思う時がある。福島への移住は、人生の(多分)三分二を過ぎたときにいただいた貴重な岐路である。この先もここで生きていく中で、山木屋の方々から色々なことを教えていただきたいと思っている。いつか自分が、外から来てくれた人に「せつかくどうもない」と自然に言える日が来たらと密かに思うのである。

山口 功 (川俣町生涯学習課長 五十代)

「ゴゴゴ」激しい地鳴りと共にその瞬間はやってきました。窓越しに見えるマンションや雑居ビルは、ぶつかり合うかと思うくらい大きく、ゆっくりと撓りながら揺れ動き、私は頭上の棚からプリンターが落ちないよう抑えながら長い揺れに耐えていました。

当時、私は川俣町から福島県後期高齢者医療広域連合へ出向を命じられ、福島県庁の隣にある福島県自治会館内に勤務していました。

地震の後、ラジオからは大惨事を告げるニュースが流れ続けていましたが、その日は渋滞に巻き込まれながらも帰宅することができました。余震が続く中、町は停電のため真暗闇に包まれ、星空がとてもきれいたったのを覚えています。

広域連合は、県内自治体の職員が集まって組織されており、浜通りから出向していた複数の職員は、地元市町村が大きな被害を受け、故郷の復旧のため地元に戻っていましたが、職場運営の立場上、何度も電話をして呼び戻しましたが、被災地職員の心情を思うと心苦しい経験でした。また、その後は震災と原発事故の対応のため休日出勤も続き、川俣町の復旧復興にほとんど携わることが出来なかったことが、今でも申し訳ない気持ちでいっぱいになります。

その様な中、原発事故の影響により山木屋地区全域が計画的避難地区に指定され、全住民が避難せざるを得ない状況となり、慣れない場所での生活に大変ご苦労されたことと思います。六年に及ぶ長い避難生活の影響もあり、避難指示解除後の帰還者は、避難前の約半数に満たない状況ですが、復興拠点商業施設『とんやの郷』や再開された山木屋公民館を核として、地域の皆様が集い、協力しながら、少しでも以前の生活を取り戻してほしいと思います。

村上 仁 (馬場平 七十代)

三月十一日と言う日は、あまり思い出たくないという日で、六十八歳という年まで経験したことの無い日だったと思っています。地震は分かっていますけど、あんな地震に遭ったことはないです。

たまたま三月十一日という日は、笠原鋳物工場のISO・

9001;2008の定期審査の日だった。各部署の審査が終わって、やれやれと言うことで、審査員が取りまとめに入った時だった。工場は通常通り動かしていました。

十四時四十六分、あの地震が起きて、真っ先に現場に飛んでいきました。キューポラ溶解している作業と言うのは物凄く危険が伴う作業でございますし、まして、まして、動力の使えない中でのキューポラの処理というのは、危険度が高くなる訳で、余震の中でだいぶ揺れていましたから、その中でキューポラの底を抜いて処理するというのは、ちよつと考えられない。電気も点いていないし、暗い状況の中での処理をやらないと、当然、水冷キューポラな訳ですが水が回っていない訳ですから、その中での処理というのは、死に物狂いのような状況で作業しました。暑いし機械でやるのを人力でやる訳ですから、そのためにはやはり従業員の安全手順を、一工程、一工程、安全を確認しながら指揮を取って作業を進めました。その処理が終わって、ホッとしたら、工場建屋の屋根外壁が落ちていたり、工業用水、飲料水の配管の水が漏っていたりと言う事で、地震ってこんなに怖いのかと言う事が身に沁みました。直ぐに従業員の人数確認をやりまして、誰かがケガをしていたり、どこかの機械に挟まっていたりする事がないか確認し、従業員の家族の事を考え、即、全員帰宅させました。

僕だけが残り、状況を見ていたのですが・・・工場の再

開については、全く頭が真っ白でして、造型機は鋳型を作る機械そのものが水平でなくちゃいけないんですが、ラインが沈下してしまい震動で数十センチも動いている機械もあり、動力が使えないと元の位置に戻すことも出来ない機械もあり、いや、動力を使つて修理が出来てどうにかなる訳ですから、その段階では、これはいつになるのか頭には浮かばなかった。

地震の被害だけでも再稼働が困難と思っていたら、客先はすでにキャッチ（放射能の事を）していきまして、客先から鋳型、中子取りという鋳造の原点である型を梱包せよと言う指示が出まして、つまり、鋳型というのは世の中に同じ物はなく、メーカーさんが資産として作るもので笠原鋳物に委託している訳です。それを移動できる様に梱包せよという話ですから、笠原鋳物から生産を他工場に移すというシグナルなのです。真っ暗な工場の中で、鋳型が移動させられるのが分かっているながら梱包作業をしなくちゃいけない辛さ、従業員の動揺を押さえるため事実を話せない辛さ、あの時は此の工場は終わりかと思いました。原子力放射能の影響で操業が出来なくなり、他社に移動して生産すると言う事は、当社にとって地震よりも恐ろしい話で、これはたまらないと、とにかく一日でも早く工場を動かすという判断をいたしました。一定の従業員を集めまして、修理修繕を自力で実施し、三月十七日には電気が通電されておりましたから、朝から動力を使っ

て最低限稼働出来る様に復元させ、三月十八日から稼働させました。会社の存続が危ないと言う事ですから、従業員も必死に努力した結果でした。「笠原鋳物は大丈夫です」と、震災の影響もほとんど解消して、生産できる事を伝えました。

生産を続けていましたら、今度は四月二十二日に避難の話です。机を運んだり機械を移動したりして生産出来る会社ではないんです。この工場を移転するには十五億と言われますし、建屋設備を設置すると二年数カ月が必要であり、やはり、前述した様に客先に型を引き渡すしかないという感じでした。東京電力原子力発電所からこの工場まで40・3キロなんです。自分らでも線量を測ったりしていたんですが、多い所で空間線量が幾らかは分かりましたが、3マイクロシーベルトと言うのは、人体を害するのとか害しないのか分からない訳です。避難せよと言う話ですから、やむを得ないと言う事で、社長と二人で型を移動される前に、笠原鋳物が責任をもつて製品の品質を保証し、外で製造する事を決め、二週間ぐらい東北各方面、岩手、山形、宮城、新潟の同規模の鋳型工場を回りました。鋳物工場と言うのはその会社が受けている製品に従って造型機、処理能力が作られているため、なかなか受け入れてくれる工場はなく、しばらく岩手で一社、山形で一社、新潟で一社に協力を取り付ける事ができました。が、自分らの努力はむなしく、震災一年後には、見事に受注の30%の製品が移動され、現実には震災前の60〜70%の仕事

量になり、雇用調整をしながら操業してきました。なんとかしても地域雇用を守りたい。大変な思いを皆一緒に頑張ってくれまして、一人もやめないで続けてくれた。全ての従業員に感謝し、これからも鋳造品を作り続けていきたい。

ふだん何事もない日は気が付かないが、何事もない日をしあわせに思う。

渡辺

とくい

(広久保山 七十代)

高い空をピンツコ(赤とんぼ)が飛び、忍者の如く我が腰高あたりをかすめて姿をくらますドロトンボ(オニヤンマ)。日暮れが近まるとカンカンカンとカンカンゼミ(ヒグラシ)が家路を急がせる。萱ぶき屋根の煙出しからホノホノと煙が夕空にのぼっていく。

自分が子供の頃のふるさと山木屋の風景がなつかしくよ

みがえる。

時代と共に情景も様変わりしていくのは仕方がないか。

原発事故以来、山木屋は、道路が真新しく整備が進み、アレ？ここいらに何か建物があつたような・・・てな具合の現状で、七、八年のブランクは浦島太郎のミニミニ二何百分の壱の心境と思う人も多いべなあ。

山木屋に戻って三回目の夏が終わった。いつになく厳しい暑さだった。地球の成層圏は50 kmくらいらしいから熱波で壊れちゃうんじゃないかなんておかしい心配もしてみたり・・・

現世で宇宙や地球がいつ出来たかなんてはつきりした事を知っている人などいやしない。いろいろな研究を重ねて出た数字や自然や海の中に残っている熱水の域、又、中国の桂林にある変わった形の巨大な岩山、ここは現在は陸地だが、大昔は熱帯の海で、この岩石は石灰岩で四億年前頃、サンゴ虫たちが作ったという事が岩石に残された化石からわかったそう。私は決して宇宙の事に明るいわけではないが、とても興味津々の気持ちで動くだけ。ただただ自分の中に小さな自分だけの宇宙感をもっていたら、でっかい事だろうなっと思うだけ。

百五十億年以前に火の玉宇宙が開闢(天・地・国のおこり、

始まり)して宇宙が誕生したという。その直後、水素からウランまでのすべての元素が二十〜三十分位で出来たと考えられるそう。

この説は、一緒に研究した三名の学者の名前をとって「アルファ、ベータ、ガンマ理論」と称されるそう。

地球誕生が四十六億年以前、それよりはるか前から放射能で宇宙にあったんじゃないか。生命の誕生が三十五億年前、人間はもちろん、動物、植物、あらゆる地球上の生命体は、大昔の昔の、そのまた昔のずっと昔の宇宙から頂いているって事なのか……

だから、宇宙の事を考えると、胸が熱くなるのか……(コラッ!飛躍しすぎるな)むずかしいことはわからないよ。でも、こうやって人の命の起源を考えると、何てことはない。みんな知り合いじゃないか。

そう思ったら、ケンカなんかしなくてもすむよね。

宇宙が出来て、地球が生まれて、気の遠くなる程の営みの中のちっぽけな人間社会なのかぁ……

水境部落で帰還しているのは、二世帯。道端で会ったりすると道端会議の開始。自然の中でおしゃべり、楽しいよ。誰の邪魔にもならないし……。花苗を上げたり、もらったりも……。

悩みや気がかりは、誰にでもある。私にもテンコモリあるよ。物事つらくばかり考えないで、穏やかに生きていけたらいいな。

後期高齢者と言われるようになって二年。八十三歳になるつれあいと共にゆつくりと生きていくべかな……なんてね。

渡辺 義明 (広久保山 八十代)

山木屋に来る前は、横須賀に住んでいた。戦時中の空襲で、あちらこちらの戦火が見えたことを覚えていいる。昭和二十年、母親の実家があった山木屋に疎開してきた。その年に終戦になった。それからずっと山木屋に住んでいる。山の中だけど、淋しいと思ったことはない。

・震災前

夫婦二人で山木屋に住んでいた。
あけぼの老人クラブの会長を、平成二十一年四月から二十年三月までやっていた。

・地震の時

福島渡利の孫を迎えに行く途中、カインズホームで支払いをしていたが凄く揺れで、外に出たら駐車場の車が踊っていた。途中福島市内の建物はガチャガチャだった。山木屋の家に着くと、瓦が落ちて、家の中は観音開きの食器棚の中の物が飛び出て割れていた。停電になってしまったので、結局孫を渡利に送り返した。渡利は停電になっていなかった。

・避難になるまで避難

山木屋全体が避難になると聞いて、老人クラブ員で集り、どこか皆で避難できるところがあればと相談し、飯坂温泉の清山旅館の名前があがった。清山旅館は、皆慣れているし平屋なのでいいということだ。あけぼのクラブの事務局さんと旅館を訪ね、みんなで避難できるか相談していた。が、県や他の団体で使用する事になり、清山旅館には行けなかった。結局あけぼのクラブは、月乃瀬温泉になった。

その後、農村広場の仮設住宅に移った。

仮設住宅は、よかった。狭かったけれど、顔見知りがいり、いたし、淋しくなかった。けれど、農村広場に仮設住宅を建ててしまったので、町のグラウンドゴルフの大会や、運動会をする場所を奪ってしまったのは、申し訳ないと感じた。他の場所はなかったのかなあ、と思った。

平成二十七年に病気になるが、落ち着いてきた。

・避難解除 帰還 これから

山木屋に戻ってきた。今は、家の周りの草刈り、行けるときには、グラウンドゴルフに行っている。

他の楽しみは、老人クラブの温泉旅行や、息子にあちこち連れて行ってもらうのが楽しみ。この間は、佐渡に連れて行ってもらった。

九月十三日 義明様宅にて聞き取り

渡辺 直一 (地切 八十代)

・震災前は？

夫婦・息子夫婦・孫 合計五人

家族でたばこ農家やっていた。孫は、震災の一年程前から体育館の仕事を辞めて、農家を継ぐために一緒にやっていた。たばこの仕事は忙しかったけど、ソフトボールの審判員の資格持ってたから、春と秋の地区の球技大会は毎回出た。楽しみだった。寿老人クラブの会長もやった。

・震災の時は？

うちのは、日赤病院に入院していた。
ほかのみんなは、うちにいた。

・避難く避難解除は？

夫婦は、福島娘の所 ↓ 野地温泉 ↓ 仮設住宅
仮設住宅は、いろいろがったな。

「生きられるだけ生きるべ」と思って過ごしていた。
避難解除になったら、仮設住宅を出なくてはいけなくて、家探しをした。福島市内、四く五件見て回った。けど結局、山木屋の家をあちこち直して山木屋に戻った。

息子夫婦は、飯野町 ↓ 南向台
孫は、消防署に一年程、警察官採用試験を受けて、警察官になった。

・今は何が楽しみ？

パイプハウスで、家で食べる野菜作り。

あと、仮設にいる頃は、月・水・金は、福沢の皆さんに混ぜてもらって、火・木・土は、山木屋のグループでグラウンドゴルフ。月は吹矢。

今は、月は吹矢、火・木・土に山木屋の学校でグラウンドゴルフ、火の午後は町の体育館で卓球をやっている。

それから、震災前も今も、春は山菜、秋はキノコ採りに山中歩くのが楽しみだ。線量測ってもらって食べる。山菜はね。山の木切らないから、おりみきは減ったような気がする。木切って倒して、五年く十年ぐらいすると出てくるんだ。ちよつと食べてから、測る。キノコはね。ちよつと高いな。だんだんどうかなあ・・減るのかなあ？

と、元気な直一さんでした。

九月十二日 山木屋公民館にて聞き取り

菅野 清一 (下田代 六十代)

何故、原発事故は正しい情報がでないのか？

原発事故は地域から何を奪ったのか？

原発事故から早や八年の月日が流れ、避難解除後の今なお、自然環境放射線量の10倍、20倍という線量がありながらも、何事もなかったような日常が続いています。

大規模除染も終わり、復興事業だけが大きな力を持ちながらその勢いを増しています。

しかし、その裏側では原発被害十二市町村のそれまでの人口97,300人のうち17,000人程度しか戻っていないにもかかわらず、国も県も自治体も復興が進んでいる、復興が目に見える状況になっていると言っています。だとするならば、戻りたくても戻れない8万人余りの人たちの人権や生活再建はどうなるのでしょうか。

加えて自主避難者(区域外避難者)も2万人ほど戻っていません。わが町にも200人ほどの自主避難者がいます。今マスコミも含めて、このような人たちを自己責任だとくくる人達がいいます。この事態は原発事故がなければ起こり得なかったことなのです。我が国は法治国家なのです。憲法十三条と二十五条をよく読んで頂きたいと思います。

本来保障されるべき個人の人権が、時の政権によってない

がしろにされることはあってはならないのです。

帰還を選択した人たちも、同じ境遇に見舞われています。念願叶って帰還しても、隣近所には住民がおらず人と話すことがなくなつたと言います。それまでは同じ作物を作っていたり、地域の行事だったり、共通の話題がありました。今は話がかみ合わないため、避難解除以降、急に会話がなくなつたと言います。

多くの人が人との付き合い方が変わったと言います。

帰還することを諦めに移住した人も、同じような思いをしながら過ごしています。隣近所知らない人ばかりでとても息苦しい思いをしています。特に高齢者になって新たな土地での近所付き合いは、とても過酷なことと思います。

避難生活とは、生身の人間が生活そのものを丸ごと抱えながら、見知らぬ土地での生活を強いられることなのです。しかも、仕事も、家族も、それまでの平穏な日常を奪われながらの生活を強要されることなのです。このことから、100人を超す自殺者を生み出す結果となったのです。この事実は被災三県で福島の大震災関連死がダントツに多いことで証明されています。避難者の多くは、一度や二度は、死を考えたことがあると言われている。避難後まもなく国連は、福島島の原発避難は大きな人権問題だと宣言しています。

それらの問題は避難解除されて解決されたのでしょうか。

避難解除以降、それを待っていたかのように大型公共事業中心の復興事業が台頭し、建設業、機械関係、設備関係業界が好景気に沸くありさまです。帰還者の多くはコタツに入りただ見ているだけです。

少なくとも避難者にとっては復興など実感できないのが現実であります。

復興とは、その被害を受けた人たちが生業を取り戻し、家族が寄り添い、これまでように地域が助け合い、真の自助、公助の精神が行き渡り、子供たちが野山を駆け巡り安心・安全を取り戻せるような環境が保障されることにあります。

残念ながら現実の政策は真逆であり、その格差は広がるばかりです。それは、健康被害にはかわらず「原発は安全だ」という、まさに新たな安全神話が作られているからなのだと思います。つまり、健康という政治や行政の究極の目標を忘れ、人間の安全性より経済優先の政策が優先されて、国の政策が進められているからです。

特に、原子力政策に関する情報は、あらゆる事実が隠蔽され、正しい情報が出されていない。不思議なことに後からあとから情報が出てきます。例えば、国から送られてきたスピーディのデータが八十六通のうち六十五通が県の職員によって消されてしまったのです。理由は、データ保管のマニユアルがなかったことや、古いデータを消さないと新しいデー

タを入手できないとか、支離滅裂な理由でした。誰かの指示がない限り、一職員の判断でできるものではありません。いま話題の桜を見る会や森友問題のデータ隠しによく似ています。放射能拡散の報道も疑問だらけです。このデータが正しく公表されていれば避難の方法も大きく変わっていたものと思います。

1号機の水素爆発（三月十二日午後3時36分爆発）の以前に双葉町の上羽鳥地区で昼間に1,590マイクロシーベルトの放射線量が記録されていたこと（つまり爆発以前に地震によって建屋が破壊し放射線が漏れていたことを意味します）、また原発事故直後の三月十七日～十九日にかけて米軍のヘリと小型輸送機で浪江町上空を計測したら毎時128マイクロシーベルトの放射線量を確認し日本政府（外務省）に報告したが、国は県にも市町村にも知らせず、住民にも知らされなかったこと。いずれも後で（一年もたった後）国や県から説明謝罪はあったが、すぐに知らされていけば無用な被ばくは避けられていたのです。

また、事故の後七月二十三日の県民健康調査委員会の会議で、牛肉検査優先のために山木屋と浪江の子供たちの健康調査が見送られたことなど、まさに人命軽視の経済優先（当時福島牛の価格下落が問題となっていた）の政策が推し進められていたのです。

これは、翌年の二〇一二年十二月にIAEA（国際原子力

機関」と福島県が結んだ原子力に関する協定書の内容をみれば、県民の健康無視は明らかです。というのは、IAEAと福島県の間で交わされた内容で、「情報の普及」という分野の中の一文に、「お互い知り得た知的財産については、双方いずれかが秘密を必要とする場合は秘密を保持する」と明記されています。これでは健康被害については絶対に公表されることはありません。そんな中、福島県は233人の甲状腺がん患者に対し経済的支援を行っています。しかし未だに県は、これらの甲状腺がんは原発事故が原因とは考えにくいと言っています。甲状腺がんの原因は地震によるものだとも思っているのでしょうか。

国も県も原発事故に関する健康被害は絶対に認めるわけにはいかないでしょう。これは1956年にIAEA（国際原子力機関）とWHO（世界保健機構）とで交わされた協定書のなかで、内部被ばくの問題を調査する第一委員会を廃止したことから、健康被害のなかで内部被ばくを取り上げないというスタンスが現代でも続いているのです。

だから子供たちにあまり効果のないガラスバッジを配布したり（ガラスバッジは放射線の出る方向に向けてないと効果が無い）、元々数値が低く設定されているモニタリングポストを設置したりなど（実測値が3割程度低く設定されている）、健康管理や被ばく線量基準があまりにも曖昧にされたまま政策が進められていることが、被害者に信頼されていない

大きな要因なのであります。各市町村の除染報告会でも元々国自らが決めた年間被ばく線量が1ミリシーベルトなのに、いきなり20ミリシーベルト論を持ち出して、安全論を唱える始末である。これでは被害住民からの信頼は得られません。しかも、除染検証委員会のメンバーは、将来そこに住む人たちではないのです。これが避難解除後の自治体の現状であり、歪んだ復興事業の現実です。

いま改めて求められているのは、事故当時の人命を軽視した誤った原子力政策の反省に立って、被害者救済を進めることです。帰還政策が本当に正しいとするなら、農地や宅地回りだけの除染では被害者は納得しません。

住民にとって、被害者にとって、いまの復興政策も賠償を含めた復興政策も、もろ手を挙げて支持していません。なぜなら、これらの政策によって生活再建を成しえた人はいないからです。

本当に生活再建や会社再建をしたのは、30兆円を超える復興再生資金に群がる建設業を中心とした機械、設備などの業者だけです。この国は、平成七年の阪神淡路大震災から何の教訓も学んでいないのです。避難解除後の自治体の現状をみると、復興、再生どころか、自治体や集落の存亡の危機に瀕しています。最近の原発訴訟などの判決や、東電のADR和解案拒否の報道を見ると、まさに我が国の「司法」「立法」「行政」からなる三権分立の原則は音を立てて崩れ去ろうと

しています。

法律的、科学的根拠もないのに安全宣言が出されたり、生業も進まず生活再建の目途もたたないのに避難解除がされたり、このままでは復興どころか棄民政策そのものです。いま改めて問われているのは、「復興事業」というのは一体誰のためにあるのかということです。そういう意味では、住民にとって一番身近な存在である自治体こそが、避難者の負託に応えその任を担うべきなのです。

自治体の仕事とは、役場の仕事とは、「住民の幸せづくりのトータルコーディネーター」といわれています。いまこそ、地方自治法第一条の原点に立って仕事をするべきなのです。

地方自治法第一条では自治体の仕事は「住民の福祉の増進を図ること主たる目的とする」と明記されています。住民の唯一の代表機関である議会も、あらゆる英知と能力を発揮しながら議論を深め、本当に政治や行政を必要としている力のない人達のために応えなければなりません。いま行政に求められているものは、原発被害のみならず、台風被害の対策や少子、高齢化問題など、課題は山積みです。

議会も新しく五人の新人が入り大きく変わりました。私もこれまでの経験を生かしながら、皆と力を合わせ、真実を求め続けていきたいと思っています。



山木屋全体の袋数 631,811 袋 (上)3区・長橋の仮置き場 2014年6月

写真提供 菅野清一様

愛称「とんやの郷」の由来

山木屋地区復興拠点商業施設の愛称「とんやの郷」は、227 点の応募の中から選ばれた愛称です。

「とんや」は、山木屋地区中心地の地名「問屋^{とんや}」が由来です。

古いお話では、現在問屋地区にお住いの紺野正寿さんのご先祖様が、明治 30 年代に「塩の道」の途中で休憩している人々に飴玉を売っていたとのこと。今、お店はありませんが、その頃の屋号「きくや」は、今でも正寿さん宅ということで通用しています。昭和 30 年～40 年頃の山木屋地区には 2,700 人余りが住んでいて、問屋周辺のお店は 17 軒もあってたいへん賑わっていたそうです。

名付け親の廣野隆俊さんは、これから山木屋が大きく変わっていても、震災前の様に人々が集まり利用されていく事を願い、昔から親しまれて来た「問屋」の響きを入れて、「とんやの郷」で応募したとのこと。

今後は、この「とんやの郷」が、新たな山木屋の中核として発展していく事を願っています。



※「塩の道」：相馬中村藩と二本松藩が江戸時代の前半に開いた道で、現在の相馬市松川浦でとれた塩や魚がこの道を通って中通りに運ばれ、沿線住民には「塩の道」と呼ばれていたそうです。奥州西街道とも呼ばれています。

3・11震災の記憶

山木屋地区復興拠点記念誌として

とんやの郷 施設長 大内 浩史

○3・11

平成二十三年三月十一日は、川俣町体育館に勤務しておりました。普段の地震には、とても鈍感で、夜なら起きたことがあります。その日の午後二時四十六分、今までに感じたことのない大きな揺れに襲われました。最初は、どうせすぐに収まるだろうと日頃の避難訓練の成果も活かそうとせずにいたところ、揺れが収まるどころかますます強くなりまして。急に怖くなり、恥ずかしながらわが身ひとつで屋外に飛び出しました。

体育館の前庭から眼下の住宅を見ると、信じられないことに棟瓦（ぐし）が次々に崩れていきました。これは並みの地震ではないということがだんだんわかってきました。まちがいなく大地震だと。

長い余震の後、少し揺れが収まったので、体育館の中を確認すると、メインアリーナ吊り天井が大きく崩落しておりました。ちょうどその日は、中学校の卒業式で、いつもなら部活動をやっている中学生がいなかったことは不幸中の幸いでした。いつもの部活動中ならと思うとゾッとします。

停電となり、本庁との連絡がとれず、公用車で被害状況を報告に行きながら、町内の様子を確認。棟瓦の崩落があちこちにあるものの倒壊している家屋は見られず一安心。その晩は、自宅待機で、家族四人で身を寄せ合って過ごしましたが、余震であまり眠れず。停電の暗さは不気味でした。

町内の停電は、一日～二日で大部分が復旧したと思います。津波被害と福島第一原子力発電所事故の様子は、リアルタイムでテレビで見たかその後のニュース等で見たか、記憶が定かではありません。大震災も想像を絶していましたが、津波や原発事故は、それを超え実感として捉えられませんでした。

○避難開始

翌十二日、相双地区の避難が開始されました。山木屋の両親も五百田の我が家に避難。

川俣町では、双葉町の全町避難の受け入れを決定。大型バスに分乗した双葉町民が整然と町内の指定した避難所に到着。町合宿所とサブアリーナも指定され、合宿所事務室が双葉町の仮役場（災害対策本部）になりました。

双葉町以外の相双地区の避難者が押し寄せ、避難者受け入れが不能（満員）となっておりましたが、県の災害対策本部、県北地方振興局ともに大混乱となっており、避難受け入れ先情報途絶。避難者からは「どこでもいい横にさせてくれ！」。

「子どもだけでも寝せてほしい!」。「ガソリンが無いんだ!どこへ行けばいいんだ!」。「人でなし!」などの言葉が。避難先を伝えることもできず、体育館への受け入れを拒むことに心が痛みました。

その十二日の晩から、体育館の事務室に泊まり込み。薄いマット一枚でコンクリート土間に寝るのは苦痛で、この先幾晩泊るんだろうと不安でしたが、避難者と同じ苦しみ不安を共有できたことは大事だったと思います。

○全町挙げて

双葉町民ほかの避難者は、最大で約7,000人。当時の川俣町の人口の半分にあたります。川俣町の被害状況も把握しきれない状況で。

まずは、避難者におむすびを。お米屋さん、スーパーの一部、農家さんが、復旧の先が見えない中、お米を提供してくださいました。そのお米をおむすびに握るのは、婦人会を中心とする日赤奉仕団と有志のみなさん。自身の家庭もある中、誠心誠意、朝から晩までおむすびを握りつづけてくださいました。

停電や流通ストップでガソリンスタンドが休業、町民や避

難者も給油ができず困っておりました。消防、警察、役場の公用車も給油しなければ活動できません。それをいち早く理解して協力してくれたのは、川俣石油の(当時)菅野富雄所長(山木屋7区)でした。「救急車、消防車、パトカー、役場の車が止まったらどうすんだ!」と手回しの給油ポンプを使い公用車限定の給油を行ってくださいました。お得意様等いろいろなしがらみがあったと思いますが、英断のおかげさまで、各公用車は任務を遂行できました。

消防団も迅速な巡回をし、発電機や照明等の設置をするなど必要な支援を行っていました。電気、ガス、水道等の町内業者も、避難所を優先に夜遅くまで迅速な復旧に努めてくださいました。正に川俣町全町挙げての災害対応であり、同じ町民として、大きな誇りです。

○日本人らしさ

その後の報道でも度々伝えられることの一つに、災害などどんな困難な状況でも自制心や思いやりを失わない日本人の行動がありますが、町体育館の双葉町の避難者の方々もそうでありました。「みなさんの中で、お手伝いできる方いますか?お手伝いできる方は、この(運動会用の)スタップビブスをつけていただけますか。」と呼び掛けたところ、あつと言う間に数十人がスタップビブスを着用し臨時自治組織

ができあがりました。おむすび等の食事の配布や困りごと相談の窓口、避難場所の工夫、避難生活の決めごとなどが円滑に行われました。何百人の方が何日も避難されているとは思えないほどトラブルがありませんでした。

逆に思いやりが裏目に出て、役所（災害対策本部）や避難所を大変困らせられたことが一つありました。安否情報問い合わせによる電話不通です。私の任務は、避難者の支援であったはずですが、実際には、朝から晩まで一日中、安否を確認する電話の応対でした。その都度、探したり、呼び出ししたりすることは出来ないで、伝言板に掲示することとしました。電話はパンク状態で、必要な連絡を受けることも掛けることも出来ず大変でした。八年以上経った現在は、伝言ダイヤルの認知やSNSが主流になっているので、被災地の電話をパンクさせる悪意なきテロは起きないと信じています。

○日本人というよりは役人らしい話

電気も復旧、水道も復旧（上水道は、福島地方広域のすりかみ浄水場系統はストップしましたが、川俣町の浄水場は稼働し続けていました。）、ガスもプロパンガスなので使用可能でした。

避難者の方にお風呂とシャワーの提供をしなければと思いました。さっそく、町体育館、合宿所の避難者の臨時自治組織の方に、合宿所での入浴と体育館のシャワー提供を提案。入浴順と掃除当番を決めてほしいとお願いしたところ「体育館や合宿所の床は寒い。年寄りや子どももたくさんいる。お風呂に入れるなんてありがたいこと。年寄り子どもから順に入らせてあげたい。風呂掃除なんてお易いご用。」と快諾。臨時自治組織により、すぐに入浴体制が確立しました。

その矢先、なんと、どこで入浴情報が伝わったのか町の災害対策本部から「全避難者の入浴計画が出来るまで入浴させるな。合宿所浴室の図面を出せ。湯船と洗い場面積、避難者数から入浴計画を作る。」とのこと。何を言ってやがるクソ役人！こんな命令聞けるか。計画が出来るまで、こっちはこっちで入浴をさせようと予定どおり入浴を促しましたが、大きな声の命令だったせいで、避難者の方に聞こえてしまいました。「川俣さんに迷惑はかけられない。」「ただ、一部のお年寄りだけは入浴させてほしい。」「ほとんどのみなさんが萎縮して入浴を遠慮されました。底冷えする木の床に何日も過ごしている避難者の入浴を待ちかねていた気持ちと刑務所でもないのに役人が作った入浴計画に従わなければならない惨めな気持ちを思うと悔しくて涙が出ました。こんなお役所仕事、こんな対応は、あってはならないので、あえて書き留めておきます。」

○双葉町以外の被災者の避難生活

双葉町の方々は、一週間ほどで埼玉県へ二次避難しましたが、浪江町民をはじめとするほか市町村の方々の避難生活は、借上げ住宅や仮設住宅が造られる七月ごろまで、各小学校等の冷たく硬い体育館の床の上で、段ボールや硬い毛布を使い、試行錯誤しながら最低限の生活環境で長い避難生活を過ごされておりました。体育館（避難所）全体が大きな家族のような連帯感が生まれていたようですが、時には些細なことで大声で怒鳴りあったりということもあったそうです。私には想像も及ばない御苦労があったことと思います。

山木屋地区も計画的避難区域となり、両親も福島市平野の借上げ住宅に避難となりました。ほんの短期間の避難と漠然と思っていたことでしょう。はじめは、山形の孫も近くなるし、サクランボ、桃、梨、リンゴの畑に四方囲まれた借上げ住宅を桃源郷のように気に入って喜んでいたおやじでした。目の前の桃畑と裏の梨畑は、山木屋の実家の隣から嫁いでいった方の果樹農家の畑で、借上げ住宅の大家さんも果樹農家、サクランボ、桃、梨、ブドウ、リンゴ、おやじの人生で果物を食べ飽きるほど食べたのは初めてだったのではない

でしょうか。

それでも、次第に予想を超える長い避難となり、ふるさと山木屋に帰りたい思いが強くなっていったことだろうと思います。残念ながら、避難中に喉頭がんに冒されたおやじは、ふるさとの復旧を見ることなく国見町の藤田病院のベッドで死にました。人一倍おしゃべりで酒好きでドライブ好きだったのに、喉のがんのため、楽しみをいっぺんに失ってしまったおやじを見るのは辛いことでした。

今は、自分で決めた山木屋の墓で永眠。あの世から山木屋の復興を見ていることでしょう。



○その後の山木屋地区と復興拠点

避難先での生活が基盤となるほど長い避難期間を経て、平成二十九年三月三十一日、山木屋地区の避難が解除となりました。四月には、山木屋小中学校の再開。七月には、山木屋地区復興拠点商業施設（愛称…とんやの郷）がオープンしました。

帰還された方のほとんどが高齢者であり、里山や里道、農地の保全、交通手段の確保、コミュニティの縮小、一人暮らし高齢者の見守りなどの課題を抱える超高齢社会を先取りした地域となりましたが、自治会や地域づくりに取り組むNPO法人、花卉・ソバの栽培に取り組む方、サロン活動などが、地域づくりの担い手となつて新たな一歩を踏み出しました。

とんやの郷は、その名のとおりに復興拠点にならなければなりません。地域の拠り所として、地域づくりの担い手や地区民が気兼ねなく自由な発想を生み出す場にして、生業づくり生きがいがづくりに活用してほしいと思います。

そして、関わる全ての人々で新しい形の山木屋地区・山木屋高原を築いていきましょう。



年 表

平成23年（2011）3月～4月																	
22 日	18 日	16 日	15 日	13 日	11 日	10 日	8 日	4 月 7 日	30 日	25 日	23 日	19 日	18 日	15 日	14 日	13 日	3 月 11 日
国は、山木屋地区に原子力災害対策特別措置法に基づく「計画的避難区域」、「緊急時避難準備区域」を指示 一カ月以内の立ち退きを求められる																	山木屋中学校卒業式 東日本大震災発生 川俣町は震度6弱 全町停電 消防団・地震被害ヶ所の確認 原発周辺自治体住民の避難受入開始(町) 避難車両で渋滞 夕刻 停電復旧 原発周辺自治体住民の避難者6,081人収容(町) 一回目の放射線測定(町) 町からの説明会 於・JA山木屋支店前 第一回災害広報 放射線測定値に関する広報(町)
山木屋地区災害対策本部設置 山木屋小学校卒業式(山木屋幼稚園にて) 山木屋幼稚園入園式 県下一斉 葉たばこ耕作中止通知 山木屋小学校、中学校入学式、始業式 福山内閣官房副長官、細野内閣総理大臣補佐、松下経済産業副大臣 来町 枝野内閣官房長官、新たに計画的避難区域(山木屋地区を含む)を公表 農作物の作付休止決定 山木屋小中学校PTA総会 福山内閣官房副長官、細野内閣総理大臣補佐、松下経済産業副大臣 山木屋地区住民に計画的避難区域について説明 於・生活改善センター 山木屋幼稚園、小中学校の子供101人仮校舎までバス通学を開始 幼稚園Ⅱ川俣南幼稚園、小学校、中学校Ⅱ川俣南小学校 約20名の子供達 町合宿所に避難 山木屋地区内事業者向けに、計画的避難区域設定の説明																	原発・避難指示等 1号機全交流電源喪失 避難指示 半径2km 屋内退避 半径3～10km 1号機水素爆発 避難指示 半径10km 5時44分 避難指示 半径20km 18時25分 3号機水素爆発・2号機ベント開かず 2号機損傷の可能性 4号機水素爆発 屋内退避 半径20～30km 「SPEEDI」一部公開される 自主避難勧告 半径20km～30km 計画的避難区域の公表

平成26年 (2014)	平成25年 (2013)	平成24年 (2012)	平成23年 (2011) 5月～
5月12日 2月	10月6日 10月8日 8月30日 6月25日 4月24日	10月7日 5月19日 4月	12月7日 9月19日 8月15日 7月15日 30日 26日 4日 6月3日 22日 5月1日
国直轄除染（農地除染）開始 2週連続の豪雪	復興獅子舞開催（下組） 農村広場 特例宿泊開始（18日） 右以外は「避難指示解除準備区域」 乙8区は「居住制限区域」 避難指示区域の見直し さなぶりまつり 復活 東福沢多目的集会所（平成28年） 国直轄除染（生活圏除染）開始 国道114号小綱木トンネル開通	復興獅子舞開催（上組） 農村広場 本格除染説明会 山木屋太鼓 ワシントンDC桜まつり参加	山木屋公民館 自主閉鎖 山木屋診療所 閉鎖 一次避難開始の壮行会 生活改善センター 山木屋郵便局 閉鎖 JA山木屋支店 閉鎖 農村広場仮設住宅への入居開始 山木屋地区安全パトロール隊活動開始 山木屋出張所 閉鎖 体育館仮設住宅への入居開始 山木屋夏祭り 農村広場仮設住宅広場で開催 敬老会 中央公民館で開催（平成28年） 坂下地内で除染実証実験開始
ソチ五輪（2月） 御嶽山噴火（9月）	出雲大社、伊勢神宮遷宮	ロンドン五輪（7月）	サッカー日本女子 ワールドカップ初優勝（7月）

平成31年 令和元年 (2019)	平成30年 (2018)	平成29年 (2017)	平成28年 (2016)	平成27年 (2015)
5月1日 4月30日	10月7日 8月15日 6月24日 4月5日 3月31日	10月8日 9月20日 8月15日 7月1日 4月3日 3月31日	11月28日 10月3日 8月1日 1月31日	8月31日 3月27日
「令和」始まる 「平成」終わる	三匹獅子舞 八坂神社奉納（下組）※新獅子子 とんや祭・山木屋夏祭り（とんやの郷） 敬老会、さなぶりまつり同日開催 山木屋公民館 山木屋小中一貫校 開校式 山木屋公民館 開館（生活改善センター改め） 仮設住宅退去期限	山木屋夏祭り（とんやの郷）※雨天中止 国道一四号通行止め解除 （山木屋水境く浪江町室原） 三匹獅子舞 八坂神社奉納（上組） 敬老会 生活改善センターで開催 山木屋郵便局 再開	復興公営住宅（新中町）入居開始 山木屋診療所 診療再開 復興公営住宅（壁沢）入居開始 田んぼリンク再開	国直轄除染（生活圏除染）完了 メガソーラー発電所完成 準備宿泊開始（避難指示解除まで継続）
台風19号 被害甚大（10月）	平昌五輪（2月）	稀勢の里 横綱に（1月）	熊本地震（4月） リオ五輪（8月）	北陸新幹線 開業（3月）

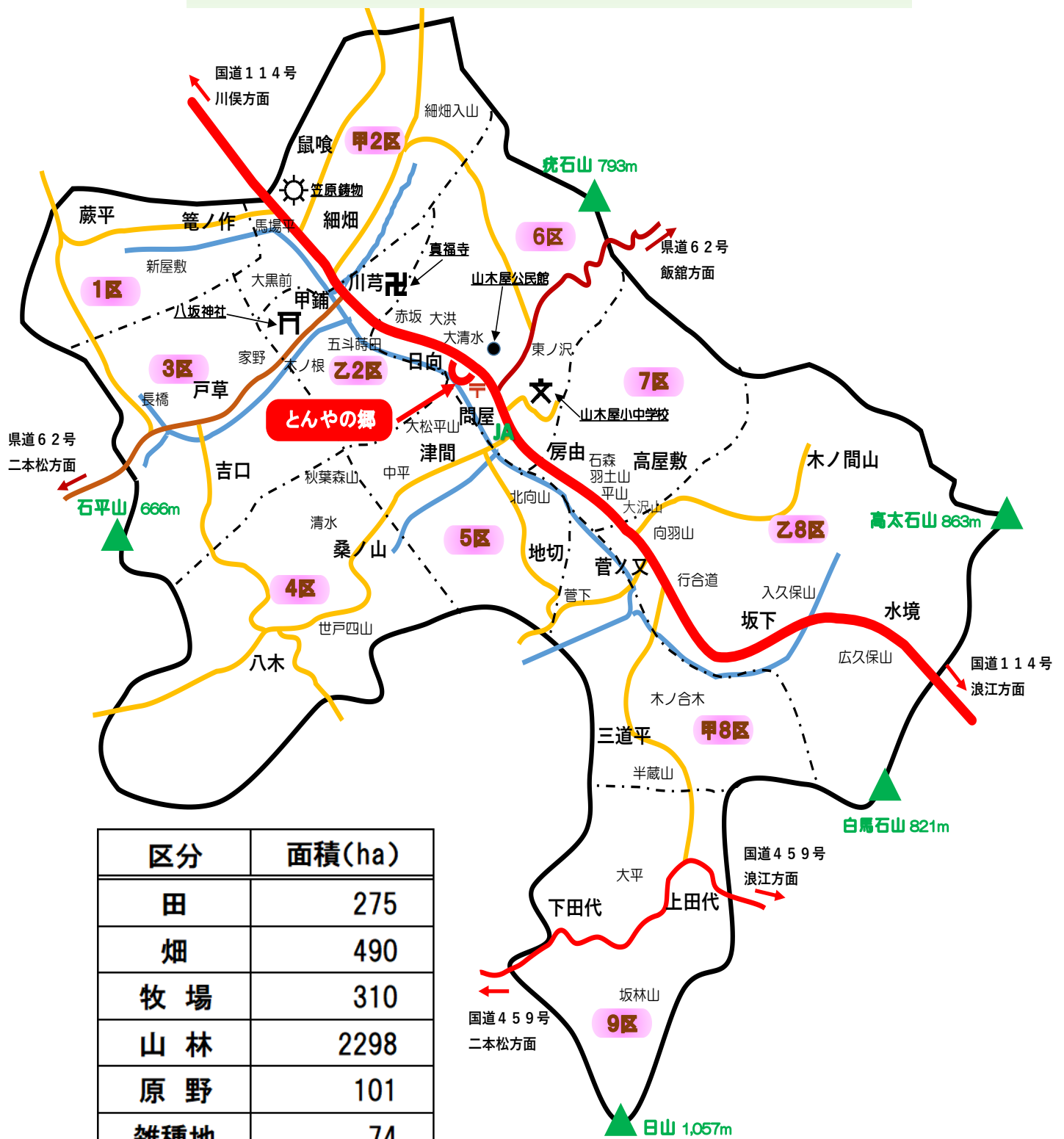
主な山木屋地区の復興事業一覧表

令和元年10月時点

復興事業の内容	事業費
地区巡回の安全パトロール	8億55,486千円
仮設・借上住宅の維持管理	1億93,450千円
農業基盤整備による暗渠排水の整備	16億78,614千円
農業基盤整備による用排水路の整備	5億58,125千円
営農再開に向けた農道舗装	5億20,087千円
道路補修舗装(委託元:復興庁)	5億18,008千円
山木屋地区復興拠点(商業施設)の建設	6億88,447千円
いぐね伐採	39,649千円
町道の除草	1億63,929千円
帰還住民の井戸掘削	7億85,239千円
住民送迎車の運行	1億 5,002千円
木戸道の舗装	1億14,157千円
新中町復興公営住宅の建設	9億 5,429千円
各地区の集会所修繕	8,202千円
山木屋小中学校の整備	11億77,649千円
山木屋幼稚園の改修	1億25,054千円
国道114号道路拡幅・歩道整備	55億84,000千円
大型トラクター・格納庫の整備	16億38,479千円
施設園芸(アンスリウム)の整備	9億40,450千円
体育館・中山工業団地第二仮設住宅の解体	86,192千円
農村広場仮設住宅の解体(未完のため現時点では予算額を計上)	2億39,600千円
環境省の除染等工事(環境省HPより)	952億42,471千円
合 計	1千121億67,719千円

川俣町原子力災害対策課調べ

山木屋地区 略図



区分	面積(ha)
田	275
畑	490
牧 場	310
山 林	2298
原 野	101
雑種地	74
宅 地	85
その他	108
計	3741

平成31年1月1日現在
資料 町民税務課

【編集後記】

震災前、過去を振り返る時の基準は、息子の年齢だった。義理の父が亡くなったのは息子が五年生の時、今いるメス犬がうちに来たのは息子が大学二年生の夏……。その次の年から基準は震災前なのか、震災後なのかに置き換わった。何という節目なんだろう。震災前、様々なことを相談に行ったお宅で、「人は竹と同じだ。節目を付けると強くなる。子供のうちは入学、卒業と、勝手に節目が付くけれど、大人になってからの節目は、自分でつけなくちゃならない。」という話をしてくださったことを思い出す。どこに避難するのか、山木屋に帰るのか帰らないのか、仕事はどうするのか、等々という、決断と節目を付けていく作業をしてきた震災後だった気がする。確かに、こうしたいという意志決定をしていくところは、強くなったかもしれない。とりあえず、今はそのままにしておこうという決断もありましたけれど。

資料の年表を作っていると、皆様の原稿が甦ってきた。年表ではたった一行、「地震発生」「避難指示」としか記せないが、その時に起こった事、感じたことは、人それぞれ山盛りだ。これは、貴重な一冊になったと感じた。

また、廣野館長が足で集めた皆様の原稿を、そのまま冊子にした方が筆者手書きの味のある物になったかもしれないが、文明の利器を使用させていただきまし

貴重な原本は、公民館で大切に保管させていただきます。ご協力ありがとうございました。

山木屋公民館 主事 吉村 弘子

とんやの郷 来場者20万人記念企画

「震災の記憶・山木屋では」

発行 川俣町

発行年月日 令和二年二月

企画・編集

山木屋地区復興拠点

『とんやの郷』

施設長 大内 浩史

山木屋公民館

館長 廣野 隆俊

副館長 廣野 太

主事 吉村 弘子

協力 山木屋地区自治会

印刷製本 株式会社 CIA

表紙・題字 廣野 卷子（戸草）